

2025年8月27日(水)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-04]

幼児期における体組成と身体活動との関係（発,測）

運動遊び推進園と一般園との比較

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-05]

幼児期における体力・運動能力の発達パターンの違いが非認知能力の形成に与える影響（発,測）

3年間の縦断的検討

*小椋 優作¹、春日 晃章²、大坪 健太³ (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学、3. 岐阜協立大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-06]

幼児を対象としたサッカーキッズプログラムにおけるメニューごとの身体活動量について（発）

*廣木 武士^{1,2}、黒川 優介²、鈴木 宏哉² (1. 横浜YMCAスポーツ専門学校、2. 順天堂大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01]

高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02]

未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）

運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03]

幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01]

第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開（史,社）

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02]

エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究（哲）

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-03]

スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）

共起ネットワークによる関与人物の検討

*山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-04]

日本におけるスケートボードの初期的展開に関する検討（史）

スケートボードパークの諸相に着目して

*塩見 俊一¹ (1. 立命館大学非常勤講師)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-05]

参加者が楽しいと感じるゆるスポーツの競技特性（リハビリテーション科学）

インクルーシブスポーツの設計を目指して

*篠永 篤志^{1,2}、小野 晃路^{1,2,3}、澤村 彰吾^{1,2,4}、瀧 慎伍^{1,2,3}、田中 亮^{1,2,3}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,3}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 広島大学スポーツセンター、4. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-06]

スポーツに対する肯定的評価に関連する要因の探索（生涯スポーツ）

ゆるスポーツ参加者の語りからの抽出

*小野 晃路^{1,2,4}、篠永 篤志^{1,2}、澤村 彰吾^{1,2,3}、瀧 慎伍^{1,2,4}、田中 亮^{1,2,4}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,4}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、4. 広島大学スポーツセンター、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

【1a1602-04】生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-01]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価①（経）

*水上 雅子¹、小野里 真弓²、江向 真理子³ (1. 杉野服飾大学、2. 尚美学園大学、3. 鶴ヶ島市スポーツ少年団)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-02]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価②（経）

*江向 真理子¹、小野里 真弓²、水上 雅子³ (1. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、2. 尚美学園大学、3. 杉野服飾大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-03]

地域スポーツ推進をめぐる中間支援組織の機能に関する事例研究（経）

広域スポーツセンター事業縮小後の現状と課題

*菅谷 美沙都¹ (1. 上武大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

【1a1702-04】生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04]

親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05]

成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発,測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜市立大学附属病院 児童精神科)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-06]

Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon（発,測）

A Randomized Controlled Trial

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育总局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

🌱 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-07]

スポーツの実施意向，職場での取組，参画状況がWell-beingに及ぼす影響に関する基礎的研究（測,教,政）

「スポーツの実施状況等に関する世論調査」のデータを活用して

*中山 正剛^{1,2}、田原 亮二³ (1. スポーツ庁健康スポーツ課、2. 九州大学大学院人間環境学研究院、3. 西南学院大学人間科学部)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-08]

デジタル社会における大学生の社会的繋がりと主観的満足度の変容（社）

中国の体育系大学生における探索的分析

*張 方舟¹、清宮 孝文¹、依田 充代¹ (1. 日本体育大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-09]

アダプテッド・スポーツの観点を地域の防災コミュニティ形成に活かす可能性に関する検討（ア）

下馬・野沢×日大 防験（防災体験）&スポーツフェスを通して

*近藤 克之¹ (1. 日本大学スポーツ科学部)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

🌱 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-01]

即時的フィードバックを用いたトレーニングの効果（測,コ）

ジャンプに着目して

*塩多 雅矢¹ (1. 東京学芸大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-02]

EMSを用いた視覚改善機器の効果（心,発,コ）

大学柔道部員を対象とした研究

*小林 咲里亜¹、青木 大¹、天野 勝弘² (1. 帝京科学大学、2. スポーツパフォーマンスデザイン)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-03]

上肢挙上位からの肩関節屈曲・伸展動作における体幹筋群への意識づけと姿勢安定性の関連について（コ）

量的及び質的観点からの検討

*遠藤 寛太¹、岩本 紗由美²、村田 宗紀²、二橋 元紀² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-04]

6秒1kp負荷全力ペダリングテストが評価する下肢能力の特性（コ）

*青木 ビクター達哉¹、後岡 直樹²、川村 卓³ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学人間総合科学研究科、3. 筑波大学体育系)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-05]

足袋型シューズの2ヶ月間の装着が瞬発力とアジリティに及ぼす効果（コ）

*天野 勝弘¹、森 克実²、田邊 真菜実³ (1. スポーツパフォーマンスデザイン、2. G5 sports、3. G5sports)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-06]

日常での草履サンダル着用が少年野球選手に与える影響（測,コ）

*宮口 和義¹、畠本 紗斗子²、坂口 雄介³、川端 健司³、宮口 貴義⁴ (1. 石川県立大学、2. 金沢工業大学、3. 北陸大学、4. 金沢大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-01]

競技会参加の目的とチームのあり方について（コ）

大学体操競技部における例をもとに

*松山 尚道¹ (1. 天理大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-02]

スポーツチームで実施するメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発（心）

スポーツ現場へのメンタルヘルス教育導入に向けて

*小塩 靖崇^{1,2} (1. 国立精神・神経医療研究センター、2. 東京大学大学院総合文化研究科)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-03]

チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討（哲）

*大友 一樹¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

【1a601-03】競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-04]

福岡県タレント発掘事業における運営システムの構築（政）
事業運営者の動向を中心に

*井上 雄貴¹ (1. 日本体育大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-05]

小中学生期を対象とするタレント発掘・育成事業における育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（アスリート育成パスウェイ）
福岡県及び山口県の事例から

*白井 克佳^{1,2}、山下 修平^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、原村 未来³、山口 真未^{1,2}、萩原 正大^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-06]

スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（社, コ, 政）
シンガポールにおける事業の品質管理とリスク管理の事例から

*小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、山下 修平^{1,2}、原村 未来³、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

【1a702-04】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-01]

「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異（教）

*中村 有希^{1,2}、梅澤 秋久³ (1. 九州共立大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 横浜国立大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-02]

インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教, ア）

*萩原 大河¹ (1. 姫路市立水上小学校)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-03]

文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業におけるCulturally Responsive Teachingに関するシステマティック・レビュー（教）

*戸村 貴史¹ (1. 福山大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04]

クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)

中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*斉藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05]

長距離走のICTを活用した集团的競争教材試案 (教)

チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06]

高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究 (発, 測, 教)

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-01]

エージェンシー概念の実践化プロセスの解明 (教, 政)

中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*草津 晃平¹ (1. 唐津市立伊岐佐小学校)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-02]

定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果 (教)

*五十川 利心¹、浜上 洋平²、栗田 昇平² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-03]

共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究 (ア)

*綿引 清勝^{1,2} (1. 東海大学児童教育学部、2. 明星大学大学院教育学研究科)

2025年8月28日(木)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 🏢 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-18]

部活動改革に伴う教員の兼職兼業の運用に関する一考察（教）

*笠井 義明¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-19]

滋賀県大津市における運動部活動の地域移行・地域展開に関するグランドデザイン（経,教）
政策科学的アプローチによる試論

*大西 祐司¹、黒澤 寛己¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-20]

部活動地域移行における指導者確保に関する研究（社,経,政）
体育系大学生を対象としたアンケートより

*藤原 悠太¹、早田 剛¹ (1. 環太平洋大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 ■ 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20]

保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教）

男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21]

「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成（心）

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-22]

体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感（教）

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23]

動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

■ 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-10]

学外スポーツ活動が小学生の学内身体活動レベルに与える影響（教）

心理社会的因子との関連性に着目して

*鄭 天従¹ (1. 早稲田大学大学院スポーツ研究科)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-11]

運動部活動の期待と機能が及ぼす継続への困難感（経）

中高生の抵抗条件の認識と運動者行動論からの問題提起

*常浦 光希^{1,2}、田原 陽介³ (1. くらしき作陽大学、2. 広島大学大学院、3. 青山学院大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-01]

部活動に対する生徒の主体性を育む場のデザイン（経）

*行實 鉄平¹、横山 剛士² (1. 久留米大学、2. 金沢大学)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-02]

Dose-Response Relationships Between Environmental Fitness Support and Physical Activity（発, 測）

Insights from a Large-Scale National Survey in China

*PAN XIANG^{1,2}、鈴木 宏哉²、Gao Yibo^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育总局体育科学研究所、2. 順天堂大学 スポーツ健康科学研究科)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-03]

当事者の精神障害者サッカー競技参入および継続的な参加を促す要因の検討（ア）

*秋本 成晴¹ (1. 平成国際大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-04]

スポーツサービスにおける価値共破壊（経）

車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを事例として

*宇野 博武^{1,2}、岡田 美優³ (1. 武庫川女子大学、2. 神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程、3. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期過程)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長: 林 洋輔(大阪教育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-12]

総合型地域スポーツクラブの世代交代の課題（社, 経, 政）

人材循環と理念継承の視点から

*眞鍋 隆祐¹ (1. 彰栄保育福祉専門学校)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-13]

体育・スポーツ経営学に関する研究トピックの動向（経）

トピックモデル分析による学術論文（2000ー2024年）のレビュー

*柴田 紘希¹、奥田 直希²、林田 敏裕³、宇野 博武⁴ (1. 日本体育大学、2. 大阪学院大学、3. 筑波大学、4. 武庫川女子大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05]

女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ（社）

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度（PBIAS）の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06]

女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ（社）

ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07]

中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08]

「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一郎(帝京科学大学)

9:20 ~ 9:40

[健康福祉-B-04]

知的障害特別支援学校の生徒は水泳授業に何を期待しているか？（発,教,ア）

高等部生徒を対象とした意識調査より

*岩井 祐一¹、森山 進一郎² (1. 東京学芸大学附属特別支援学校、2. 東京学芸大学)

9:40 ~ 10:00

[健康福祉-B-05]

ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査（生）

*西村 一樹¹ (1. 広島工業大学環境学部食健康科学科)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:30 ~ 13:50

[健康福祉-A-01]

一事例研究によるSNS運動プログラムの効果の検討（測,コ）

*兼山 真愛¹ (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科)

13:50 ~ 14:10

[健康福祉-A-02]

日中の眠気に対する等尺性ハンドグリップトレーニングの効果検証（生）

主観および客観評価を用いたパイロットスタディ

*山形 高司¹ (1. 川崎医療福祉大学)

14:10 ~ 14:30

[健康福祉-A-03]

転倒予防アセスメント・ツール“Strömqvist Bååthe Falling Competence” (SBFC)日本語版の開発（介）

*曾我部 晋哉¹、ソリドーワル マーヤ² (1. 甲南大学、2. 津田塾大学)

14:30 ~ 14:50

[健康福祉-A-04]

バーチャルリアリティを用いた簡便な歩行分析システムの精度検証（測）

高齢者の歩行支援への応用を目指して

*脇 遼太郎¹、井上 純輝^{1,2}、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. ソニー株式会社技術開発研究所)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-07]

都市空間におけるスケートボードを「犯罪化」するポリティクスとは？（社）

スポーツ犯罪学的試論

*市井 吉興¹ (1. 立命館大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-08]

セメンヤ事件における対立構図の再考（哲）

身体的インテグリティ対女子競技のインテグリティ

*松宮 智生¹ (1. 東洋大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-09]

スポーツ・ハラスメント概念設定の必要性（コ）

*秋元 香穂¹、岡出 美則² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに向
かうのか？

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01]

JICA海外協力隊体育隊員の活動考察 (人)

オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02]

中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化 (教)

自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勸¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03]

野球未開の地における競技普及 (経,人,政)

MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04]

なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか？ (社)

日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-10]

嘉納治五郎は絞技と関節技をいかに考えていたか (人)

*稲川 郁子^{1,2} (1. 日本体育大学、2. 公益財団法人全日本柔道連盟医科学委員会)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-11]

伝統芸能の身体教育における「なぞり」と「さぐり」の構造に関する研究 (社)

*迫 俊道¹ (1. 大阪商業大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-12]

蹴鞠未経験者を対象とした「蹴鞠技術習得」までのプロセスに関する研究 (人)

*阿羅 功也¹ (1. 旭川工業高等専門学校)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-B-13]

学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討（教）

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14]

ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点（史）

*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-07]

大学サッカー選手におけるロングキックの飛距離と利き足、非利き足の筋力、筋量の関係（生,バ,測）

*加藤 雄一郎¹、阿部 渉² (1. 平成国際大学、2. アローレ八王子)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-08]

大学トップレベルのサッカー選手における突破のドリブル時の視線探索行動（コ）

*多賀 健¹ (1. 苫小牧工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-09]

全地球カメラ映像を活用したサッカーの個別練習の検討（コ,教）

*寺田 進志¹ (1. 大阪国際大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-13]

競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性の比較 (コ)

GPSデータを用いた競技力向上のための比較分析

*稲田 鎮¹、中野 貴博¹、中本 光彦¹、水野 太智¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-14]

セイバーメトリクス指標を用いた大学野球の勝率に影響を与える要因の検討 (コ)

*八田 歩¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学 体育学部)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-15]

世界男子ハンドボール競技のセットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレー (コ)

*宮代 花菜¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-10]

女子100mハードルレース分析 (測)

12秒台から18秒台を対象にして

*木村 加乃¹、後藤 悠太²、欠畑 岳³、磯 繁雄³ (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 名城大学法学部、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-11]

全国高校総体陸上競技800mにおける通過順位および位置取りと最終順位の関係 (コ)

*佐藤 公一郎¹、丹治 史弥²、杉田 正明³ (1. 東海大学体育学研究科、2. 東海大学体育学部、3. 日本体育大学体育学部)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-12]

空手組手競技大学生競技者を対象にした作戦意識とパフォーマンスの関係 (測,コ)

*大徳 紘也¹、西山 哲成¹、大石 健二¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-16]

レクリエーションレベルのゴルファーのスコア向上に必要な打球およびスイング特性 (バ)

*山下 佳倫¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-17]

栗山英樹監督のコーチングにみるアスリートセンタードと4つのコーチングアプローチの統合的活用 (哲,コ)

*佐藤 直央¹、佐良土 茂樹² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-18]

女性競技者とコーチの関係性に関する実態調査 (社,心,コ)

部活動現場における課題を中心に

*天羽 礼¹ (1. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-B-07]

福岡県タレント発掘事業からトップアスリートに至った選手におけるアスリート選抜時の要件と過去の競技経験の特徴 (コ)

*山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-B-08]

中央競技団体におけるアスリート育成パスウェイモデルの活用実態に関する研究 (経,コ)

*山下 修平^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、山口 真未^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-B-09]

スポーツタレント発掘育成事業からトップアスリートに到達した者の特徴 (アスリート育成パスウェイ)

体格・体力面に着目して

*萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-B-10]

世界トップレベルの兄弟姉妹アスリートの競技生活における相互関係のあり様（コ）

*高木 菜那¹、清野 隼²、尾縣 貢³ (1. Nanavy株式会社、2. 筑波大学体育系、3. 福井工業大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-B-11]

女性アスリートの育成段階によるコンディショニング行動の分析（生）

女性アスリート育成パスウェイ構築のために

*中村 有紀¹、中村 真理子¹、門馬 怜子¹、松田 知華²、相澤 勝治³、鈴木 なつ未⁴ (1. 日本スポーツ振興センター／ハイパフォーマンススポーツセンター／国立スポーツ科学センター、2. 名古屋大学、3. 専修大学、4. 拓殖大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 🏠 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-07]

演題取り下げ

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-08]

中学校保健体育科教師Aの不安から自信への軌跡（教）

第62回全国学校体育研究大会を舞台とした約1年半のアクションリサーチ

*木原 慎介¹、佐藤 若²、佐藤 裕行³ (1. 東京国際大学、2. 山形県立南陽高等学校、3. 山形県教育局)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-09]

大阪府における体力水準の高いA市教育委員会の取り組み（教）

子どもの体力向上に向けた施策の実態

*山本 聖也¹、藤浪 大輔²、小林 博隆¹ (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学大学院)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 皿 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

【2a604-06】学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07]

小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果
(教)

マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08]

体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫 (発)

ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09]

上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える
影響 (教)

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 皿 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

【2a701-03】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-10]

学校体育の起点の再考：身心一体科学 考え方と方法 (哲,生)

理科と体育の教育の狭間で抜け落ちる「生きている自分」

*跡見 順子¹、藤田 恵理²、清水 美穂¹ (1. 帝京大学先端総合研究機構、2. 帝京大学医療技術学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-11]

多様な学習者が共に学びあうための教材開発 (哲)

ルールや条件の設定をととして

*森田 啓¹、高橋 浩二²、中島 早苗⁵、戸枝 美咲⁶、佐藤 和⁴、小谷 恭子⁸、河鱈 一彦⁷、畑 孝幸³ (1. 大阪体育大学、2. 長崎大学、3. 東海学園大学、4. 千葉工業大学、5. 共立女子短期大学、6. 日本女子大学、7. 関西学院大学、8. 帝塚山学院大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-12]

SUSTAINABILITY IN SPORTS SCIENCE: RESEARCH GROWTH AND GLOBAL INFLUENCE
(政)

A BIBLIOMETRIC STUDY

*PONUGUPATI PREMANAND¹ (1. VICE- PRESIDENT , NAPESS)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 皿 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

【2a704-06】学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10]

大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究（コ,教）
運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11]

器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）
側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12]

学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度に与える影響（発,測,教）
小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 皿 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

【2a801-03】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13]

女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善（教）

*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-14]

国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）
Webシラバスに基づく分析から

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-15]

体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果（生,介）
自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 ■ 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

【2a804-07】学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-13]

「心臓の位置」の正答者は大学生が小学6年生よりもかなり少ない（保）
素朴概念の存在が引き起こす心肺蘇生法の指導のためエビデンス

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-14]

胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響（コ）
高校生を対象に

*福岡 小百合¹、寺山 由美²、広野 泰子²、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院/追手門学院中・高等学校、2. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-15]

タグラグビーに特有の「易しさ」の再考（教）

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院教育学研究科)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-16]

タグラグビーのルールをやさしく学習できるゲーム型教材の提案（教,政）
小学校中学年の児童を対象とした授業分析からの検証

*鈴木 利也^{1,2}、佐川 哲也³ (1. 小松市ラグビーフットボール協会、2. 石川県ラグビーフットボール協会、3. 金沢大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 9:40 ■ 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

【2a901-02】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-16]

中学校における、主体的・対話的なダンスの授業作り（教）
よりよいダンス授業実践を目指す教師とのアクションリサーチを通して

*宮本 乙女¹ (1. 日本女子体育大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-17]

期間記録法から見た模擬授業の課題点（教）

*足立 美和¹ (1. 共立女子大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 ■ 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-17]

保健体育授業における「原則、男女共習」を考える（測）

共習授業と別習授業を体験した大学生の意見および感想

*松田 繁樹¹、山田 淳子²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 龍谷大学、2. 滋賀大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-18]

中学校体育授業のバレーボールにおける男女共習と別習の違いが生徒の学びに与える影響（発,教）

*山田 淳子¹、松田 繁樹²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 滋賀大学、2. 龍谷大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-19]

演題取り下げ

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-04]

幼児期における体組成と身体活動との関係（発,測）

運動遊び推進園と一般園との比較

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-05]

幼児期における体力・運動能力の発達パターンの違いが非認知能力の形成に与える影響（発,測）

3年間の縦断的検討

*小椋 優作¹、春日 晃章²、大坪 健太³ (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学、3. 岐阜協立大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-06]

幼児を対象としたサッカーキッズプログラムにおけるメニューごとの身体活動量について（発）

*廣木 武士^{1,2}、黒川 優介²、鈴木 宏哉² (1. 横浜YMCAスポーツ専門学校、2. 順天堂大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-04] 幼児期における体組成と身体活動との関係（発,測）
運動遊び推進園と一般園との比較

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

本研究は、就学前施設における身体活動に関わる取り組みと幼児の体組成との関係について明らかにすることを目的とした。対象は5歳児793名（男児397名、女児396名）であった。調査項目は、体格項目として、身長と体重、BMIの3項目。また体組成の測定には体組成成分分析装置（In Body270）を用いて体脂肪量（FM）と除脂肪量（FFM）を測定し、体脂肪率（%FM）、体脂肪量指数（FMI）および除脂肪量指数（FFMI）を算出した。分析に際して、誕生月と測定月を用いて測定時年齢を算出した。運動遊び推進園と一般的な保育・教育を行う就学前施設（一般園）における体格および体組成の差を検討するために、性別に体格3項目および体組成5項目についても検定を行った。分析の結果、身長とBMIにおいて、男女ともに有意な差が認められ、一般園より運動遊び推進園の方が、身長は高くBMIが低い値を示した。また体組成5項目において、男女ともに有意な差が認められ、一般園より運動遊び推進園の方が、FMは低くFFMが高い値を示した。また%FMとFMI、FFMIにおいて有意な差が示され、一般園より運動遊び推進園の方が、%FMおよびFMIは低くFFMIが高い値を示した。これらの結果から、就学前施設における身体活動に関わる取り組みが体組成の発育に影響しており、運動遊び推進園の幼児は一般園の幼児と比較して、脂肪が少なく筋肉が多い体組成の特性を有していることが示唆された。また測定時の年齢は、男児は運動遊び推進園より一般園の方が高く、女児は有意な差が認められなかった。また、身長は男女ともに運動遊び推進園の方が有意に高い値を示したことから、幼児期における身体活動は長育にも影響を与える可能性が推察された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-05] 幼児期における体力・運動能力の発達パターンの違いが非認知能力の形成に与える影響（発,測）

3年間の縦断的検討

*小椋 優作¹、春日 晃章²、大坪 健太³ (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学、3. 岐阜協立大学)

本研究の目的は、年少時から年長時までの縦断的データを用い、体力・運動能力の発達パターンの違いが、非認知能力の形成にどのような影響を及ぼすかを検討することである。対象は、年少時および年長時に、7項目からなる幼児用体力テストおよび7要素・16設問からなる非認知スキル測定を実施した559名（男子279名、女子280名）であった。体力テストの結果から、主成分分析により第一主成分得点を算出し、性別および年齢別（0.5歳区分）でTスコア化した体力総合得点を指標とした。非認知能力測定は担任保育者による5段階評価（平均的な幼児を3とする）を行い、各要素における設問の評価を平均値化し、各要素の非認知能力得点とした。その後、体力総合得点（Tスコア）に基づき、年少時に50未満→年長時に55以上となった「相対的向上群（17名）」と、年少時に55以上→年長時に50未満となった「相対的低下群（24名）」に分類し、各要素の非認知能力得点の経年変化について検討した。分析には、一要因（学年）のみ対応のある二要因（学年×群）の分散分析を用いた。分析の結果、学年間に主効果が認められたのは、意欲得点、自制心得点、および回復力&対処能力得点であり、いずれも年少時より年長時の得点が高かった。群間に主効果が認められたのは、忍耐力得点と創造性得点であり、いずれも相対的向上群の得点が相対的低下群より低かった。また交互作用はどの項目においても認められなかったが、相対的向上群は相対的低下群よりも、年少時から年長時にかけて非認知能力が発達している傾向がみられる項目もあった。以上の結果より、年齢の上昇に伴って非認知能力が向上する傾向が見られる一方で、体力・運動能力の発達パターンによっては大きな違いは見られないことが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-06] 幼児を対象としたサッカーキッズプログラムにおけるメニューごとの身体活動量について（発）

*廣木 武士^{1,2}、黒川 優介²、鈴木 宏哉² (1. 横浜YMCAスポーツ専門学校、2. 順天堂大学)

幼児期の身体活動について、中高強度身体活動（MVPA）を含む身体活動と多様な基本動作を行うことが重要である。これらを経験するプログラムとして、日本サッカー協会が推奨するサッカーキッズプログラム（以下、SKP）がある。SKPのプログラムにおいては、量的（MVPAの発現量）、また、質的（基本動作の発現）に分析を行ないSKPの特徴を明らかにした報告がある。本研究では、実施されているメニューの活動強度および基本動作の観点から各メニューをプロファイルし、SKP遊びmapを作成することを念頭に、事例的に実際にSKPを行った際に用いたメニューの活動強度に着目し分析を行うこととした。本研究の目的は、SKPで実施したメニューごとの活動強度の特徴について明らかにすることである。対象は、年長児12名（男児6名、女児6名）で、ロングパイル人工芝のサッカー場を縦約30 m、横約25 mに区切りSKPを実施した。SKPの内容は鬼ごっこ、ボール投げ上げ・キャッチ、リレー、サーキット、動き作り、ゲーム（4分程度を3回実施）とした。活動強度は身体活動量計を用いて計測し、幼児用のMETsに変換したうえで、3 METs 以上をMVPAとし、各メニューの活動強度（平均、最大値、最小値）、メニュー実施時間に占めるMVPAの割合を算出した。その結果、平均MVPAが最も高かったメニューは鬼ごっこ（ 4.1 ± 0.7 METs）で次にゲーム（ 4.0 ± 0.5 METs）であった。それぞれの最大MVPAの平均は、鬼ごっこが 8.7 ± 1.7 METs、ゲームが 7.7 ± 2.1 METsであった。メニュー実施時間に占めるMVPAの割合は、ゲームが71.3%であった。本結果から、今回実施したメニューでは、ゲームでは最大MVPAでは他のメニューよりも低値である一方、MVPAの占める割合が多く、MVPAの確保ができるメニューであることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01]

高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02]

未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）

運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03]

幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛一² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01] 高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

本研究は、高校までの運動部活動・スポーツクラブ（SC）の活動経験がPhysical Literacy（PL）の身体的領域に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

対象は、G県の公立高等学校に通う男子407名、女子303名とした。PLの測定は、日本版PL評価法を使用した。質問紙は、身体的領域13項目で構成され、5件法で回答を得、得点化した。運動部活動・SCの活動経験は、中学及び高校の部活動・クラブ活動について、個人競技、集団競技、芸術、無所属で回答を得、中学・高校ともに個人競技の群を「個人群」、集団競技の群を「集団群」、芸術及び無所属の群を「非運動部群」の3群に区分し分析に用いた。本研究では、中学・高校期に異なる種類の部活動に所属している生徒は対象から除いた。性別及び運動部活動・SCの活動経験の違いによるPLの差を検討するため、対応のない二要因分散分析を適用した。また、有意な主効果が認められた場合には、多重比較検定を行うとともに効果量を算出した。

分析の結果、全身持久力、スピードに関する設問において有意な交互作用が認められた。多重比較検定の結果、両設問とも、男子では、個人群が非運動部群より、集団群が個人群、非運動部群より有意に高かった。女子では、個人群、集団群が非運動部群より有意に高かった。集団群では、男子が女子より有意に高かった。運動部活動・SCに関して、身体的なリズム感に関する設問以外の設問において有意な主効果が認められた。多重比較検定の結果、およそ全ての設問において、個人群、集団群が非運動部群より有意に高かった。また、6項目において、集団群が個人群より有意に高かった。中高生期に継続して運動部活動・SCに所属している生徒は、そうでない生徒よりも高い身体能力を有すると推測され、競技に求められる運動能力によって、得意とする体力特性に違いがあると考えられる。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02] 未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）
運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

現在、未就学児から学童期までの運動プログラムやトレーニング法の開発が様々に展開されているが定型発達にこだわりすぎるという問題点がある。そのため発達の個人差が十分に考慮されず、できる・できないの二分法的な評価になりやすく、特別支援が必要な子供たちへの配慮が不十分なものとなる傾向があり、その結果、子供達自身の主体性や創造性が抑制的に捉えられ、指導者の視野が狭くなるなどという問題点が一般的に指摘されている。

本研究では、自立するまでの動き、その後の匍匐、つかまり立ちや自立歩行などの移動の動き、体幹の動き、四肢や頭部の動きとの連動性に注目し、この動きを豊かにすることを狙いとした運動観察と指導の在り方を考察する。そこに注目する理由は、その後の発達のための基礎ないしは背景に気づき、発達支援の取り組みもたえずこの点に立ち戻りつつ進められなくてはならないと考えたからである。筆者らの取り組みは、「今できる体幹・四肢・頭部の動き」に着目し、その組み合わせやバリエーションを楽しみ広げることによって（分化と再生）、からだの面だけではなく非認知能力を含むこころの面の発達の現在値を豊かにする、質の高い運動環境の提供をねらいとしている。こどもたちの多様な移動運動（手足のクロールリング、はいはい、ずりばい、つかまり立ち、左右支持足の交代、歩動作、など）に着目し、1. 体幹の動きを中心とした、四肢・頭部の動きとの連動性をたかめる協調運動の観察評価、2. 主動作に対する準備的な導出動作（反動動作）の機能性をたかめる協調運動の観察評価、3. 動作の緊張と弛緩の流れや調和をたかめる協調運動の観察評価を提案する。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03] 幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛一² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

【背景】幼児の扁平足と運動能力との関係において扁平足の幼児は、運動能力が低いとする報告もあれば、両者に関係は認められなかったとする報告もある。しかしながら幼児の身体活動量が、足部舟状骨高に及ぼす影響について明らかにされていない。【目的】本研究は、幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響について検討することを目的とした。【方法】対象は、4歳から5歳の幼児74名(男児32名、女児42名)であった。日常の身体活動量の測定は、3軸方向の加速度計であるActiGraph wGT3X-BT (4.6×3.3×1.5cm, 19g) を用いた。加速度計は、入浴、水泳を除いて右腰部に装着して専用のベルトに固定し24時間一週間連続して測定した。日常の身体活動量は、先行研究を基に歩数（以下SC）、座位行動、低強度身体活動、中強度身体活動（以下MPA）、中高強度身体活動（以下MVPA）、高強度身体活動を分析した。足部形状の測定は、三次元足形計測装置INFOOT 2を用いて測定した。INFOOT 2は、ヒトの足の形状とその解剖学的寸法を計測する光学三次元計測機器であった。対象には、足部の解剖学的計測点に基づき、舟状骨下端に測定機器の製造会社が推奨している直径5mmのランドマークを貼付した。左右対称性指数は、Symmetry index (SI)として算出した。SI= (右足舟状骨高-左足舟状骨高) / (右足舟状骨高+左足舟状骨高×0.5) 【結果および考察】日常の身体活動量は、足部舟状骨高に関係が認められなかった。しかしながら平日の歩数、全日および平日のMPA、全日および平日のMVPAは、足部舟状骨高の左右差に負の相関関係が認められた($p<0.05-0.01$)。以上のことより、幼児の日常の身体活動量は、足部舟状骨高の左右差が小さくなる可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01]

第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開（史,社）

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02]

エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究（哲）

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-03]

スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）

共起ネットワークによる関与人物の検討

*山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01] 第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開 (史,社)

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

本研究は、1988年第24回オリンピック競技大会の名古屋市による招致活動（以下、名古屋招致）に対する市民運動の展開について取り上げる。名古屋招致に関する研究では名古屋招致の敗因を問うことが主題となり、その中で名古屋招致に対する市民の反対運動の存在が言及されている。このように市民による運動は、名古屋招致の反対運動として評価されている一方で、名古屋市政に対する市民運動であるという側面については、十分に検討がされてきていない。

そこで本研究では、①当該期の名古屋市政と名古屋招致の関係を整理すること、②名古屋招致に対する市民運動を展開した複数の団体の論理と活動の分析を行うことで、名古屋招致をめぐる名古屋市政と市民運動の関係について明らかにする。

1977年8月に愛知県知事の仲谷義明がオリンピック招致構想を明らかにして以降、名古屋招致は中部圏の政財界によって検討が進められていく。こうした状況に市民の中には名古屋招致に関する検討が「市民の不在」のまま進んでいると訴えて、市民に対する情報公開や意思決定の参画を求める市民団体が登場する。いくつかの団体による活動は「名古屋オリンピックを考える市民連絡会議」の結成へとつながり、名古屋招致に対する市民運動の展開が本格化していくのである。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02] エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究 (哲)

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

本研究は、エコロジカル・アプローチに基づき提示する体育授業における評価方法を、エコロジカル・アプローチの思想的基盤から考察することを試みるものである。エコロジカル・アプローチの観点から体育における〈できる〉を捉えると、それは身体と環境のマッチングとしてのケイパビリティである。そのため、学習者の〈できる〉は、学習者が環境に合わせて自らの身体能力を変えるだけでなく、環境を変えることによって開発することが可能であり、学習者が〈できる〉を生み出すために、自らの身体能力にマッチした環境をどのように改変するのかという、環境を変える創造性という評価基準を新たに提示することができる。本研究では、このような創造性をどのように評価することができるのかについて、エコロジカル・アプローチの思想的基盤として位置づけることができる、メルロ＝ポンティの現象学的身体論から考察を行った。メルロ＝ポンティによれば、行動はその構造に応じて「癒合的形態」「可換的形態」「象徴的形態」に分類でき、特に「象徴的形態」は人間に特有の行動の形態であり、同一の主題を様々な表現することができるパースペクティブの多様性を持つ。例えば体育の逆上がりでは、一見すると補助器具としての役割を持たない用具を補助器具として捉えたり、後ろ向きの回転という同一の主題を跳び箱の上やマットの上など様々な環境で表現したりできることが象徴的形態であると考えられる。体育の目的・目標は「ヒトの身体面からの人間化」であり、このことをメルロ＝ポンティの行動の形態を基に捉えるならば、それは行動の形態が象徴的形態へと移ったときであるといえる。そのため、体育授業における環境を改変する創造性は、環境の観点から見たときに身体能力をどのように機能させることができるのか、というパースペクティブを変えること・パースペクティブの多様性によって評価可能になると考えられる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

16:10 ~ 16:30

**[スポーツ文化-B-03] スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）
共起ネットワークによる関与人物の検討***山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

ライフスキル（LS）は「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」（WHO, 1997）である。スポーツを通じたLS形成では環境、とりわけ指導者の影響が大きいとされるが、LSは複合的概念であり、LS教育では重点スキルを絞った方が効果的と指摘されている。したがって、LSを構成する各要素ごとに形成へ寄与する人物を把握することが不可欠であるが、現状では十分に検討されていない。本研究は、LSの構成要素別に、その形成に寄与する人物を同定することを目的とした。関西のスポーツ系大学に在籍する学生アスリート180名（男性105名・女性75名、 19.73 ± 0.54 歳）を対象に、2020年10月に第1段階調査として大学生アスリート用ライフスキル評価尺度（島本ほか，2013）の回答を得た。続く2020年11月～2021年2月には第2段階調査として、同尺度が想定する10因子（ストレスマネジメント、目標設定、考える力、感謝する心、コミュニケーション、礼儀・マナー、最善の努力、責任ある行動、謙虚な心、体調管理）に関する具体的エピソードを自由記述形式で収集した。両調査はいずれもオンラインで実施した。得られたテキストをKH Coderで形態素解析し、出現回数20以上かつJaccard係数0.1以上を条件に因子別の共起ネットワーク分析を実施した。分析の結果、個人内スキル（目標設定、最善の努力、ストレスマネジメント、体調管理、考える力、謙虚な心）は「指導者」と強く共起し、対人スキル（コミュニケーション、礼儀・マナー、感謝する心、責任ある行動）は「チームメイト」「友人」「先輩」と結び付いた。以上より、スポーツを通じたLS教育では、個人内スキルには指導者による明示的指導を、対人スキルにはピア学習や集団活動の設計を重視することが効果的であることが示唆された。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-04]

日本におけるスケートボードの初期的展開に関する検討（史）

スケートボードパークの諸相に着目して

*塩見 俊一¹ (1. 立命館大学非常勤講師)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-05]

参加者が楽しいと感じるゆるスポーツの競技特性（リハビリテーション科学）

インクルーシブスポーツの設計を目指して

*篠永 篤志^{1,2}、小野 晃路^{1,2,3}、澤村 彰吾^{1,2,4}、瀧 慎伍^{1,2,3}、田中 亮^{1,2,3}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,3}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 広島大学スポーツセンター、4. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-06]

スポーツに対する肯定的評価に関連する要因の探索（生涯スポーツ）

ゆるスポーツ参加者の語りからの抽出

*小野 晃路^{1,2,4}、篠永 篤志^{1,2}、澤村 彰吾^{1,2,3}、瀧 慎伍^{1,2,4}、田中 亮^{1,2,4}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,4}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、4. 広島大学スポーツセンター、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:30 ~ 15:50

**[スポーツ文化-B-04] 日本におけるスケートボードの初期的展開に関する検討
(史)**

スケートボードパークの諸相に着目して

*塩見 俊一¹ (1. 立命館大学非常勤講師)

本発表の目的は、日本におけるスケートボードの1970年代から80年代初頭の展開について、同時期のスケートボードパーク(以下、パーク)の様相を踏まえて検討することにある。今日、スケートボードは五輪等での実施を含め注目を集め、研究も一定蓄積している。イアン・ボーデンはスケートボード文化研究において、1970年代の日本のスケートボードシーンが「非常に特徴的」だと指摘しているが、これまでの研究状況を概観すると、この点は十分には明らかにされてこなかった。この、いわば日本のスケートボード文化の根元を確かめることは、スケートボードを含むライフスタイルスポーツへの理解や考察の進展に資する可能性があるだろう。このような視点から、発表者はこれまで日本におけるスケートボード揺籃期について、サーフィンとの関わりや統括組織のあり方とその変化、またビジネス化やそれを目指すステークホルダーの諸関係などを検討し、当該時期のスケートボード文化の実相に迫ることを試みてきた。

本発表ではこれらの点を踏まえたうえで、当該時期のパークに関わる状況という側面に着目する。当時のパークとしては太東スケートボードセンター(現千葉県大東市)などが挙げられるが、少なくとも70年代後半には、都市部や郊外などにおいて、様々な背景や形態によって複数のパークやそれに類するものが設置、運営された形跡がある。そしてそこには当時のアメリカのスケートシーンや日本のレジャーを取り巻く状況などからの影響を含め、日本におけるスケートボード文化の性格との連関が垣間見られる。本発表ではとりわけ、管見の限りでは十全には注目されていない同時代の関西地区のパークに目を配り、当該時期の資料等から実態を明らかにすることを通じ、日本のスケートボード史の豊富化を目指す。なお各事例の詳細等については当日の発表で述べる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

「1a1402-04」スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:50 ~ 16:10

「スポーツ文化-B-05」参加者が楽しいと感じるゆるスポーツの競技特性（リハビリテーション科学）

インクルーシブスポーツの設計を目指して

*篠永 篤志^{1,2}、小野 晃路^{1,2,3}、澤村 彰吾^{1,2,4}、瀧 慎伍^{1,2,3}、田中 亮^{1,2,3}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,3}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 広島大学スポーツセンター、4. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

【はじめに】

運動能力や年齢、障がいの有無を問わず、多様な人が楽しめる“包摂的なスポーツ”を実現するには、楽しさや参加のしやすさを支える競技の特性を明らかにすることが重要である。こうした中、ユニークなルールや遊び心を取り入れた「ゆるスポーツ」は、誰もが参加しやすい競技として注目されている。しかし、その楽しさや参加のしやすさを生む競技特性については、十分に分析されていない。本研究は、ゆるスポーツを対象に、参加者が「楽しい」と感じる競技特性を明らかにし、インクルーシブなスポーツ設計に資する知見を得ることを目的とする。

【方法】

演者らが2024年12月に企画したゆるスポーツ体験会に参加し、アンケートの全項目に回答した24名を対象とした（午前10名、午後14名）。参加者には8種目（午前4種目、午後4種目）の競技を体験していただき、その後に「最も楽しかった」競技とその理由の回答を求めた。分析にあたっては生成AI（OpenAI-o3, OpenAI社）を用いて競技の特性をコード化し、午前と午後で「最も楽しかった」の回答頻度が多かった競技に共通する特性を探索した。

【結果】

「最も楽しかった」の回答頻度が多かった競技に共通する特性として、「チームワーク・協力」「戦略性・思考要素」「インクルーシブ性」「ユニークなルールによる意外性」の4点が抽出された。

【考察】

本調査で抽出された4つの特性は、運動能力や立場を問わず、誰もが主体的に参加し活躍を実感できる環境を生み出す鍵であると考えられる。一方で、限界点として①自由記述が簡潔で解釈に幅がある、②生成AIによる分析のため再現性に課題がある、③体験した競技がゆるスポーツ全体の一部であることが挙げられる。

【倫理的配慮】

本研究は広島大学大学院人間社会科学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した（HR-LPES-002326）。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-06] スポーツに対する肯定的評価に関連する要因の探索（生涯スポーツ）

ゆるスポーツ参加者の語りからの抽出

*小野 晃路^{1,2,4}、篠永 篤志^{1,2}、澤村 彰吾^{1,2,3}、瀧 慎伍^{1,2,4}、田中 亮^{1,2,4}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,4}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、4. 広島大学スポーツセンター、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

【はじめに】

多様性を包摂するスポーツ、すなわち、だれでも参加できるインクルーシブなスポーツを展開するためには、参加者がスポーツを肯定的に評価する要因を明らかにすることが重要である。本研究では、だれもが楽しめる新スポーツと謳う「ゆるスポーツ」の体験談を手がかりに、スポーツに対する肯定的な評価に関わる要因を探索的に抽出することを目的とした。

【方法】

本研究では、健常成人8名を対象にスポーツの楽しさを主題に半構造化面接を実施し、その逐語録を質的に分析した。生成AI（OpenAI-o3、OpenAI社）を用いて逐語録から意味単位を抽出し、コード化した。その後、研究者が文脈に照らしてコード名の適切さを確認し、必要に応じて修正を加えた。さらに、再び生成AIを用いて8名分のコード名を統合した上で、その背後にある要因を探索した。

【結果】

分析の結果、「身体・認知の同時負荷による没入」、「成功体験を通じた自己効力感の生起」、「多様性を尊重した協働」、「好奇心をくすぐる仕組み」、「安全性の知覚」、「公平性を意識した設計」の6つの要因が抽出された。

【考察】

本研究では、従来示されてきた自己効力感や他者との協働に加え、身体運動と認知課題を同時に課すことで生じる没入が新たな要因となる可能性を示した。先行研究をふまえて、同時負荷による没入が劣等感や他者評価の不安を遮断し、技能差のある参加者間にも協働的な役割を促した結果、肯定的評価が形成された可能性がある。一方、本研究は生成AIを用いた分析であり、サンプルサイズも限られるため、再現性には課題が残る。今後はスポーツにおける包摂性の概念を定義し、本研究で抽出された要因の検証やスポーツの包摂性を測定する尺度開発へと発展させる必要がある。

【倫理的配慮】

本研究は広島大学大学院人間社会科学研究科倫理審査委員会の承認を得た後に実施した（HR-LPES-002326）。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-01]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価①（経）

*水上 雅子¹、小野里 真弓²、江向 真理子³ (1. 杉野服飾大学、2. 尚美学園大学、3. 鶴ヶ島市スポーツ少年団)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-02]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価②（経）

*江向 真理子¹、小野里 真弓²、水上 雅子³ (1. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、2. 尚美学園大学、3. 杉野服飾大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-03]

地域スポーツ推進をめぐる中間支援組織の機能に関する事例研究（経）

広域スポーツセンター事業縮小後の現状と課題

*菅谷 美沙都¹ (1. 上武大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30～16:30 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:30～15:50

[生涯スポーツ-A-01] 鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価①（経）

*水上 雅子¹、小野里 真弓²、江向 真理子³ (1. 杉野服飾大学、2. 尚美学園大学、3. 鶴ヶ島市スポーツ少年団)

本研究は、鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」がまちづくりの視点を踏まえた新たな地域スポーツ活動の試みとしてマネジメントを検討することを目的とする。モデル事業となる「チームつるがしま」は、令和6年4月に「埼玉県地域クラブ活動推進計画」が発表され、埼玉県鶴ヶ島市教育委員会生涯学習スポーツ課が、地域クラブ化支援モデル事業として準備を重ねてきた。活動の目標は、行政機関や他の中学校との連携、世代を超えた指導者や異種目との交流など、地域で子どものスポーツ活動を支え、関係した人々が、生きがいややりがいを感じることができることを目指すものである。実際の事業である「チームつるがしま」の初年度の対象種目は、市内全中学校に部が存在するバスケットボール、実施場所は市内の中学校で各回を持ち回り、1回3時間、男女各4回、参加費無料で実施した。指導者は、県立高等学校部活指導者、スポーツ少年団指導者があたった。本研究では、取り組みの初期段階として、活動内容が目標に向けて効果的・効率的に機能しているか、生徒たちのニーズや活動への期待、関連するステークホルダーからの支援計画など、今後のマネジメントプロセスに有効な評価方法を意識し、調査項目を設定した。具体的には、参加生徒の基本特性、スポーツ特性およびバスケットボール特性をはじめ、今回のモデル事業での活動に関する期待や活動に参加して感じたことなどの項目に対して5段階スケールで回答を求めた。調査は、活動の中心となる参加生徒を対象に初回の事業実施前と、最終回の事業実施後および参加生徒の保護者に対し、質問紙によるアンケート調査を実施した。本モデル事業の準備段階で計画していた鶴ヶ島市の目指すまちづくりや支える人々の生きがい・やりがいなどの調査は今後の継続的な課題となるが、実際の初期事業展開での今回の調査結果から、今後のマネジメントの重要な課題等が示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-02] 鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価②（経）

*江向 真理子¹、小野里 真弓²、水上 雅子³ (1. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、2. 尚美学園大学、3. 杉野服飾大学)

令和6年4月に「埼玉県地域クラブ活動推進計画」が発表され、鶴ヶ島市では教育委員会生涯学習スポーツ課を中心に「地域クラブ化支援モデル事業」を立ち上げた。この事業は、行政機関、学校や保護者に加えて、スポーツ少年団や地域クラブ、地域コミュニティ、県内の企業や高校、大学などが協力し活動することを目標としている。子ども達の心身の成長と可能性を伸ばし、スポーツ活動を充実させ、支える人達の喜びややりがい、生きがいにつなげ、市の新しいまちづくりにつなげることをコンセプトとし、鶴ヶ島市の環境、規模、地域特性などを生かした組織・運営体制、指導体制づくりを目指していることが特徴である。初年度は種目をバスケットボールとし、令和6年12月の土日の通常の部活動の活動時間帯で、1回3時間男女それぞれ4回実施された。市内全中学校バスケットボール部の1, 2年生を対象に募集し男子61% (37名) 女子83% (44名) から参加の申し込みがあった。場所は市内の中学校体育館で各回を持ち周りで行われた。本研究では、「チームつるがしま」に参加した生徒（事業実施前後）及びその保護者（事業後）を対象に行った調査の結果から、特に自由記述での回答に対しテキストマイニングを用いて分析し、活動内容の効果や成果を検証した。その結果、生徒の活動に対する評価については「できる」「楽しい」などの肯定的な言葉が多く出現しており、継続希望の理由として「向上」「学ぶ」など、技術や知識を身に着けたいという意欲的な言葉が出現していた。また、「話せる」「他校」などの他者との関わりやコミュニケーションに関する言葉が多いことも確認された。保護者や指導者からは、運営や環境についての問題点、行政機関での調整の問題などの意見が挙げられた。今後の取り組みに向けての新たな視点や重要な課題を活用し、今後のマネジメントシステムを改善・向上させることが重要であると考えられる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-03] 地域スポーツ推進をめぐる中間支援組織の機能に関する事例研究（経）

広域スポーツセンター事業縮小後の現状と課題

*菅谷 美沙都¹ (1. 上武大学)

国は総合型地域スポーツクラブの創設を進めると同時に総合型地域スポーツクラブの育成支援の役割を担う中間支援組織として、平成11年度より各都道府県に広域スポーツセンターの設置をモデル事業として進めてきた。広域スポーツセンターは、総合型地域スポーツクラブの創設や活動を効率的に支援できる組織として期待が寄せられてきた。平成23年度に文部科学省により実施された広域スポーツセンターを対象とした調査では、全国47都道府県すべてに61の広域スポーツセンターが設置されていたことが報告されている。しかしながら同調査において、人員配置や財源確保といった広域スポーツセンターの組織運営に関する課題も浮き彫りになっており、事業の縮小化や組織体制の見直し等が既に叫ばれていた。加えて、広域スポーツセンターに関する国の実態調査はそれ以降実施されておらず、先行研究においても自治体における地域スポーツの振興にまつわる中間支援組織を対象とした研究は僅少である。

そこで本研究は、広域スポーツセンター事業の縮小化に至ったX県を事例として中間支援の実情を明らかにし、総合型地域スポーツクラブ育成支援を担う中間支援組織の役割を再度検討することを目的とした。分析視角として、櫻井（2024）が提示する中間支援の概念と機能に沿って事例の解釈を試みた。X県は、県スポーツ協会スポーツ振興センター内に広域スポーツセンターを設置していたが、スポーツ振興センターの閉鎖に伴い広域スポーツセンターは事実上形骸化し、その事業承継の一端として令和3年度に「地域スポーツ推進団体連絡会議」を国庫補助金によって組織した。クラブ現地調査やクラブ登録審査委員会事業等を実施し、会議体としてのインフラストラクチャー機能は一定の成果が見られたが、資金循環やクラブ創設支援については未だ課題が多いことが明らかになった。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04]

親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05]

成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発,測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜市立大学附属病院 児童精神科)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-06]

Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon（発,測）

A Randomized Controlled Trial

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04] 親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

【背景】近年、スポーツ活動の促進要因の1つとして「フィジカルリテラシー」が国内外で注目されている。我が国においては、第3期スポーツ基本計画の施策目標にフィジカルリテラシーが盛り込まれた。保護者のフィジカルリテラシーに着目した検討では、子どもの運動・スポーツ環境との関連性が示されている。さらに、自分の子どもと保護者自身とを重ね合わせる「スポーツ同一化」も子どものスポーツ活動に影響を与えていると考えられている。そこで本研究では、スポーツに取り組む子どもを持つ保護者のフィジカルリテラシーとスポーツ同一化に着目し、子どものスポーツ活動における保護者の役割について明らかにすることを目的とした。【方法】対象者は神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者とした。調査項目は日本スポーツ協会が開発した身体、心理、社会、認知的の4領域に分類された「フィジカルリテラシー尺度」と、「スポーツ同一化尺度」(井梅ほか, 2017)を採用した。【結果および考察】「スポーツの自信の有無」からみたフィジカルリテラシーの比較では、身体的領域のみ得意群が有意に高かった。スポーツ同一化の比較では得意群が有意に高かった。「スポーツの嗜好性」からみたフィジカルリテラシーの比較では、4領域において得意群が有意に高かった。「子どもとのスポーツの会話頻度」からみた比較では、4領域すべてに有意な差は認められなかった。スポーツ同一化の比較では、よく話す群が有意に高かった。フィジカルリテラシーの4領域とスポーツ同一化との因子間では、社会的領域および認知的領域とスポーツ同一化は有意な負の相関関係を認めた。これらの結果から、保護者のフィジカルリテラシーはスポーツに対する自信や嗜好性と関連していた。保護者のフィジカルリテラシーおよびスポーツ同一化は子どものスポーツ環境に影響する要因の一つとなる可能性が示された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05] 成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発、測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜国立大学附属病院 児童精神科)

【背景】Physical Literacy (PL) とは、生涯にわたって身体活動や運動に取り組むための動機、自信、身体的能力、知識および理解である (IPLA, 2017)。近年、PLの醸成は身体活動習慣の獲得に貢献することが示唆されている。一方で、PLは身体活動習慣を介して、生活の質 (QOL) に関与する可能性が考えられるが、これらの関係は不明である。【目的】本研究では、成人を対象にPL、身体活動、および健康関連QOLの関係を明らかにすることを目的とした。【方法】本研究では、対象者はインターネット調査会社に登録している18歳から64歳までのモニターでから募集した。性・年齢ごとに均等割り付けを行い有効な回答が得られた成人男女940人を分析対象とした。日本語版 PL4L及び日本語版 WHOQOL-26 尺度を用いて PL および QOL を得点化した。PL4L は身体領域、感情領域、認知領域、社会領域の4領域から構成され、領域ごとの得点率とこれらを平均した PL 得点を算出した。身体活動は1週間あたりの身体活動時間(分)及び行動変容ステージを用いて評価した。統計解析には共分散構造分析を用い、PL、身体活動、QOLを潜在変数と仮定し、3変数間の関連性における標準化偏回帰係数 (β [95%信頼区間]) を算出した。【結果】モデルの適合度は良好であった (CMIN/DF= 6.336、RMSEA=0.075、CFI= 0.963、GFI=0.958、AGFI=0.928)。PLはQOLと直接的に関連していた ($\beta=0.332$ [0.196,0.439])。一方、PLは身体活動と関連しており ($\beta=0.598$ [0.481,0.731])、身体活動はQOLとも関連していた ($\beta=0.245$ [0.122,0.401])。【結論】成人において、PLはQOLに直接的および身体活動を介して関連することが示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-06] Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon (発,測) A Randomized Controlled Trial

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

Background: The dawn phenomenon (DP), characterized by abnormal early-morning glucose fluctuations, poses a serious risk to individuals with T2D.

Methods: The 110 recruited individuals were randomized into three exercise groups and a control group. Each mini-cycle of 5 days was separated by 1 day (G1), 2 days (G2), 3 days (G3), and a control group (GC), respectively. Nine mini-cycles of intervention per exercise group.

Results: The final sample size was 85. Compared with baseline and GC, all three groups showed a decrease ($P < 0.01$). Differences between groups were also observed ($P < 0.01$). DP improved in cycles 7, 8, and 9. G1 exhibited the greatest change in cycle 3, peaking earlier and higher than G2 and G3. From T4 to T9, G1 showed a decreasing trend.

Conclusions: Periodic exercise effectively attenuates DP in T2D, with shorter intervals yielding earlier and greater glycemic improvements.

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-07]

スポーツの実施意向，職場での取組，参画状況がWell-beingに及ぼす影響に関する基礎的研究
(測,教,政)

「スポーツの実施状況等に関する世論調査」のデータを活用して

*中山 正剛^{1,2}、田原 亮二³ (1. スポーツ庁健康スポーツ課、2. 九州大学大学院人間環境学研究院、3. 西南学院大学人間科学部)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-08]

デジタル社会における大学生の社会的繋がりと主観的満足度の変容（社）

中国の体育系大学生における探索的分析

*張 方舟¹、清宮 孝文¹、依田 充代¹ (1. 日本体育大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-09]

アダプテッド・スポーツの観点を地域の防災コミュニティ形成に活かす可能性に関する検討
(ア)

下馬・野沢×日大 防験（防災体験）＆スポーツフェスを通して

*近藤 克之¹ (1. 日本大学スポーツ科学部)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-07] スポーツの実施意向，職場での取組，参画状況がWell-beingに及ぼす影響に関する基礎的研究（測,教,政）

「スポーツの実施状況等に関する世論調査」のデータを活用して

*中山 正剛^{1,2}、田原 亮二³ (1. スポーツ庁健康スポーツ課、2. 九州大学大学院人間環境学研究院、3. 西南学院大学人間科学部)

本研究は、運動・スポーツが人々の幸福感および充実感といったWell-beingに及ぼす影響を明らかにするための基礎資料を得ることを目的とした。具体的には、「運動・スポーツの実施意向」、「職場における運動・スポーツ推進」、「スポーツの参画状況（する・みる・ささえる）」の三つの側面に焦点を当て、Well-beingとの関係性を検討した。なお、本研究では、「令和6年度スポーツの実施状況等に関する世論調査」（スポーツ庁，2025）の二次データを使用した。分析に用いた主な項目は、「幸福感、日常生活の充実感、スポーツ実施希望頻度、職場における運動・スポーツの取組、スポーツ参画状況」とした。なお、幸福感と日常生活の充実感を合わせた得点をWell-being得点として分析を行った。主な結果は以下の通り。

1. スポーツ実施頻度および実施希望頻度がともに週1日以上である群は、他群よりWell-being得点が有意に高い結果を示した。また、週1日以上実施できていない場合でも、実施希望頻度が週1日以上である群は週1日未満の群よりも有意に高い結果を示した。
2. 職場における運動・スポーツの取組では、取組がない群が有意に低く、取組が1個の群よりも2個以上の取組がある群が有意に高い結果となった。
3. スポーツ参画状況では、3つすべてに参画している群（するみるささえる群）が有意に高く、次に2つが重なっている群（するみる群、するささえる群等）、1つのみの群（するのみ群、みるのみ群等）、非参画群の順にWell-being得点が有意に低下する結果となった。これらの結果から、運動・スポーツの実施意向や職場での運動・スポーツの取組、スポーツの参画状況がWell-beingに影響を及ぼしている可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-08] デジタル社会における大学生の社会的繋がりと主観的満足度の変容 (社)

中国の体育系大学生における探索的分析

*張 方舟¹、清宮 孝文¹、依田 充代¹ (1. 日本体育大学)

【背景】近年、AI技術の急速な普及は「第四次産業革命」とも称され、教育・福祉・スポーツの現場にも浸透している。大学生の間でもAIツールの活用が広がる一方、その使用が主観的満足度や社会的つながりに与える影響は十分に解明されていない。ソーシャル・キャピタル (SC) の水準がAIの社会的受容や主観的満足度に関与することが示されており、AI利用自体が信頼構造を再構築する双方向的作用を持つとも指摘されている。さらに、経済成長 (GDP) と満足度が必ずしも連動しない「イースタリンのパラドックス」も近年中国で注目されており、AI時代においてSCの質が人々の幸福を左右する重要な要素となりつつある。

【目的】本研究では、中国の体育系大学生を対象に、SCを結合型・橋渡し型および認知的・構造的に類型化した上で、SC水準とAIツール活用、主観的満足度との関連性を分析し、SCがAIと主観的満足度の関係を媒介する経路を明らかにすることを目的とする。

【方法】中国の体育系大学生が所属する5大学を対象に質問紙調査を実施した。EFAおよびCFAによりSCの下位因子を抽出し、クラスター分析によりSCを3類に分類した。続いて、SC・AIツール活用・主観的満足度の相関分析と回帰分析を行い、ブートストラップ法を用いて媒介分析を実施した。

【結果】媒介分析の結果、低結合型SCは、AIツール活用がSCを通じて主観的満足度を有意に低下させる負の間接効果が確認された。高結合型SCを有する学生では、AI利用とSCの関連が有意に負であるものの、SCから主観的満足度への効果が有意に正の効果を示した。また、橋渡し型SCに媒介効果は認められなかった。今後は、市民参加型のデジタル技術プラットフォーム (ビッグデータ) におけるデジタル公共圏の形成に関する可能性を検討する必要がある、縦断分析の併用も今後の課題となる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-09] アダプテッド・スポーツの観点を地域の防災コミュニティ形成に活かす可能性に関する検討（ア）

下馬・野沢×日大 防験（防災体験）&スポーツフェスを通して

*近藤 克之¹ (1. 日本大学スポーツ科学部)

N大学Sキャンパスには、危機管理学部とスポーツ科学部があり、それぞれの学部の特徴を活かした地域連携事業を展開している。その一環として危機管理学部Aゼミは、学生が町の防災を考え、実際に町歩きを行うという一連の企画を立ち上げ実践することにより、幅広い年代の住民との触れ合いのノウハウを学んだり、実学としての防災に対する企画力が醸成されるような活動を行ってきた。2023年度、AゼミではSキャンパスのあるU地区において学生が企画した防災ツアーを行った。一方でスポーツ科学部Bゼミでは、世田谷区を中心として、多様な人々が一つのスポーツに参加できるアダプテッド・スポーツの特色を生かした取り組みを行ってきた。

今回、両学部協働によるアプローチを用いて、地域住民の防災意識を高めることと、平時の地域コミュニティをスポーツによって活性化させることを目指した「防験（防災体験）&スポーツフェス」を行った結果を分析し、アダプテッド・スポーツの射程の広がりに関する議論を行うことを目的として本発表を行う。

本研究では、参加学生ならびに参加者に対するインタビューを実施し、参加学生と参加者の発話内容を用いた質的な分析方法を用いた。

参加学生の発話内容からは、事前検討していた以上に、紙風船バレーボールの実施が、参加者同士のコミュニケーションを活発化させていた様子を捉えることができた。参加者からも、紙風船を作成する過程から、どのようにしたら上手く作成できるかなど、参加者同士で会話が弾み、実施に行った紙風船バレーボールでも協力しながら楽しめた様子がうかがえた。

これらのことから、アダプテッド・スポーツの観点をを用いた地域コミュニティ形成を考える上では、スポーツをお互いにつくりあげながら実施するという内容が含まれることが効果的であると考えられた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会 【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-01]

即時的フィードバックを用いたトレーニングの効果（測,コ）
ジャンプに着目して

*塩多 雅矢¹ (1. 東京学芸大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-02]

EMSを用いた視覚改善機器の効果（心,発,コ）
大学柔道部員を対象とした研究

*小林 咲里亜¹、青木 大¹、天野 勝弘² (1. 帝京科学大学、2. スポーツパフォーマンスデザイン)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-03]

上肢挙上位からの肩関節屈曲・伸展動作における体幹筋群への意識づけと姿勢安定性の関連について（コ）
量的及び質的観点からの検討

*遠藤 寛太¹、岩本 紗由美²、村田 宗紀²、二橋 元紀² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-01] 即時的フィードバックを用いたトレーニングの効果（測,コ）
ジャンプに着目して*塩多 雅矢¹ (1. 東京学芸大学)

〔諸言〕 学校体育におけるICT活用のねらい1つはフィードバックであろう。本研究の目的は、ジャンプトレーニング中のジャンプの質を即時的にフィードバックを与えることによるパフォーマンスの向上、またトレーニングの取り組みに与える内面的な効果を検証することである。

〔方法〕 36名の中学生野球部員の垂直跳びの高さを計測し(Enode、S&C corporation製)、フィードバック群(以下、FB群)とコントロール群(以下、CON群)に分類した。トレーニングはスクワットジャンプを10回×4セットを週に3回、8週間に渡って実施した。FB群はジャンプマット(BPAT Jump、スポーツセンシング社製)上で各ジャンプをモニタリングし、自由記述でのアンケートで実施に対する内省の調査をした。トレーニング前後の測定を実施できた31名のデータを分析対象とした。

〔結果〕 トレーニング前後の垂直跳び高は、FB群では 42.3 ± 6.0 cmから 42.0 ± 7.0 cm、CON群では 40.8 ± 9.3 cmから 40.5 ± 7.8 cmであり、有意な差は見られなかった。アンケートでは「マットから出てしまうことが難しかった」、「跳んでいるうちに、今はどんどん高くなっているからこの調子で跳ぼうや、低くなっているから頑張って高くしようと考えたことが良かった」、「最初の頃よりもジャンプ力が上がっていることが実感できて良かった」などが挙げられた。

〔考察〕 本研究においてジャンプ力が向上しなかったことは、トレーニング量が不十分だったためと考えられる。また、「マットから出てしまうことが難しかった」という部員の意見から、ジャンプ時に全力で跳ぶことよりも、その場で跳ぶことが優先され、それがジャンプ力を伸ばす刺激として不十分だったとも考えられる。一方で、即時的なフィードバックは、部員たち取り組みにおいては促進因子となっていた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-02] EMSを用いた視覚改善機器の効果（心,発,コ）

大学柔道部員を対象とした研究

*小林 咲里亜¹、青木 大¹、天野 勝弘² (1. 帝京科学大学、2. スポーツパフォーマンスデザイン)

本文 私たちの生活において視力は重要であるが日本人の眼鏡等使用率は57%に及ぶ。スポーツ競技でも視力は重要な要素であるが、なんらかの視力矯正手段を用いている選手の割合は35%に及んでいる（コンタクトが最も多い：約32%）。そこで本研究では、水晶体を調整する毛様体筋にEMS技術を用いて刺激を与えることで視力を改善させる装置の視力改善効果について検証した。使用した機器はアイトレ（It's wonderful社）であった（以後IT）。被検者には座位にてIT刺激を15分間行った。刺激強度は耐えうる刺激のやや手間であり、決定は被検者に委ねた。IT前後で静的視力、フリッカー検査、動体視力検査を実施した。動体視力は複数物体追跡システム（MOT）により評価した。視力については測定後1週間の継続検査も実施した。被検者は大学柔道部員17名（男子13、女子4）であった。視力はIT前は右目 0.34 ± 0.27 、左目 0.32 ± 0.21 であった。IT後は右目 0.40 ± 0.28 、左目 0.35 ± 0.20 であり、左目で有意に改善していた。フリッカー値はIT前は 34.1 ± 3.4 であった。IT後は 37.6 ± 3.4 であり有意に向上していた。動体視力はIT前は 308 ± 22 であった。IT後は 332 ± 45 であったが有意な向上ではなかった。ITの効果持続性を検討するため施術後2日ごとに8日目まで視力検査を実施した。その結果、右目はIT前 0.34 ± 0.27 、IT後 0.40 ± 0.28 、8日後 0.39 ± 0.29 であった。左目はIT前 0.32 ± 0.21 、IT後 0.35 ± 0.20 、8日後 0.36 ± 0.25 であり、効果の持続傾向が認められた。以上のことからITは、競技者の視力向上に効果が期待できると考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-03] 上肢挙上位からの肩関節屈曲・伸展動作における体幹筋群への意識づけと姿勢安定性の関連について (コ)

量的及び質的観点からの検討

*遠藤 寛太¹、岩本 紗由美²、村田 宗紀²、二橋 元紀² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

【背景】多くのスポーツ動作において、体幹筋群の随意的収縮が姿勢安定に寄与していること報告されている。しかし、実際の指導現場では動作中の体幹筋群に対する意識づけ指導の難しさも垣間見られ、指導に対する受け手側の理解がどのように姿勢安定化に結び付いているかは不明な点も多い。そこで、本研究では肩関節屈曲・伸展動作時における体幹筋群への意識づけと動作姿勢保持との関連性を量的並びに質的観点より明らかにすることを目的とした。【方法】対象はトレーニング歴2年未満の健康男性8名とした。膝立位で上肢挙上位から肩関節屈曲90°までのチューブ抵抗下の肩関節伸展・屈曲運動（反復10回）を、体幹筋群への意識づけ有無による2条件下で実施させた。体幹筋群として内腹斜筋、外腹斜筋・脊柱起立筋から表面筋電図を記録し、動作時の筋活動量を最大随意収縮（MVC）で除し、標準化した。併せて、デジタルカメラで体幹に貼付したマーカーを撮影し、Frame-DIASを用いて矢状面上の体幹傾斜角、骨盤傾斜角、胸椎角、腰椎角の平均角度と総角変位を算出した。2条件下における各指標の変化及び関連性を量的に評価するとともに、2条件下での被験者の内省を聴取した。【結果】内腹斜筋の筋活動量は意識づけ条件により有意に増加した（ $p < 0.001$ ）。各角度平均には条件間で有意差は認められなかった。一方で、意識づけ条件では内腹斜筋の筋活動量と体幹傾斜角の総角変位に有意な相関が認められた（ $r = 0.57$, $p = 0.003$ ）。さらに、ネガティブな内省を持った被験者では、意識づけ条件においても内腹斜筋の筋活動量が低く、総角変位も大きい傾向にあった。【結論】姿勢安定化を目指した体幹筋群への意識づけ指導において、動作変化等の量的な変容のみに着目するのではなく、受け手側の内省も踏まえた意識づけにより、動作中の効果的な姿勢安定化につながる可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-04]

6秒1kp負荷全力ペダリングテストが評価する下肢能力の特性 (コ)

*青木 ビクター達哉¹、後岡 直樹²、川村 卓³ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学人間総合科学研究科、3. 筑波大学体育系)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-05]

足袋型シューズの2ヶ月間の装着が瞬発力とアジリティに及ぼす効果 (コ)

*天野 勝弘¹、森 克実²、田邊 真菜実³ (1. スポーツパフォーマンスデザイン、2. G5 sports、3. G5sports)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-06]

日常での草履サンダル着用が少年野球選手に与える影響 (測,コ)

*宮口 和義¹、畝本 紗斗子²、坂口 雄介³、川端 健司³、宮口 貴義⁴ (1. 石川県立大学、2. 金沢工業大学、3. 北陸大学、4. 金沢大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-04] 6秒1kp負荷全力ペダリングテストが評価する下肢能力の特性
(コ)

*青木 ビクター達哉¹、後岡 直樹²、川村 卓³ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学人間総合科学研究科、3. 筑波大学体育系)

本研究は、1kp負荷での短時間全力ペダリングテスト (SC1kp) が評価する下肢能力の特性を、垂直跳び (CMJ) および等尺性最大筋力 (IMTP) との比較から明らかにすることを目的とした。男子大学生野球部員15名 (20.6±0.9歳) を対象に、SC1kp (最大回転数: PCad、平均パワー: AP)、CMJ、IMTPを測定し、ピアソンの積率相関係数により各指標間の関連を検討した ($p<0.05$)。

SC1kpのPCadは、CMJの複数の動的指標と有意な正の相関関係 ($r=0.562-0.816$) を示した。APも同様にCMJの動的指標群と有意な正の相関関係 ($r=0.529-0.787$) を示した。一方、PCadおよびAPはIMTP Peak Forceとは有意な相関を示さなかった。体重で正規化したAP/BWは、CMJおよびIMTPのいずれの指標とも有意な相関を認めなかった。体重はSC1kpの体重で正規化しなかった場合の結果と有意な正の相関関係を示し ($r=0.523-0.532$)、1kpという絶対負荷が体重の影響を受けることが示唆された。

これらの結果から、SC1kpは静的最大筋力とは独立した高速度域での動的パワー発揮能力を反映する評価指標であることが明らかとなった。体重正規化後のAP/BWが他の体力指標と相関しなかったことは、SC1kpが従来の評価法では捉えきれない独自の高速度運動能力や神経筋協調性を評価する可能性を示唆する。

結論として、SC1kpは測定時間が短く簡便性に優れ、スポーツ現場において静的筋力評価を補完する有用な評価手段である。特に高速度パワーが重要な競技におけるトレーニング効果のモニタリングや選手の速度能力評価に適している。ただし、体重で正規化しなかった場合の値は体重の影響を受けるため、体格差のある選手間の比較には慎重な検討が必要である。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-05] 足袋型シューズの2ヶ月間の装着が瞬発力とアジリティに及ぼす効果 (コ)*天野 勝弘¹、森 克実²、田邊 真菜実³ (1. スポーツパフォーマンスデザイン、2. G5 sports、3. G5sports)

日本ではかつて鼻緒のついた履物が主流であった。現在でも特殊な分野では履き続けられているし、そこから派生した足袋型の履物、例えば地下足袋は今でも活用されている。さらに、カジュアル、スポーツ、足の機能改善を目的とした足袋型シューズ (TabiS) が開発・展開されている。私たちはこれまでTabiSの効果についての報告を行ってきた (2018、2019体育学会、2020愛知大学紀要、2021東京体育学会)。しかしスポーツ用のTabiSを一定期間履き続けることによる身体機能の向上に関する研究は行っていなかった。スポーツ競技の現場においては、このエビデンスは重要であると考ええる。そこで本研究ではこの点について、瞬発力およびアジリティ能力におよぼす効果を検証することを目的とした。使用したTabiSは株式会社丸五製のスポーツジョグIIであった。対照群は普段履いているシューズで活動した。介入期間は2025年1月7日～3月2日であった。シューズの使用は練習日の6日以上を着用を指示した。介入の前後でカウンタームーブメントジャンプ (CMJ) の跳躍高、ピーク速度、ピークパワー、ドロップジャンプ (DJ) の反応筋力指数 (RSI) をenode (S&C社) により測定した。また10m走、プロアジリティのタイムを光電管を用いて測定した。被検者は直近の甲子園出場をしたチームの野球部員37名 (実験群25名、対照群12名) であった。実験群ではCMJのピーク速度が2.64m/秒から2.78m/秒に、ピークパワーは3735Wから4208Wへといずれも有意に向上した。DJのRSIも2.13から2.28に有意に向上した。一方対照群では、DJのRSIのみ2.02から2.24に有意に向上していた。跳躍高は両群とも有意な向上は認められなかった。以上のことからスポーツ用TabiSは瞬発力とアジリティを向上させる効果があると考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-06] 日常での草履サンダル着用が少年野球選手に与える影響（測、コ）

*宮口 和義¹、畠本 紗斗子²、坂口 雄介³、川端 健司³、宮口 貴義⁴ (1. 石川県立大学、2. 金沢工業大学、3. 北陸大学、4. 金沢大学大学院)

近年、子どもたちの足部機能や姿勢保持機能の低下が、運動能力やスポーツパフォーマンスに影響を及ぼしていることが指摘されている。特に成長期にある少年野球選手においては、足部の機能的発達が全身の運動連鎖やケガの予防に密接に関わっており、適切な足部機能の育成の重要性が報告されている。こうした背景のもと、伝統的な履物である草履サンダル（以下、草履）が注目を集めている。草履は足指を積極的に使う構造を持ち、足底筋群や足趾の巧緻性を自然に鍛える効果があるとされ、日常的な着用により、足部の筋活動やバランス能力が向上する可能性が示唆されている。少年野球は下肢を中心とした全身運動を伴う競技であり、投球・打撃・走塁といった基本動作は、安定した足部支持と敏捷性を基盤としている。そのため、足部機能の向上が競技能力に好影響を与える可能性がある。そこで本研究では、少年野球選手を対象に、日常生活における草履着用が足部機能および運動能力に与える影響を明らかにすることを目的とした。対象は、少年野球2チームに所属する小学4～6年生の男女児童36名であった。測定項目として、10mダッシュ、立ち幅跳び、投球速度、バットスイング速度、足圧分布、および足趾把持力を測定した。足趾把持力（特に右足趾）と、バットスイング速度（ $r=0.65$ ）、投球速度（ $r=0.60$ ）、立ち幅跳び（ $r=0.48$ ）の間に中程度の相関が認められた。草履導入から半年後に再測定を行った結果、足圧分布に有意な前方変移（踵荷重から前足荷重への移行）が認められた。また、足趾把持力、立ち幅跳び、投球速度、バットスイング速度に有意な向上が認められた。一方、10mダッシュにおいては有意な差は認められなかった。日常生活に導入するだけの簡便なコンディショニングではあるが、競技力の向上および将来的な障害予防への貢献が期待される。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-01]

競技会参加の目的とチームのあり方について (コ)

大学体操競技部における例をもとに

*松山 尚道¹ (1. 天理大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-02]

スポーツチームで実施するメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発 (心)

スポーツ現場へのメンタルヘルス教育導入に向けて

*小塩 靖崇^{1,2} (1. 国立精神・神経医療研究センター、2. 東京大学大学院総合文化研究科)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-03]

チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討 (哲)

*大友 一樹¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-01] 競技会参加の目的とチームのあり方について (コ)

大学体操競技部における例をもとに

*松山 尚道¹ (1. 天理大学)

現代日本のありとあらゆる現場において「多様性」というキーワードのもとに、個人の尊重が叫ばれていることは今更強調するまでもないといえる。一方で競技スポーツの現場では、すべての選手に均等に出場機会が与えられるわけではない。大学部活動においては、競技会に出場できない選手が競技役員などで運営に回ることでその競技活動が成立しているというのも現実として受け止めなければならないだろう。部内予選などを勝ち抜いて競技会に出場権を得るためにはそれ相応の努力が必要であり、その結果の権利であることは言うまでもない。しかしながらその背景には権利を獲得できず、応援や運営サポートに回る選手も存在している。場合によってはその際の経費は自己負担であることも少なくないのではないか。出場権を勝ち得た選手は、部やチームを代表して出場するという形になり、その期待に沿った立ち振る舞いが求められるであろう。しかしながらやはり個人としての目標達成に重点を置きたくなる側面も否定できないといえる。このような際には、チームとしての規範意識を醸成させつつも、各選手の「個」を尊重させるためのバランスが重要になり、指導者等のスタッフがどのように導いていくのが非常に重要になるといえる。本発表では、大学体操競技部における例をもとに、これまでの競技に対する考え方やオフ期のトレーニング段階から競技会までの取り組み方、限られた出場権を得た後に選手がどのような想定で競技会に臨もうとしていたのかといった点に着目し、そのあり方について検討する。そこでは選手の技術向上とそれに伴ったモチベーションの高まり、一方で現代の多様な価値観の中でチームのために「個」を抑えなければならない葛藤といった様々な視点の中で、指導者が選手にどう関わっていたのかを見つめなおしていくものである。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-02] スポーツチームで実施するメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発 (心)

スポーツ現場へのメンタルヘルス教育導入に向けて

*小塩 靖崇^{1,2} (1. 国立精神・神経医療研究センター、2. 東京大学大学院総合文化研究科)

【目的】アスリートや指導者に対するメンタルヘルスサポートの必要性が高まる一方で、体系的な教育機会の不足が課題である。本研究では、IOCが公開した「Mental Health in Elite Athletes Toolkit」日本語版を活用し、国内スポーツチームにおいて実施可能なメンタルヘルスリテラシー教育プログラムを開発・導入し、その効果を探索的に検討することを目的とした。【方法】スポーツチームを対象に、メンタルヘルス研修を受けたアスリートとメンタルヘルス専門家が協働で訪問型セッションを実施した。プログラムは「試合時のメンタルの整え方」「心の健康とパフォーマンス」「セルフケアと相談行動の促進」などで構成し、視聴覚教材も併用した。事前・事後・フォローアップにおいて、競争的環境における心理的安全性 (SPSI)、メンタルヘルスリテラシー (MHL)、相談意向などを効果指標とした。【結果】本プログラムは、アスリートが自身の心の状態を言語化し、相談行動を促すことを目的に構成された。現時点では11名を対象とした暫定的な事前・事後比較を実施し、SPSIスコアは22.6から29.5 ($p < 0.001$)、MHLスコアは30.1から36.6 ($p < 0.001$) へと有意な向上が確認された。これらの結果は初期データに基づくものであり、発表当日には、対象者数を増やした上で改めて結果を報告する予定である。【結論】本プログラムは、アスリート主体の学びを促す実践的教育モデルとしての有効性を示唆している。今後は、対象チームや参加者の拡大、指導者を含めた包括的な展開、長期効果の検証が課題であり、より大規模かつ継続的な実践と検証を通じて、本プログラムの有用性と汎用性を明らかにする必要がある。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-03] チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討（哲）*大友 一樹¹ (1. 筑波大学大学院)

各中央競技団体はプロ選手や日本代表を目指す中高生アスリートに対する取り組みとして、一貫指導の観点から指導方針を作成している。指導方針では、中高生指導に対する理念として「育成」と「強化」が重視されている。日本バスケットボール協会を例に挙げれば、「育成」は主に選手個人の技術や身体能力を向上させること、そして「強化」はチームとして勝利を目指すことであると定義されている。しかしバスケットボールをはじめとするチームスポーツにおいて、コーチが選手たちに身体的な優位さに頼ったプレイをさせる状況はよく見られる。つまり、勝利のみが目指され、選手個人の「育成」が十分に行われていないのである。ここで「育成」と「強化」の定義に目を向ければ、内山が指摘しているように技術の獲得や向上は勝利という目標の実現に向けて行われるのであり、「育成」で行われることは「強化」としてそのまま言い換えることができる。つまり、勝利追求によって「育成」も実現することができてしまう定義は問題がある。では、「育成」と「強化」をどのように捉え直すべきであろうか。5種目の中央競技団体の指導方針では、「育成」と「強化」の対象が不明であり、かつ「強化」では勝利を目指すための取組が具体化されていないことに問題がある。そこで筆者は「育成」がすべての選手を対象とした、卓越性の向上であり、さらに「強化」がすべての選手を対象とした卓越性の発揮であると捉える。「育成」では目の前の試合での勝敗にかかわらず新たな技術や身体能力を習得、向上させ、「強化」では戦術選択や選手起用によって、選手の卓越性をより強め、発揮させる。新たに捉えられた「育成」と「強化」はどちらも練習、試合において行われるものであり、すべての年齢を対象とする。そして「育成」と「強化」は、繰り返し実践されることが望ましい。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-04]

福岡県タレント発掘事業における運営システムの構築（政）
事業運営者の動向を中心に

*井上 雄貴¹ (1. 日本体育大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-05]

小中学生期を対象とするタレント発掘・育成事業における育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（アスリート育成パスウェイ）
福岡県及び山口県の事例から

*白井 克佳^{1,2}、山下 修平^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、原村 未来³、山口 真未^{1,2}、萩原 正大^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-06]

スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（社,コ,政）
シンガポールにおける事業の品質管理とリスク管理の事例から

*小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、山下 修平^{1,2}、原村 未来³、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-04] 福岡県タレント発掘事業における運営システムの構築（政）
事業運営者の動向を中心に*井上 雄貴¹ (1. 日本体育大学)

近年、多くの先進国では、オリンピック競技大会などの国際競技大会を見据えた国際競技力向上への取り組みが推進されている（日比野，2018）。その施策のひとつとしては、タレント発掘・育成（Talent Identification & Development以下「TID」と略す）プログラムがあげられる。TIDプログラムは、優れた素質を有する人材を発掘・育成し、より多くのトップアスリートの世界に輩出していくプログラムである。日本で実施されるTIDプログラムは、競技団体、国、そして地方自治体におけるプログラムの3つに分類される。日本におけるTIDプログラムは、2004年に始まった福岡県タレント発掘事業以降、全国的に拡がりをみせている。

従前の研究は、優れた素質を有する人材を見過ごさないように発掘するために測定や評価の方法が模索され（関谷ほか，2018；池田ほか，2022）、世界で活躍するトップアスリートへと育成するために運動能力の特性や評価基準などが明らかにされてきた（中尾ほか，2014；谷所ほか，2017）。そのなかで、TID事業の品質の維持・向上には事業実施主体の中核スタッフの質や体制が大きく影響を及ぼすと指摘しているが（阿部ほか，2009）、地域TID事業スタッフらがどのような事業運営を展開しているのかについて明らかにされていない。

そこで、本発表では、なぜ福岡県はTID事業を実施するに至ったのか。事業運営者らが福岡県タレント発掘事業を実施する際にどのような障壁があり、その障壁を如何に乗り越えたのか。これらを福岡県タレント発掘事業の事業運営者らに行なったインタビュー調査をもとに分析し考察する。そして、地域TID事業の中心的モデルといわれる福岡県タレント発掘事業がどのように事業の基盤を築いたのか検討する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-05] 小中学生期を対象とするタレント発掘・育成事業における育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（アスリート育成パスウェイ）
福岡県及び山口県の事例から

*白井 克佳^{1,2}、山下 修平^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、原村 未来³、山口 真未^{1,2}、萩原 正大^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

日本の地方自治体が主体となって実施するタレント発掘・育成事業（以下、地域TID）は、2004年に福岡県で開始されて以降、全国各地に展開されている。地域TIDの主な手法は、個人の適性に応じたスポーツを模索する種目適性型、特定のスポーツにおいて適性を見出し選抜する種目特化型、あるスポーツのアスリートが、自身の特性を活かすことのできる別のスポーツに変わる種目最適化型、の大きく3種類が展開されている。これらの取り組みからは、東京2020大会（11名）、パリ2024大会（13名）、北京2022大会（5名）など、国際大会に日本代表選手を輩出する成果が確認されつつある。しかし、地域TIDでは、アスリートの発掘時期や競技選択のタイミング、育成プログラムの時間・頻度と日常トレーニングの妥当性などのエビデンスが不足しているのが現状であり、トレーニング量と傷害のリスクを考慮したプログラム構築や地域TID修了時の競技継続の支援体制に課題があることが指摘されている。特に、ジュニアからシニアへの移行期はアスリートキャリアの中でも最も困難な時期であり、その支援体制の整備が求められている。そこで本研究では、地域TIDにおいて多くの国際大会出場選手を輩出し、かつ事業継続年数15年以上の福岡県および山口県を我が国の先行的な好事例と位置づけ、それぞれの地域TID関係者に対して、事業評価や育成プログラム及び支援体制の構築に関する内容の半構造化インタビューを実施した。そして、抽出された課題や事業の促進要因を実証的に示すことで、他の地域TIDにも応用可能な効果的かつ効率的な事業支援策を検討することを目的とした。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏫 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-06] スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究 (社,コ,政)

シンガポールにおける事業の品質管理とリスク管理の事例から

*小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、山下 修平^{1,2}、原村 未来³、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

オリンピックや世界選手権大会などの国際的なスポーツイベントでは、国家的支援を受けたスポーツ強豪国がメダル獲得を目指して熾烈な争いが行われ、しばしば「The Global Sporting Arms Race」と評されている。こうした競争の中で、各国は自国の社会的・文化的文脈に応じたアスリート育成パスウェイの構築を進めている。アスリートが国際舞台で成果を収めるためには、スポーツタレントの発掘・育成に関する事業（タレント発掘・育成事業）の卓越性と効率性がより一層求められている。

このような事業運営の卓越性と効率性を支える要素として、品質管理とリスク管理が挙げられる。品質管理は、サービス・人材・プロセス・環境等の質を継続的に向上させることにより、組織の競争力と持続可能性を高めるものである。リスク管理は、事業の目標達成を妨げる潜在的な要因を特定し、それを軽減・排除するための体系的な取り組みである。こうした視点に基づくマネジメントは、アスリート育成の長期的成功において不可欠であると考えられる。

しかし、日本を含む多くの国々では、タレント発掘・育成事業における検証は限定的であり、とりわけ事業が直面する課題と、それを克服するためのプロセスに関する知見は乏しい。したがって、継続的かつ長期的にタレント発掘・育成事業を行っている諸外国の事例を詳細に分析することは、我が国の事業推進に役立つ可能性がある。

そこで本研究では、2004年に設立されたスポーツスクールを中心に、国を挙げて長期的なタレント発掘・育成事業を推進するシンガポールを先行事例として取り上げる。具体的には、アスリート育成に包括的に取り組む同国の政府系スポーツ組織の関係者に対して半構造化インタビューを実施し、品質管理とリスク管理の視点から、事業の課題と促進要因を明らかにすることを目的とする。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-01]

「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異（教）

*中村 有希^{1,2}、梅澤 秋久³ (1. 九州共立大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 横浜国立大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-02]

インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教,ア）

*萩原 大河¹ (1. 姫路市立水上小学校)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-03]

文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業におけるCulturally Responsive Teachingに関するシステムティック・レビュー（教）

*戸村 貴史¹ (1. 福山大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-01] 「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異（教）

*中村 有希^{1,2}、梅澤 秋久³ (1. 九州共立大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 横浜国立大学)

体育は身体活動を伴う教育であり、子どもの怪我や事故のリスクは少なからず存在する。日本スポーツ振興センター（2024）によると、各教科等で起きる負傷件数のうち、体育は小学校で71,081件（82.3%）、中学校で70,152件（94.1%）、高等学校で45,988件（95.8%）と報告されており、各教科等の事故は約8割～9割が体育で起きている。したがって、体育の安全をめぐる問題は、体育科教育学分野において長年にわたり指摘されてきた課題でもある。実際に、UNESCO（2015）が提唱する「良質な体育（Quality Physical Education）」では、「子どもの安全・保護」、「身体リテラシー」、「包摂・共生」（梅澤訳，2020）の3つが主要な要素であるとされており、体育の安全は「良質な体育」を保障する中核に位置づいている。

他方、文部科学省（2021）は「令和の日本型学校教育」において、子ども個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子どもが自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整する「個別最適な学び」や「協働的な学び」の充実を求めている。体育においても、子どもが自身の状況に応じて主体的に運動に向かう学習や、子どもの個性や能力に応じて協働的に学習を進めていく教育が求められている。このような体育学習が求められる中、体育の安全をどのように保障していくのか、学習観の変容と併せて安全の在り方を問うていく必要があるだろう。

かかる問題意識から、本研究では、UNESCOの「良質な体育」と我が国の学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異を比較検討することを通して、「令和の日本型学校教育」における良質な体育の安全の在り方を検討するための基礎的知見を得る。詳細は、当日に報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-02] インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教、ア）*萩原 大河¹ (1. 姫路市立水上小学校)

我が国では、共生の視点を踏まえたインクルーシブな体育授業が目指されている。その一方、障がいのある学習者が、通常の学級での体育授業において見学や得点係といった身体活動を伴わない形式で参加している事例がある（澤江，2020）。これは教材が障がいのないことを前提に構成されているという特権を孕んでいることに起因している可能性がある。つまり、障がいのある学習者は、通常の学級での体育授業においてマイノリティとしての処遇を受けているといえよう。

マイノリティに対して、「特権集団の人々の中で、自らの意思で非抑圧集団の人々の権利を支持する、あるいは社会公正を求めて立ち上がることを選択する人々」はアライと呼ばれる

（グッドマン，2017）。インクルーシブな体育授業に当てはめれば、アライは、障がいがないという自覚を通して障がいのある学習者の抑圧を改善しようと働きかける通常の学級の学習者個人または集団と定義できよう。そこで本研究では、インクルーシブな体育授業における障がいのない児童のアライシップを明らかにすることを目的とした。

対象は小学校4年生の1クラス30名の児童であった。この内、1名は特別支援学級に在籍し、日常的に通常の学級で体育授業に参加していた。本研究では、キャッチセット・アタックプレルボール（岩田ほか，2011）を教材としたネット型ゲームの様子を観察した。発表者は授業者として携わり、授業中の出来事や児童の様子メモ、児童へのインタビュー等をもとにフィールドノーツを作成した。分析はフィールドノーツにグラウンデッド・セオリー・アプローチ（シャーマズ，2020）を施した。

結果、アライシップは共に学習することへの葛藤を起点としていた。その後、障がいの理解を深めることを通して共に学習することを追求し、障がいのある児童の学習参加に向けた行動として補助具を作成した。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-03] 文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業における Culturally Responsive Teachingに関するシステムティック・レビュー (教)*戸村 貴史¹ (1. 福山大学)

近年、教育現場では文化的・言語的に多様な児童生徒（CLD児童生徒）が増加し、教員には多様性に応じた包括的な指導力が求められている。なかでも体育は、スポーツ経験や健康観、服装、身体接触、コミュニケーションなど、学習者の文化的背景と深く関わる教科であり、文化的・言語的配慮が欠けると、学習における安全性や倫理性が損なわれるおそれがある。こうした課題に対応するうえで、CLD児童生徒の文化的背景を尊重し、それを学習内容や指導に反映させるCulturally Responsive Teaching（CRT）の実践が国際的に注目されている。今後、日本でもCLD児童生徒の増加が見込まれる中、CRTの専門性を備えた教員の育成は喫緊の課題である。国際的には体育におけるCRT研究が進展する一方、日本ではまだ端緒についた段階にある。そこで本研究では、体育におけるCLD児童生徒への指導に関する教員の経験や認識に着目した国際的研究を対象にシステムティック・レビューを行い、以下のリサーチクエッションに対する洞察を得ることを目的とした。①CLD児童生徒に対する体育指導において教員が経験する課題とは何か、②その課題に対応するために教員に求められるCRTの知識とスキルとは何か、③それらを教員が獲得するためにどのような教師教育が求められるか。文献はScopus、ERIC、EBSCO、ProQuestを用いて検索し、引用文献の追跡も行った。203件から重複を除いた155件をスクリーニングし、最終的に15件を分析対象とした。本研究は、体育におけるCRTの国際的知見を整理し、日本の多文化共生に資する示唆を提供する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04]

クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)
中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*齊藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05]

長距離走のICTを活用した集団的競争教材試案 (教)
チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06]

高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究 (発,測,教)

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04] クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)

中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*齊藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

本研究では中学校2年生の陸上競技短距離走の授業を対象とし、全5時間（内、測定2時間）の単元で、正しいクラウチングスタートの行い方を学習し、地面をしっかり押し力を伝えることを中心にクラウチングスタートの局面から加速局面までの指導を実施した。本研究の目的はクラウチングスタートとその直後の地面をしっかり押し力を伝える指導が中間疾走に与える影響を明らかにすることである。本研究の成果を明らかにするために、単元前後で実施した50m走の疾走能力の変化を検討することとした。検討する内容は、50m走タイムと疾走動作、調査紙調査によるクラウチングスタートの意識ポイントである。

一般的に短距離走を扱う体育の授業では疾走動作の変容を目指した指導を行い、タイムの向上を目指す授業が多くみられる。また、各局面を扱う場合はその局面ごとの動作に着目した指導を行うことが多い。本研究では、動作指導ではなく、短距離走全体に共通して求められる力を地面に伝えることを指導している。地面に力を伝えることが疾走全体にどのような影響を与えるのかを明らかにすることは、学校体育の指導において精一杯全力を出して結果もでる短距離授業を実現するための新しい視点を与えていると考えている。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏫 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05] 長距離走のICTを活用した集団的競争教材試案 (教)

チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

長距離走は体育における子どもたちが嫌う代表的な種目の一つである。そこで、本研究では「勝敗を競う楽しさや喜び」、皆が平等に学習を行ったうえで競争をするための「知識・技術」、勝敗を競う楽しさや喜びを得る過程で生じる「他者の受容や尊重」を学習内容とする長距離走教材を開発することを目的とした。研究方法として、まずスポーツ及び体育における競争の位置づけについて整理する。次に、長距離走の授業実践に関する先行研究について概観する。これらを踏まえ、研究目的に基づく長距離走教材の開発を試みる。研究の結果、まずスポーツにおける競争性については、競争は間接的・平和的でルールに規制されるものであり、他者や社会に対して利益となる社会的功利性の側面も有している。また、スポーツを運動材として扱う体育における競争性については、競争や比較による客観的結果から何を学び、次の努力への原動力としていくか、いかに自己完成に結びつけていくかという観点が重要になり、教材では全ての学習者に勝利する機会を平等に保障することが可能であることが求められる。そして、長距離走教材において競争性を位置づけていくには、自己に適した一定のペースでの走行を習得した上で、競争性を積極的に位置づけていくことで、学習者の長距離走授業に対する楽しさにより繋げていくことが可能となること、相互作用の変化に気づき、時々刻々と変化する環境（他者）に柔軟に対応する応答的身体を生み出すこと、個人が成果を得る過程において学習者間の連携や協力が生じることが考えられる。また、長距離走教材における競争の形態としては、学習者間の優劣が現前にくく、また競争に向けた準備の過程でも集団内での協同が生まれやすくなるため、個人間での競争のみならず、集団による競争の観点も必要である。これらのことから、本研究では、チームパシュート型ペース走の教材試案について提起する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏫 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06] 高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究（発,測,教）

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

本研究は、高校入学年次の柔道授業において、映像分析ツール「SPLYZA Teams」を活用したICT導入による「分析」を通じて、生徒が自己や他者の動きを言語化し、対話的に学びを深めるプロセスを明らかにすることを目的とした。近年、体育授業においてもデジタルツールの導入による学習効果の向上が期待されている。特に、高校1年次は、生徒にとって新たな学習環境や人間関係に適応する重要な時期であり、対話的で協働的な学びの基盤を形成する絶好の機会である。柔道は身体接触を伴う競技であり、安全配慮とともに相互理解や状況把握が求められるが、実技中心の指導では自己や他者の動きを言語化し共有する機会が限定されがちである。そこで、柔道の実践場면을可視化・分析・共有することで、生徒が自他の動きを客観的に捉え、運動の言語化や他者との対話を促進し、自己理解・他者理解を深める新たな学びの形を模索することが重要であると考えた。柔道の選択授業（計14時間）では、生徒が「タグ付け」や「描き込み」を使って、自身や他者の技の映像を分析・共有する学習活動を実施した。教師は「授業取り上げタグ」を使つて的確な視点での描き込みについて共有・評価した。アンケートや自由記述から、分析活動が自己理解・他者理解を促進し、技術向上や学習意欲につながっていることが明らかとなった。また、言語化されたフィードバックを通じて生徒間のコミュニケーションが活性化し、柔道の学習が一方通行でなく協働的なプロセスとして構築されていた点が注目される。本実践は、柔道という伝統的かつ個別性の強い実技領域において、ICTを用いた「分析」と「対話的学習」を有機的に結びつけた点に新規性がある。運動の可視化・言語化を通じて、生徒の思考力や表現力を育成し、主体的・対話的な学びを実現する実践は、今後の体育科教育におけるICT活用のモデルとなることが期待される。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-01]

エージェンシー概念の実践化プロセスの解明 (教,政)

中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*草津 晃平¹ (1. 唐津市立伊岐佐小学校)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-02]

定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果 (教)

*五十川 利心¹、浜上 洋平²、栗田 昇平² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-03]

共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究 (ア)

*綿引 清勝^{1,2} (1. 東海大学児童教育学部、2. 明星大学大学院教育学研究科)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-01] エージェンシー概念の実践化プロセスの解明（教,政）
中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*草津 晃平¹ (1. 唐津市立伊岐佐小学校)

OECD “Education 2030”で提唱された「エージェンシー」は、未来を見据えた学びの方向性として衆目を集めている。だが、体育の授業においてその概念がどれほど実現されているかについては、現場レベルでの導入には依然として困難が伴っている。本研究では、中学校保健体育におけるエージェンシーの実践化プロセスを明らかにすることを目的に、同概念に初めて触れた3名の教師に対し半構造化インタビューを行い、SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて質的分析を行った。

その結果、教師たちは共通して、①エージェンシーを抽象的かつ難解なものと捉えながらも、②既存の実践と接続可能な点（AARサイクル、役割分担、権限の譲渡、振り返り等）を手がかりに導入を試み、③一部の生徒における変容を通じてその意義を実感していた。さらに、教師自身も授業実践を「言語化」する過程で、エージェンシーの再解釈と授業構成の再設計に至るなど、受容・適用・再構成のプロセスを歩んでいた。

本研究は、教育概念の実装において「教師自身の納得解の獲得」や「既存実践との媒介的接続」が重要であることを示唆する。今後は、教師の現場知を尊重しつつ、教育概念の「翻訳」と「内在化」を支援する仕組みの構築が求められるだろう。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
かに貢献できるか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-02] 定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果 (教)

*五十川 利心¹、浜上 洋平²、栗田 昇平² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

協同学習とは、協同的な相互依存性の学習状況への促進作用を利用することを意図した指導法であり(栗田、2015)、小グループを活用して自分と他者の学びを高めるものである(ジョンソンほか、2010)。協同学習モデルを適用した体育授業では、運動・認知領域に加え、特に情意・社会的領域への効果が高く、安定して機能するとされる(栗田・大西、2023)。

定時制高等学校(以下、定時制高校)は、勤労青年のみならず、中途退学者や不登校経験者、発達障害等の特別支援が必要な生徒など、多様な学習ニーズに応じた教育機関としての役割を担っている(文部科学省、2020)。学び直しや自立支援が期待される一方で、定時制高校の生徒はコミュニケーションスキルに不安を抱え、対人恐怖心性を持つことが指摘されている(堀田ら、2017)。

対人関係に課題がある定時制高校の生徒に対して、情意・社会的能力を育む協同学習モデルを体育授業に導入することは有益である可能性が高い。しかし、体育授業における協同学習の実践研究は多くが小学校段階を対象にしたものであり、中学校以降の校種、特に定時制高校での実践は少ない。

そこで本研究は、ある地域の定時制高校2年生10名(男子6名、女子4名)を対象に、協同学習モデルを適用した7単位時間のハンドボールを素材とした球技領域・ゴール型の授業を実施し、その効果検証を目的とした。授業は保健体育科の教員3名(男性2名、女性1名)によるチームティーチングにて行われた。

データは①形成的授業評価法(高橋ほか、2003)、②主張的・認知的共感性尺度(倉盛、1999)、③学級適応感尺度(江村・大久保、2012)の質問紙調査から得た量的なものに加え、④授業者、生徒に対する半構造化インタビュー、⑤フィールドノート、⑥授業映像による質的なものを収集し、それぞれの分析結果をもとに複合的に考察した。結果等の詳細は発表時に示す。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-03] 共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究 (ア)

*綿引 清勝^{1,2} (1. 東海大学児童教育学部、2. 明星大学大学院教育学研究科)

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説保健体育編体育編（2018）では、改訂の要点として「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する視点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること」と示されており、共生社会の実現へ向けた保健体育科の果たすべき役割として、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が含まれている。ここでは、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が例示されていることも注目すべき事柄だと言えるが、共生社会の実現へ向けて、学校体育の果たすべき役割は大きい。そこで本研究では、多様な児童生徒が共に学び共に育つインクルーシブ体育の実現へ向けて、多様な学習者が相互に学び合い、観点別評価にも応用可能な体育授業の自己評価尺度を開発することを目的とした。

研究方法は、202x年1月～2月の期間において、A県の高等学校2校の生徒（N=414）を対象に梅澤・村瀬・坂本（2021）などの先行研究を基に作成した30項目について5件法（5：当てはまる、4：やや当てはまる、3：どちらともいえない、2：あまり当てはまらない、1：当てはまらない）による質問紙調査を実施し、回答を得た。分析方法は、探索的因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した結果、合計2因子が抽出された。これらの因子は、第一因子（ $\alpha=.958$ ）を「共に学ぶ因子」、第二因子（ $\alpha=.947$ ）を「共に育つ因子」と命名した。次に、抽出された2因子についてMann-WhitneyのU検定にて両校の得点を比較した結果、0.1%水準で通常の高等学校よりもインクルーシブ推進校の方が有意に高い傾向が確認された。なお、本研究は明星大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-18]

部活動改革に伴う教員の兼職兼業の運用に関する一考察（教）

*笠井 義明¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-19]

滋賀県大津市における運動部活動の地域移行・地域展開に関するグランドデザイン（経,教）
政策科学的アプローチによる試論

*大西 祐司¹、黒澤 寛己¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-20]

部活動地域移行における指導者確保に関する研究（社,経,政）
体育系大学生を対象としたアンケートより

*藤原 悠太¹、早田 剛¹ (1. 環太平洋大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 ■ 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:00～9:20

**[学校保健体育-A-18] 部活動改革に伴う教員の兼職兼業の運用に関する一考察
(教)***笠井 義明¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

スポーツ庁・文化庁は2023（令和5）年度から2025（令和7）年度までの3年間を「改革推進期間」と位置付け、学校部活動の地域連携・地域クラブ活動への移行（以下「部活動の地域展開」という）を進めている。改革推進期間の最終年度を迎え、改革をさらに進めるため、「地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議」が組織され、2026（令和8）年度以降の地域展開の方針等が議論されている。

部活動の地域展開において、指導者確保の観点から教員の兼職兼業を活用することが提案され、「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関するフォローアップ調査結果（速報値）」では、地域スポーツクラブ活動の指導者の属性として「教員の兼職兼業」が最も多く、地域クラブの指導者等として教員が携わることへの期待は大きい。

一方、文部科学省初等中等教育企画課長名の「「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」を受けた公立学校の教師等の兼職兼業の取扱い等について」においては、教育委員会が兼職兼業の許可をする際の留意事項が示されているが、「学校における時間外在校等時間と地域団体における労働時間の通算が1箇月45時間以内になること」や、「兼職兼業許可後の当該教師の地域団体での労働時間等の確認をする」等とされ、兼職兼業の許可に際し、教育委員会や当該教師に新たな負担が生ずることになる。

自治体において部活動の地域展開を進める部署と教員のサービスを監督する部署が異なる場合には、地域クラブの指導等に従事することを希望する教員が、希望どおりに携わることができないことが懸念される。自治体が兼職兼業を運用する際の課題を指摘するとともに、地域クラブ等での指導を希望する教員が円滑に指導できるための方策について提案していきたい。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～10:00 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:20～9:40

[学校保健体育-A-19] 滋賀県大津市における運動部活動の地域移行・地域展開に関するグランドデザイン (経,教)

政策科学的アプローチによる試論

*大西 祐司¹、黒澤 寛己¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

部活動の地域移行が告示されてから3年が経過した。2026年には、スポーツ庁からの補助金が終了する見込みであり、各自治体は地域での自走・持続可能な運営体制の構築を迫られている。これまで、モデル事業の検証や学校からの部活動の切り離しといった多様な取り組みが進められてきたが、それらは生徒・保護者、そして長年部活動を担ってきた教員の意向をどの程度反映していたのだろうか。本研究はこの問題意識に基づき、政策科学の視点から運動部活動の地域移行に関するグランドデザインを構想し、自走・持続可能な枠組みの構築を目指す。研究課題1では、運動部活動の地域移行における政策プロセスを明らかにし、その結果として描かれるべきグランドデザインのあり方を検討した。研究課題2では、指導者確保が喫緊の課題となる中、有力候補である教員の意識と、彼らが求める条件について調査を行った。研究方法はコンテキスト・マップ法を用い、以下の3点に基づいて分析を行った。①大津市教育委員会による「部活動の実態調査」の結果をもとに、運動部活動の規模を大・中・小に分類し、地図上に可視化した。②各校の施設条件をGoogleマップや学校ホームページから把握し、稼働状況と過密度を推定した。③通学手段、隣接学区の部活動状況、周辺スポーツ施設の有無、外部指導者の登用状況などを総合的に考慮した。その結果、地域や学校の実情に応じて、巡回型、拠点型、派遣型、委託型、合同型の5つのモデルを適切に割り当て、あるいは組み合わせることで、自走・持続可能な運営が可能であることが確認された。ただし、すべての運営を民間に委託するのではなく、教育委員会が主導権を握ることに多くの利点があることも明らかとなった。研究課題2では、大津市立中学校18校に勤務する教員約570名を対象にアンケートを実施し、221名(38.8%)からの回答を得た。詳細については、当日報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～10:00 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:40～10:00

[学校保健体育-A-20] 部活動地域移行における指導者確保に関する研究（社,経,政）

体育系大学生を対象としたアンケートより

*藤原 悠太¹、早田 剛¹ (1. 環太平洋大学)**1. 緒言**

部活動の地域移行とは、これまで教員が担ってきた部活動の指導を地域団体や関係事業者に移し、地域活動として位置づける取り組みである。生徒の健全な育成や地域活性化につながる一方、専門的な指導者の確保が課題となっている。そこで本研究では、体育系大学生に着目し、指導者確保に関する意識を調査した。

2. 目的

体育系大学生を対象に、部活動地域移行への意見、指導を行いたい場所について調査し、持続可能な運動部活動の在り方を検討することを目的とした。

3. 方法

被験者は体育系大学生54名（男29名・女25名、平均年齢21.4歳）で、教員希望者33名、企業希望者21名であった。Googleフォームを用いてアンケートを実施した。

4. 結果

部活動の地域移行に対する意見では、賛成が81.5%、反対が18.5%であり、教員希望者と企業希望者で有意な差はみられなかった。部活動指導を希望する場所は、教員希望者のうち52%が「自分の勤務校」での指導を望み、次いで「どこでもよい」が24%であった。一方、企業希望者では「どこでもよい」が33%、「地元ならよい」・「家の近くならよい」がともに29%であった。

5. 考察

本研究における部活動地域移行に対する意見では、賛成が多く、体育系大学生は部活動を支援したいという意欲が強く見られることが示唆された。指導希望場所については、教員希望者は自身の勤務校での指導を望む傾向が強く、これは生徒への責任感や愛着が影響していると考えられる。一方、企業希望者は、勤務校という概念がないため、「どこでもよい」「地元ならよい」「家の近くならよい」という意見が多く立地条件が影響することが考えられた。

これらの結果から、部活動の地域移行を持続可能にしていくためには、大学生だけでなく、現場に行きやすい地元の卒業生が指導者になることが有効であると推察した。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20]

保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教）

男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21]

「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成（心）

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-22]

体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感（教）

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23]

動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20] 保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教） 男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

中学校学習指導要領保健体育編(平成29年告示)では、「体力や技能の程度、性別や障害の有無等に関わらず、運動の楽しみ方を共有することができるように留意する」という共生の視点から、授業を「原則として男女共習で行うこととする」と示された。一方、体育の男女共習授業については、体力・能力の性差の問題や学習意欲および運動技能に及ぼす影響といった課題も指摘されている。男女共習については検討すべきことが多いと考えられるが、ほとんど検討されていない。生徒の男女共習に対する認識についても検討されるべきことのひとつと考えられるが検討されていない。加えて、生徒の男女共習に対する認識は体育や運動に対する好嫌意識や運動の得意・不得意により異なる可能性がある。そこで、本研究では中学校生徒を対象にアンケート調査を実施し、体育に対する好嫌意識、運動に対する好嫌意識、運動の得意不得意が体育の男女共習授業に対する認識に与える影響を明らかにすることを目的とした。対象者は中学1年生286名(男子141名、女子145名)、中学2年生294名(男子150名、女子144名)、中学3年生267名(男子125名、女子142名)であった。希望する授業形態については「完全共習」、「一部共習」、「別習」に分類した。分析の結果、体育の男女共習に対する認識について、男子では運動の得意不得意の違いにより有意差が認められ、運動の得意な生徒は「完全共習」を希望する生徒の割合が有意に多かった。女子では、体育が好きな生徒および運動が好きな生徒は「完全共習」を希望する者の割合が有意に多く、嫌いな生徒は「別習」を希望する者の割合が有意に多かった。また、女子において、運動が得意な生徒は「完全共習」を希望する生徒の割合が有意に多く、不得意な生徒は「別習」を希望する生徒の割合が有意に多かった。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21] 「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成(心)

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

教養体育科目での運動・スポーツ実践より、様々な学修成果の修得の可能性が示されてきた。大半の学生にとって正課体育授業の受講は最後の機会のため、教養体育授業を一層充実・発展させる意義は極めて大きい。さて、私立大学における教育の鍵は「教育の目的」と考えられる。大学設立の目的や理念を考慮し、建学の精神に則した体育授業が行われ、それに相応しい学修成果が得られれば、体育科目の評価を高められる可能性がある。以上より、本研究では事例的に大規模私立大学における体育授業の学修成果をアセスメントする心理指標を作成し、他指標との関連を検討し特徴を解明することを目的とした。対象者はK大学の教養体育科目を履修した学生であった。調査内容は基本的属性、学修成果の自由記述、「初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度(PBS-FYPE：西田他, 2016)」、「学校への適応感尺度(大久保, 2005)」等であった。調査は令和5年度に対面またはWebにより実施し、適切な回答が得られた1,295名および282名を解析対象とした。まず、自由記述に対してテキスト解析を行い、教育の目的に見合った体育授業での行動や思考等の概念を抽出した。続いて、抽出した概念を基として作成した学修成果に関する項目について探索的因子分析を行った。結果、「教育の目的」に則した3因子(「運動技能のアドバイスと発揮」、「ポジティブ感情の伝達とエール」、「運動の課題解決のための自己開示と傾聴」：各3項目)にて構成される「生涯スポーツLTR尺度(KU-PALTR)」が作成され、尺度の信頼性が確認された。また、運動部所属有無や実施種目の技能レベルによりKU-PALTR因子得点に差異があること、「運動スキル」、「協同プレー」との関連および「居心地の良さの感覚」、「自尊感情」への影響があること等が示唆された。本アセスメント指標の意義や今後の活用等について議論を行う。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

14:10 ~ 14:30

**[学校保健体育-B-22] 体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感
(教)**

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

【背景】心身の健康に関わる行動資質（非認知能力）の醸成が期待されている。体育実技授業が非認知能力に包含される社会情動的スキルや学習への適応感に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は必修体育の受講生239名（女性98名、男性140名）であった。調査期間は2024年後期のPre（2～3回目）、Post（14～15回目）とし、調査は、社会情動的スキルに関する内容（誠実性、グリット、SOC）、学習に関する内容（学校適応感、体育の主観的恩恵、「授業を通じて得られたこと」の自由記述）で構成した。SPSSを用いて各調査について対応のあるt検定により前後比較を行い、クラスター分析を行い各クラスター×前後比較について二要因分散分析を行った。KHCoderを用いて形態素解析を行い同時に出現する語の組合せによる共起ネットワークを作成した。

【結果】前後比較の結果、社会情動的スキルに有意な変化は見られず、学校適応感と主観的恩恵のみ有意な変化($p<0.01$)があった。社会情動的スキルの得点によるクラスター分析から、平均的な「標準群」($n=177$)、グリットに優れた「優群」($n=25$)、大学生活に慣れて欲しい「期待群」($n=37$)の3群が抽出された。すべての群で学校適応感と主観的恩恵が有意に向上し($p<0.01$)、交互作用は確認されなかった。Pre時の学校適応感と主観的恩恵は優群、標準群、期待群の順に高く($p<0.01$)、主観的恩恵は優群が標準群および期待群よりも高かった($p<0.01$)。自由記述では、チームワーク、協力、楽しさといった語が多く抽出された。

【結論】半期の大学体育授業は社会情動的スキルに有意な変化を与えなかったが、初期の社会情動的スキル特性に関係なく、学校適応感と主観的恩恵に有意な向上があり、ポジティブな感情や対人関係を通じて肯定的な影響を与えていることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23] 動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

本研究では、舞踊の動きについて①インプロヴィゼーションと②ダンステクニックの2つの解釈を採用する。①は可動域や身体部位への探索的メソッドであり、②は各ダンススタイルに根付いた合理的メソッドである（Gretchen・Susan,2008）。そして、動作合成システムBody-part Motion Synthesis System（以下、BMSS）とは、②の特性を活かし、プロダンサーの舞踊動作をモーションデータとして利用し、分析的に解体した短い要素動作（モーションデータ）をタブレット上で合成・置換して新奇な舞踊動作を創出し、3DCGで再生するシステムである。本研究では、BMSS ver4.5.4 Vis（支持基底、重心とZMP、①の特性を活かしたモーションラインを導入した可視化版）を利用した。実験は、ダンサーのトレーニング支援を目的とし、ダンサー9名（21.6±2.98歳）による実演を交えた評価実験とした。結果、提案した可視化手法が身体の使い方の理解に繋がると示唆された（中内ほか,2025）。次に、支持基底と重心を追加した際のBase Motionのカテゴリー別に関しては、Jump、Floor、Acrobaticの3つのカテゴリーが評価された。また、自由記述回答による動きの理解に関するダンサーの評価として、＜身体部位への視点＞、＜空間と動きの関係性＞、＜重心位置＞、＜動きの感覚的理解＞、＜動きの大小＞、＜動きのダイナミックさ＞、＜動きのコーディネーション＞という言葉が顕在化した。これらは「動きの質」（ラバン,1980；ドゥブラー,1974）に関する舞踊の定石的な評価であり、動きへの変換によるアイデアの生成といったダンスの本旨を踏まえると、本実験がダンスのトレーニングとして有効であると示唆される。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-10]

学外スポーツ活動が小学生の学内身体活動レベルに与える影響 (教)
心理社会的因子との関連性に着目して

*鄭 天従¹ (1. 早稲田大学大学院スポーツ研究科)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-11]

運動部活動の期待と機能が及ぼす継続への困難感 (経)
中高生の抵抗条件の認識と運動者行動論からの問題提起

*常浦 光希^{1,2}、田原 陽介³ (1. くらしき作陽大学、2. 広島大学大学院、3. 青山学院大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20～10:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:20～9:40

[生涯スポーツ-A-10] 学外スポーツ活動が小学生の学内身体活動レベルに与える影響（教）

心理社会的因子との関連性に着目して

*鄭 天從¹ (1. 早稲田大学大学院スポーツ研究科)

本研究は、中国における児童の身体活動の量および強度の不足という現状を改善するために、既存の資源と条件を活用しつつ、児童の学習に影響を与えないことを前提として、児童の身体活動への意欲と活動強度を有効的に向上させる方法を究明することを目的とする。近年、中国でスポーツ塾とスポーツイベントなど、児童向けのスポーツ産業が急速に発展している。学外スポーツ活動は有料で提供されるため、学習指導要領や学校施設の制約を受けず、より優れた指導者の支援を得ることが可能であり、児童により良いスポーツ体験を提供することができる。そこで本研究では、学外スポーツ活動の参加有無が、学内における身体活動（PA）レベル、および心理社会的因子に及ぼす影響を明らかにする。具体的には、中国の小学校5年生280名を対象に、学外スポーツ活動への参加が学内身体活動（PA）レベルおよび心理社会的要因（態度、ソーシャルサポート、自己効力感、メリットと障害）に与える影響をアンケート調査によって検討する。学外スポーツ活動への参加の有無に応じた児童の身体活動レベルの比較により、当該活動が児童の身体活動レベル向上に有効かどうかを検証する。また、心理社会的因子との関連性分析を通じて、各グループにおける児童の身体活動に影響を与える関連因子を明らかにする。本研究の成果によって、身体活動レベルと強く関連する心理社会的因子を体育教育現場で積極的に取り入れることで、児童がより主体的に身体活動に取り組むための基盤を整えられることが可能と考えられる。今後の学校体育教育において、重要な示唆を与えられよう。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:40 ~ 10:00

**[生涯スポーツ-A-11] 運動部活動の期待と機能が及ぼす継続への困難感（経）
中高生の抵抗条件の認識と運動者行動論からの問題提起***常浦 光希^{1,2}、田原 陽介³ (1. くらしき作陽大学、2. 広島大学大学院、3. 青山学院大学)

中高生の運動部活動からの逃避行動は、部活動の地域展開という変革期において、その成否を左右する重要な課題である。単に活動の場を地域へ移行するだけでは、生徒のスポーツからの離脱を防げない可能性があり、活動継続を困難にする要因の理解が不可欠である。本研究は、この課題に対し生活者の主観的意味に着目した運動者行動論（常浦・高岡, 2016）の視座から、生徒が捉える抵抗条件の認識パターンを類型化し、それが逃避行動としての離脱にどう関連するかを検討する。

調査はT県の中高生運動部所属生徒を対象とした。退部予測関連の項目を用いた探索的因子分析の結果、6つの抵抗条件を抽出した。これらに基づくクラスター分析により、生徒は、低抵抗・比較的適応型と多重抵抗・葛藤型に分類された。次に、退部経験の有無との関連をロジスティック回帰分析で検討した。その結果、希望する部活動への入部の有無と部の機能不全と刺激不足を独立変数としたモデルが有意であった。希望部活動に入部した生徒は中学時代の退部経験が有意に少なく、部の機能不全と刺激不足の認識が高い生徒は退部経験がある傾向が見られた。

以上から、生徒が捉える抵抗条件にはパターンが見出され、これらのパターンを特徴づける個別の抵抗条件が過去の逃避行動と関連する可能性が示唆された。さらに、これらの抵抗条件は、生徒自身の価値観や期待と、部活動運営実態や学校・家庭環境との間の不協和が個人の主観的意味でネガティブに意味づけられた結果と考えられる。このことは、部活動の地域展開において、現状の学校部活動において、生徒の逃避行動に繋がり得る要因を理解し、それを繰り返さない新たなアプローチが求められることを示唆する。具体的には、生徒の主観的意味によって形成される複合的な抵抗条件を踏まえ、個々の生活者に寄り添うスポーツサービスの設計が継続への困難感を軽減し、肯定的な関与を促す上で重要である。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-01]

部活動に対する生徒の主体性を育む場のデザイン（経）

*行實 鉄平¹、横山 剛士² (1. 久留米大学、2. 金沢大学)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-02]

Dose-Response Relationships Between Environmental Fitness Support and Physical Activity
(発, 測)

Insights from a Large-Scale National Survey in China

*PAN XIANG^{1,2}、鈴木 宏哉²、Gao Yibo^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学 スポーツ健康科学研究科)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-03]

当事者の精神障害者サッカー競技参入および継続的な参加を促す要因の検討（ア）

*秋本 成晴¹ (1. 平成国際大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-04]

スポーツサービスにおける価値共破壊（経）

車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを事例として

*宇野 博武^{1,2}、岡田 美優³ (1. 武庫川女子大学、2. 神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程、3. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期過程)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-01] 部活動に対する生徒の主体性を育む場のデザイン (経)

*行實 鉄平¹、横山 剛士² (1. 久留米大学、2. 金沢大学)

少子化や教員の長時間労働、地域スポーツ環境の整備といった課題を背景に、2018(平成30)年にスポーツ庁が「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定して以降、わが国では、部活動を学校単位から地域単位へと展開する政策が進められている。

本研究では、部活動改革(部活動の地域展開)という「多主体協働共生」(小泉,2014)が求められる取り組みの中で、大人達による環境構築ではなく、生徒達も「スポーツアクター」(山本,2024)として参画することを目指した地域(A中学校)での実践事例を踏まえて、その環境醸成に向けた現状と課題を提示することを目的とした。

具体的には、当該事例における実践「生徒との対話場(部活動ワークショップ)」の展開内容やその実践がもたらす生徒達への影響といった現状を把握するために参与観察調査およびアンケート調査を実施した。また、「学校組織開発理論」(佐古,2011)や「部活動と生徒の自主性・自律性・主体性」(下竹,2022;横山,2022;大畑ら,2020,2023)に関する先行研究に基づき、部活動ワークショップの展開内容や生徒達への影響を考察・評価することで課題の提示を試みた。

その結果、まず、部活動ワークショップは、当該地域の部活動改革検討委員会の協議を経て開発され、2024年度に3回実施されたプログラムは「教育活動の良循環サイクル(実態認識,課題生成,実践化)」(佐古・住田,2014)に基づき実施されていることが確認できた。次に、生徒達への影響は、同プログラムへの参加有無にかかわらず多くの生徒において部活動に対する自立性や主体性意識の醸成を確認することができた。一方で、当該地域の取組は、2024年度より3年間の構想で開始されたばかりであることから、その実践サイクルや生徒への影響を継続してモニタリングしていくことが望まれる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:50 ~ 14:10

**[生涯スポーツ-B-02] Dose-Response Relationships Between Environmental Fitness Support and Physical Activity (発,測)
Insights from a Large-Scale National Survey in China**

*PAN XIANG^{1,2}、鈴木 宏哉²、Gao Yibo^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学 スポーツ健康科学研究科)

Objective: To explore Environmental Fitness Support (EFS) associations with physical activity (PA) intensity and dose-response patterns.

Methods: Data included 58,844 adults (China National Fitness Survey 2020); PA measured by International PA Questionnaire, using regression and generalized additive models.

Results: EFS negatively associated with MVPA at low scores, positively above 35.06. Facility support ($\beta=0.15$, $p<0.01$) and aesthetics ($\beta=0.05$, $p=0.02$) positively correlated to vigorous PA; traffic hazards negatively ($\beta=-0.13$, $p<0.01$). Moderate PA positively linked to facility support ($\beta=0.42$, $p<0.01$), aesthetics ($\beta=0.63$, $p<0.01$), traffic safety ($\beta=0.24$, $p<0.01$); accessibility negatively ($\beta=-0.07$, $p=0.01$).

Conclusions: Enhancing EFS supports population PA in a variety of ways.

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-03] 当事者の精神障害者サッカー競技参入および継続的な参加を促す要因の検討（ア）

*秋本 成晴¹ (1. 平成国際大学)

東京パラリンピックや東京デフリンピックを初め、近年障害者スポーツへの注目が集まっている。障害者にとってスポーツは多様な効用をもたらすが、精神障害（e.g. 統合失調症, うつ病）のある者にとってスポーツ活動は、気分の高揚や不安の改善といった運動療法的効果が見込めるだけでなく、スポーツを通じて当事者同士の交流が促され、人間関係や体調管理、就労に関して互いに学び合うことで、日常生活全体の質の向上が見込める点でも期待が高まっている。ところが、国内での精神障害者スポーツの振興状況は、他の2障害（身体障害・知的障害）と比べて大幅に遅れているため、当事者の精神障害者スポーツ参入や、継続的な参加を阻んでいる要因について明らかにしていくことが喫緊の課題となっている。

そこで本研究では、精神障害者スポーツの中でも最も人気のあるソーシャルフットボール（以下、「SF」）に注目し、当事者の精神障害者スポーツ参入や継続的な参加を促進・阻害している要因を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では、トップ選手とグラスルーツの両方の選手が所属するチームAの11名の選手を対象にインタビュー調査を行った。

調査の結果、SFに関わる以前に、自分以外の精神障害者との何らかの接点があった者は、SF参入における心理的障壁が下がっていることが明らかになったほか、参入後にチーム内で役割が与えられることが当事者の当該スポーツの継続を容易にしていることが示された。一方で、近年のSF競技の高度化に伴い、グラスルーツ層が試合等で活躍できる場面が減っており、結果的に継続を阻害する要因となっていることも指摘された。同様に、競技の高度化に伴い、練習の強度が上がっていることや、練習の事前準備への負担が増えており、結果的に病状の悪化並びにSF継続を困難にしているケースも示された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-04] スポーツサービスにおける価値共破壊（経） 車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを事例として

*宇野 博武^{1,2}、岡田 美優³ (1. 武庫川女子大学、2. 神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程、3. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期過程)

顧客が価値創造プロセスに大きく関与するスポーツサービスでは、不確実性への柔軟な対応が重要と指摘されてきた（宇野・山口，2025）。ところが、先行研究では、柔軟性の発揮が却ってネガティブな事業パフォーマンスをもたらす可能性が示唆されている（Arias-Aranda，2003）。本研究の目的は、サービス・マーケティング分野における価値共破壊研究を参照しながら、スポーツサービスをめぐるどのような相互作用が諸アクターのウェルビーイングの低下をもたらすのか、あるいはウェルビーイングの低下がどのように経験されるのかについて理解を深めることである。

価値共破壊（Value Co-Destruction）とは「サービスシステム間の相互作用プロセスであり、その結果、少なくとも一方のシステムのウェルビーイングが低下するもの」（Plé and Chumpitaz Cáceres，2010，p.431）と定義される。ウェルビーイングの低下は、イルビーイング（ill-being）の概念とともに、個人的または集団的に経験される物質的・身体的・心理的・社会的な害として論じられてきた（Gummerus et al.，2024）。なお、価値共破壊は、資源の意図的もしくは偶発的な誤用（misuse）によって生じるとされる。

以上を感受概念として本研究では、車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを対象とした事例研究を行う。Knockü SCは、エリアサービス（体育館利用）において、「身体障害者用駐車場に荷物が置かれている」などの価値共破壊的なプロセスを経験してきた。方法論的には構成主義的グラウンデッド・セオリー（constructivist grounded theory）に依拠し（シャーマズ，2020）、「研究者の持ち込む観念からこぼれ落ちる、生きられた世界の場」（松嶋ほか，2015，p.47）へと接近することを試みる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:林 洋輔(大阪教育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-12]

総合型地域スポーツクラブの世代交代の課題（社,経,政）
人材循環と理念継承の視点から

*眞鍋 隆祐¹ (1. 彰栄保育福祉専門学校)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-13]

体育・スポーツ経営学に関する研究トピックの動向（経）
トピックモデル分析による学術論文（2000ー2024年）のレビュー

*柴田 紘希¹、奥田 直希²、林田 敏裕³、宇野 博武⁴ (1. 日本体育大学、2. 大阪学院大学、3. 筑波大学、4. 武庫川女子大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20～10:00 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:林 洋輔(大阪教育大学)

9:20～9:40

**[生涯スポーツ-A-12] 総合型地域スポーツクラブの世代交代の課題（社,経,政）
人材循環と理念継承の視点から**

*眞鍋 隆祐¹ (1. 彰栄保育福祉専門学校)

本研究は、総合型地域スポーツクラブの持続可能性に焦点を当てるものである。日本における総合型地域スポーツクラブは、多世代・多種目・多志向のスポーツ活動を支える地域の基盤として発展してきたが、創設期の中心的メンバーと、後から参加した世代との間に、理念や活動参加への温度差が生じつつある。また、持続可能なクラブ運営に向けて「100年続くクラブ像」を描くには、理念の継承や役割移行の仕組み構築が不可欠である。

本研究では、会員数500人を超える5つの総合型地域スポーツクラブを対象に、クラブ運営の中心を担うキーパーソンへの半構造化インタビューを実施し、世代交代に関する課題や成功事例を質的に分析する。分析の焦点は、①人材育成とリーダーシップの継承、②組織文化の共有、③継続的なモチベーションの醸成の3点に置かれる。特に、クラブが直面している「次世代へのバトンタッチ」に対する困難と、それを克服するための具体的な実践知に注目する。

本発表では、調査から得られたデータをもとに、今後のクラブ運営において人材の循環と理念の継承を両立させるための方策を提示し、地域スポーツの持続性に貢献する可能性について検討する。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20～10:00 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:林 洋輔(大阪教育大学)

9:40～10:00

[生涯スポーツ-A-13] 体育・スポーツ経営学に関する研究トピックの動向（経）
トピックモデル分析による学術論文（2000－2024年）のレビュー

*柴田 紘希¹、奥田 直希²、林田 敏裕³、宇野 博武⁴ (1. 日本体育大学、2. 大阪学院大学、3. 筑波大学、4. 武庫川女子大学)

人々の豊かなスポーツ生活の実現を目指し、スポーツをめぐる場や機会の生産・提供・分配のあり方を考究してきた体育・スポーツ経営学研究は、学校体育組織の経営を端緒として始まり、その後、スポーツ産業に関わる実践領域の拡大とともに、対象を広げつつ研究が展開されてきた。一方で、研究対象の急速かつ無批判に拡大してきたことで、それらを整理・体系化する必要性がかねてより課題として指摘されている。また、近年では研究の国際化に伴い、国内外で蓄積されている研究成果の統合や、研究動向の差異や独自性の解明も課題となっている。しかし、体育・スポーツ経営学領域の研究においては、国内外でどのような研究トピックが蓄積されてきたのか、その全体像を把握し、そのうえで、研究動向の差異や共通点を分析することで、国内研究の位置づけや課題を明らかにする試みはこれまで十分に行われてこなかった。そこで、本研究では、2000～2024年に発表された国内外の体育・スポーツ経営学に関する研究のトピックを明らかにすることを通じ、国内研究の独自性及び今後の研究課題を考察することを目的とする。方法はトピックモデルによる推定を用いた。トピックモデルはテキストデータにおける語の出現パターンから潜在的なトピックを明らかにする分析手法である。対象となるデータは、体育・スポーツ経営学に関する国内外の総合ジャーナルに収録された学術論文（2,519編）のタイトル及びアブストラクトである。なお、分析により推定されたトピックの数や内容等については、発表時に詳述する。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05]

女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ（社）

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度（PBIAS）の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06]

女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ（社）

ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07]

中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08]

「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05] 女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ (社)

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度 (PBIAS) の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

【背景】笹川スポーツ財団 (2017) によれば、運動・スポーツ実施率は高校進学とともに低下し、特に女子の減少率が男子よりも著しいことが示されている。このような思春期の女の子がスポーツから離れる要因の一つとして、ボディ・イメージに関する課題が挙げられる。具体的には、「自分の身体に対する恥ずかしさや罪悪感、他者との比較による劣等感」などが、楽しさや継続意欲の低下につながるとされており (Vani et al., 2017)、思春期の身体変化も影響している (Schneider et al., 2023)。

一方、自身の身体を肯定的に認識するほど、自分の体型を正確に認識することから、ポジティブ・ボディ・イメージを育むことが強調されている (生田目ら, 2021)。ポジティブ・ボディ・イメージは、身体への愛着、尊重、受容、快適さ、身体を守る視点でメッセージを解釈する力などを含む多面的概念である (Tylka & Wood-Barcalow, 2015)。その測定には Body Appreciation Scale (BAS)、およびBAS-2が用いられてきたが、思春期特有の発達背景を反映していないことから、Positive Body Image among Adolescents Scale (PBIAS) が新たに開発された。日本では、日本語版BAS-2 (生田目ら, 2017) が作成されているが、PBIASの日本語版は作成されておらず、その信頼性や妥当性についての検討も行われていないのが現状である。

【目的】日本語版PBIASを作成し、信頼性と妥当性を検討することである。

【方法】本研究では日本語版PBIASを作成するためにバックトランスレーションを行い、女子高校生204名にアンケート調査を実施した。データは、確認的因子分析を実施し、信頼性と妥当性を検討した。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06] 女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ (社)

ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

【背景】近年、女子の運動・スポーツ実施率が低い現状が問題視されている。女子の運動・スポーツ参加を阻む要因の1つにボディ・イメージに関する課題が挙げられる。ボディ・イメージとは、身体に対する自己の知覚や態度を含む、多次元的な構造を持つ概念であり、ポジティブなボディ・イメージを高めることでwell-beingを向上させたりすることが明らかになっている。ボディ・イメージの改善による女子のスポーツ参加において十分な研究はなされていないが、スポーツを通じて女子は多くのボディ・イメージに関するネガティブな経験をしていることが明らかになっているため、その解決のための取り組みを行う必要がある。一方で、スポーツ現場にて女子のボディ・イメージに影響を与えるコーチは、ボディ・イメージが与える影響について認識しつつも、十分に対処できるという自信がないことも明らかになっている。

【目的】女子の運動・スポーツに関わるコーチのボディ・イメージに対処する自己効力感を高めるための介入方法について、その有効性を明らかにすることである。

【方法】本研究ではコーチを対象に、以下2つの研究を実施した。

研究1：ボディ・イメージに対処する自己効力感を測定する尺度（Coach Self-Efficacy for Body Image Scale; CSEBIS）日本語版の作成

研究2：ボディ・イメージに対処する自己効力感を高める介入の効果測定

研究1については、英語版のバックトランスレーションを行い、妥当性の検討を行った。研究2については、2つの介入（オンライン学習ツール、セミナー）の効果を測定するため、ベースラインと各介入後の3時点でのCSEBISの得点を混合モデルによる分析を用いて比較した。

【結果】148名のコーチから回答を収集し、日本語版CSEBISを作成した。介入の効果を測定した結果、2つの介入後有意にCSEBISの得点は向上した。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07] 中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

中国における2025年の高齢化率は14.9%（約2.1億人）であり、本格的な高齢化社会に突入した。2050年には高齢化率が約30.7%（約3.8億人）に達することが推測されており、健康の維持・増進および平均寿命の延伸は喫緊の課題とされている。一方、日本は世界第一の長寿国であり、特に健康寿命の延伸において一定の成果を上げてきた。本研究では、中国人女性高齢者の体格、生活空間（LSA）および体力・運動能力と日本人を比較すること、ならびに両国の年代差を検証することを目的とした。対象者は、65歳以上の女性高齢者684名（中国：409名；日本：275名）であった。評価変数は、身長、体重、BMI、LSA、握力、開眼片足立ち支持時間、Functional Reach、10m歩行時間、敏捷性ステップ時間、股関節移動距離とした。年代（65歳代、70歳代、および75歳以上）および国（中国および日本）を要因とした2要因とも対応のない2要因分散分析の結果、中国と日本のいずれにおいても75歳以上は65歳代および70歳代よりもLSAおよび体力・運動能力が劣る傾向にあった。また、中国は日本よりも体格は大きいものの、LSAおよび体力・運動能力は劣る傾向にあった。以上のことから、生活空間および体力・運動能力の加齢変化は中国と日本で変わらないものの、いずれの年代においても多くの変数は中国が日本よりも劣る。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08] 「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

報告者らは、スポーツ実施の社会経済的格差に問題関心を抱き、現代社会におけるスポーツ実施と社会経済的地位（SES）の関連を把握することを目的として、2024年に「暮らしと健康とスポーツに関する調査」を実行した。本報告では、調査の概要、基礎分析の結果、およびその他の雑感について報告を行う。本調査では、関東圏内の一都六県に居住する20歳から89歳（2024年9月1日時点）の男女を母集団とした。層化二段無作為抽出法によるサンプリングを行った上で、個人の抽出には住民基本台帳を利用し、2,000名を抽出した。調査票は返信用封筒とともに郵送し、回答後に返送してもらう方法を採用した。有効回収数（率）は514名（25.7%）であった。回答者のうち、過去1年間に運動・スポーツを「1日でも実施した」と回答したのは、8割程度であった。そのうち、1週間に1日以上頻度で実施した者は、5割程度であった。もっとも多く実施された種目は散歩・ウォーキングであり、筋力トレーニングや体操がそれに続いた。運動・スポーツを実施した理由としては、「健康のため」が最も高く、その他、「運動不足を感じるから」や「体力増進・維持のため」「楽しみ・気晴らしとして」がそれに続いた。他方で、運動・スポーツを実施しなかった理由としては、「仕事や生活が忙しいから」、「面倒くさいから」、「疲れるから」などの項目があがった。本調査では、スポーツ実施の状況に加え、回答者の所得や学歴、出身家庭の社会経済的状況などといった回答者のSESについても質問を行った。スポーツ実施状況とSESに関しては明確な関連が見られなかったものの、スポーツ・運動を実施しなかった理由については、回答者の所得や出身家庭の環境との関連が確認された。当日は、基礎分析の結果に加えて、調査を通じて得られた雑感や今後の検討課題についても報告する。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一朗 (帝京科学大学)

9:20 ~ 9:40

[健康福祉-B-04]

知的障害特別支援学校の生徒は水泳授業に何を期待しているか？（発,教,ア）
高等部生徒を対象とした意識調査より

*岩井 祐一¹、森山 進一郎² (1. 東京学芸大学附属特別支援学校、2. 東京学芸大学)

9:40 ~ 10:00

[健康福祉-B-05]

ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査（生）

*西村 一樹¹ (1. 広島工業大学環境学部食健康科学科)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一朗 (帝京科学大学)

9:20 ~ 9:40

[健康福祉-B-04] 知的障害特別支援学校の生徒は水泳授業に何を期待しているか？
(発,教,ア)

高等部生徒を対象とした意識調査より

*岩井 祐一¹、森山 進一郎² (1. 東京学芸大学附属特別支援学校、2. 東京学芸大学)

【はじめに】障害のある生徒は、日常生活における身体活動の確保が課題とされ、屋内で実施できる水泳は有効な手段として位置づけられる。また、余暇と関連して保護者のニーズも高い。一方、学校での水泳授業は泳法習得や可泳距離の延伸を重視した内容が多いこと、障害のある生徒への指導は経験に基づいたものにとどまっていることが指摘されている。本研究では、当事者である高等部生徒の視点から水泳授業に対する意識を明らかにし、今後の授業設計に資する知見を得ることを目的とした。【方法】知的障害特別支援学校1校を対象に、高等部に在籍する生徒27名（男性14名，女性13名）に質問紙調査を実施した。質問紙は、選択式及び自由記述式で構成され、水泳授業に対する「期待」「不安」「疲労感」等の心理面や身体面及び「水泳経験」等の個人の特徴の全18項目であった。得られたデータは、選択肢ごとに集計され、自由記述はカテゴリー化された。本研究は、東京学芸大学研究倫理審査委員会の承認後、保護者及び対象生徒に同意を得て実施された。【結果・考察】選択式項目の結果では、「水泳が楽しい」と回答した生徒が約9割であった。授業に対する期待では、「楽しむ」（44.4%）、「体重を落とす」（37.0%）といった、心理面・身体面に関する回答が多く見られた。また、「余暇・生涯スポーツ」（11.1%）という回答もあった。一方、「怖かったこと」では、「溺れる」「水が怖い」等、事故や水環境に対する回答があった。以上、知的障害特別支援学校高等部生徒への水泳授業は、単なる泳法習得にとどまらず、健康的な体づくり、余暇の充実といった多様な意義を持つことが示唆された。同時に、水泳特有の不安や恐怖への配慮が授業設計において不可欠であることも明らかとなった。今後は、「楽しさ」や「安心感」を大切にしながら、卒業後の余暇にも繋がる水泳授業の在り方を研究していく必要がある。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一朗 (帝京科学大学)

9:40 ~ 10:00

[健康福祉-B-05] ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査 (生)

*西村 一樹¹ (1. 広島工業大学環境学部食健康科学科)

【目的】大学生の睡眠教育に活用することを目的にICTを活用した睡眠習慣の実態を把握することを目的とした。【方法】健康・スポーツ系の教養教育科目を履修した大学生2,000名を対象とした。研究倫理審査委員会の承認を得た(生15-003)。対象者は自記式の生活習慣調査を1週間実施した。調査項目は起床、就寝、食事時刻とした。得られたデータに基づきインターネットサイトの質問紙調査(ピッツバーグ睡眠質問票、ミュンヘンクロノタイプ質問紙日本語版)に回答させた。生活習慣調査、質問紙調査で得られたデータに基づき対象者には睡眠に関する改善策を検討する課題を提出させた。【結果と考察】睡眠障害得点の四分位数は4、5、8点であった。睡眠障害得点が6点以上であった対象者は48%であった。社会的時差ボケの四分位数は0.5、1.2、1.9時間であった。社会的時差ボケを1時間以上有する対象者は60%、2時間以上が24%であった。睡眠不足度の四分位数は9、24、44分であった。睡眠不足度が60分以上の対象者は15%であり、120分以上が3%であった。これらのことから、社会的時差ボケの要因である起床、就寝時刻の不規則性の影響が睡眠障害得点を高める要因になりえるものと推測される。提出された主な改善策は「ICTを使用することで定期的に睡眠習慣を評価できる」「睡眠障害得点が思ったよりも高く、休日であっても起床や就寝時刻の差を1時間程度にする」などであった。ICTを活用した睡眠習慣の定量的把握によって、改善策の第1歩を踏み出しやすいものと期待される。今後は、ICTを活用した睡眠スクリーニングによって、真に睡眠の改善指導が必要な対象者を効率的に選定し、効果的な睡眠指導を実施する。【結論】ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査から、48%が睡眠障害を有し、60%が1時間以上の社会的時差ボケを有することが明らかになった。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:30 ~ 13:50

[健康福祉-A-01]

一事例研究によるSNS運動プログラムの効果の検討（測,コ）

*兼山 真愛¹ (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科)

13:50 ~ 14:10

[健康福祉-A-02]

日中の眠気に対する等尺性ハンドグリップトレーニングの効果検証（生）

主観および客観評価を用いたパイロットスタディ

*山形 高司¹ (1. 川崎医療福祉大学)

14:10 ~ 14:30

[健康福祉-A-03]

転倒予防アセスメント・ツール“Strömqvist Bååthe Falling Competence” (SBFC)日本語版の開発（介）

*曾我部 晋哉¹、ソリドーワル マーヤ² (1. 甲南大学、2. 津田塾大学)

14:30 ~ 14:50

[健康福祉-A-04]

バーチャルリアリティを用いた簡便な歩行分析システムの精度検証（測）

高齢者の歩行支援への応用を目指して

*脇 遼太郎¹、井上 純輝^{1,2}、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. ソニー株式会社技術開発研究所)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:30 ~ 13:50

[健康福祉-A-01] 一事例研究によるSNS運動プログラムの効果の検討 (測,コ)

*兼山 真愛¹ (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科)

【背景・目的】近年、若者は「トレーニング」や「ダイエット」といったワードに敏感で、SNSを活用した運動プログラム動画を実践する人が増えている。本研究では、一事例研究法を用いて、SNSで発信されている運動プログラムの効果を検証することを目的とした。

【方法】対象者は22歳の女性1名であり、2024年6月から11月までの5か月間を研究期間とした。使用する運動プログラムは、大殿筋を鍛えるトレーニング（以下Tg、12分）と骨盤矯正のストレッチ（以下Sp、10分）であり、①入浴前Tg、②入浴後Tg、③入浴前Tg+Sp、④入浴前Tg+入浴後Spをそれぞれ21日間（インターバル〇日）実施した。大腿最大周径部（大腿上部）、膝直上大腿部（大腿下部）、下腿部の周径、皮下脂肪厚を毎日測定した。これらの値から、全面積、筋面積、脂肪面積を算出した。それぞれの測定値の変化について、共分散分析を用い、傾き・切片の差を検証した。

【結果・考察】測定部位三箇所の三つの断面積とも、トレーニングにより有意に減少し、筋量は増加すると予想した仮説とは異なっていた。多重比較の結果、脂肪面積は、②④より①③が傾きは有意に大きく、筋断面積は、大腿上部では②④より①③が、大腿下部では②③より①④が、下腿部では④より①②③がそれぞれ傾きは大きく、筋の低下傾向は部位により差が見られた。総じて、筋量、脂肪量ともにトレーニング・ストレッチとも入浴前に実施したほうが減少率が高いことが明らかとなった。

【結論】入浴前に行うトレーニングは、全体・筋・脂肪の各面積を減少させ、より高い効果が得られた。また、骨盤矯正を組み合わせた複数の運動プログラムを実施することで、脂肪減少に対する効果が高まる可能性があることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツは
いかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:50 ~ 14:10

[健康福祉-A-02] 日中の眠気に対する等尺性ハンドグリップトレーニングの効果検証（生）

主観および客観評価を用いたパイロットスタディ

*山形 高司¹ (1. 川崎医療福祉大学)

【背景】日中の眠気は事故の発生や生産性、QOLの低下などにつながる。我々は、等尺性ハンドグリップトレーニングが健常な女子大学生の主観的な日中の眠気を改善させる可能性を示唆する知見を得た。本研究では、日中の眠気症状を呈する対象者に対し、同トレーニングが日中の眠気に及ぼす影響を主観的および客観的に検討することを目的とした。

【方法】対象は日中の眠気症状を訴える成人女性5名（42±9歳）とした。6週間、週3回の等尺性ハンドグリップトレーニング（30%MVC、2分間×4セット）を実施し、介入前後にエプワース眠気尺度（ESS）および精神ビジランスタスク（PVT）を用いてランダムな間隔でPC上に提示される信号に対する反応時間（10分間、約100回）から眠気を評価した。夜間の睡眠評価には、ピッツバーグ睡眠質問票（PSQI）とアクチグラフを用いた。介入期間前後の測定値の比較には、Wilcoxonの符号付順位和検定を用いた。

【結果および考察】ESSは中央値15（12–17）点から12（7.5–16）点へ変化（ $P=0.250$ ）、4名に改善がみられ、そのうち2名は5点以上の大幅な改善を示した。PVTの有意な変化は認められなかったが、ESSが大幅に改善した2名で反応速度の向上が確認された。PSQIは中央値9（6.5–10.0）点から9（6.0–10.0）点（ $P>0.99$ ）へ推移し、アクチグラフによる睡眠効率 $\bar{x}$ は中央値85.7（77.5–89.1）%から82.2（64.8–85.5）%へ低下傾向を示した（ $P=0.063$ ）。睡眠の変化は、実験期間（春から夏）の変化による環境温度変化の影響と考えられる。

【結論】等尺性ハンドグリップトレーニングは日中の眠気症状を主観的ならびに客観的に改善し、その効果は夜間の睡眠変化に依存しない可能性が示唆された。ノンレスポonderの特定や運動方法の更なる検討が求められる。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツは
いかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

14:10 ~ 14:30

[健康福祉-A-03] 転倒予防アセスメント・ツール“Strömqvist Båathe Falling Competence” (SBFC)日本語版の開発 (介)

*曾我部 晋哉¹、ソリドーワル マーヤ² (1. 甲南大学、2. 津田塾大学)

転倒は、死亡事故に至らなくても、重篤な頭部傷害などにつながることも多く、WHOも転倒予防対策を各国に要請している。この要請を受け、我々の柔道を利用した世界共通の転倒予防プログラム開発チームでは、2024年5月には我々を含む転倒予防に関する研究者による公式声明“Global Consensus Statement How Can Judo Contribute to Reducing the Problem of Injurious Falls in Older Adults?”を発表し研究を推進してきた。柔道を利用した転倒予防プログラムを実施することで、転倒リスクの低減につながることはこれまでも証明されている (Jadczak AD et.al. 2023)。更には、高齢者に安全な転倒方法を身に付けさせることで、転倒に対する恐怖やリスクを低減し医療費削減にも寄与すると考えられる。現在、スウェーデンの研究者を中心に安全に転倒する能力を評価するStrömqvist Båathe Falling Competence (SBFC) テストが開発され、その有効性が示されている。SBFCテストにおける「転倒能力」とは、転倒の仕方を知的に知っていること（理論的知識）、転倒を行う自信があること（効力）、そして柔道から着想を得た転倒・安全着地戦略に従って安全に転倒を行う運動技能や筋力があること（身体能力）の組み合わせである。既に、オーストラリア、スペインではオリジナルのSBFCテストを改良し英語版として研究を始めている。本研究では、専門家により英語を日本語に翻訳し、更に日本語を英語に翻訳することで翻訳に齟齬がないことを確認し、日本の転倒予防のアセスメントに寄与する世界共通の転倒予防アセスメント・ツール日本語版を提案したいと考えている。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

14:30 ~ 14:50

[健康福祉-A-04] バーチャルリアリティを用いた簡便な歩行分析システムの精度検証（測）

高齢者の歩行支援への応用を目指して

*脇 遼太郎¹、井上 純輝^{1,2}、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. ソニー株式会社技術開発研究所)

超高齢社会において、高齢者の転倒は社会的問題となっている。高齢者の一部では、歩行中に足元を注視することが指摘されている。足元の注視は、安全な移動に必要な歩行中の進路認識を妨げ、転倒危険性を高めてしまう恐れがある。本研究室は今までバーチャルリアリティ（VR）を用いて、歩行中の進路認識を評価するVR-MTS課題を開発してきた。VR-MTS課題とは、歩行路に等間隔で配置した3色の四角形のうち、指定した1色を連続で踏み続けるMTS課題をVR上で再現した課題である。MTS課題では、頭部と両足部の位置情報を用いて課題遂行時間や頭部屈曲角度を分析し、課題中の行動特性を評価する。本研究では、VR 機器を用いて頭部と両足部をトラッキングする簡便な歩行分析システムを開発し、その測定精度を動作解析装置と比較する形で検証した。健常若齢者10名（ 25.6 ± 4.2 歳）を対象とし、VR-MTS課題を15試行実施した。課題中の課題遂行時間と頭部屈曲角度を動作解析装置と簡便な歩行分析システムで測定した。2つ測定機器での課題遂行時間と頭部屈曲角度の測定誤差を算出し、測定誤差の平均値及び95%信頼区間を算出する形で測定精度を検証した。実験の結果、課題遂行時間の絶対誤差については平均値が0.11秒、95%信頼区間が0.02～0.16秒であった。頭部屈曲角度の平均絶対誤差については平均値が 1.46° 、95%信頼区間が $0.17 \sim 2.76^\circ$ であった。課題遂行時間と頭部屈曲角度の結果は、本歩行分析システムは動作解析装置に近い測定精度をもつことを示した。これにより、高額な動作解析装置を用いなくても、本システムを用いて高精度かつ簡便に動作解析が行える可能性が示唆された。将来的に、道路横断場面など、より実践的な場面をVRで再現し、そうした場面の歩行を安全に評価することも可能である。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-07]

都市空間におけるスケートボードを「犯罪化」するポリティクスとは？（社）
スポーツ犯罪学的試論

*市井 吉興¹ (1. 立命館大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-08]

セメイヤ事件における対立構図の再考（哲）
身体的インテグリティ対女子競技のインテグリティ

*松宮 智生¹ (1. 東洋大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-09]

スポーツ・ハラスメント概念設定の必要性（コ）

*秋元 香穂¹、岡出 美則² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-07] 都市空間におけるスケートボードを「犯罪化」するポリティクスとは？（社）

スポーツ犯罪学的試論

*市井 吉興¹ (1. 立命館大学)

本報告の目的は、ポスト東京2020の都市におけるスケートボードを犯罪化するポリティクスの把握を試みることにある。周知のように、東京2020オリンピックとパリ2024オリンピックにおける日本のスケートボード・オリンピアン活躍は、多くの日本国民によって称賛され、公設のスケートボードパークの増設を後押ししてきた。その一方で、ストリートでのスケーターのスケートボードがメディアによって報じられ、今まで以上にスケーターが厳しく非難されることも増えてきた。さらには、スケートボードやスケーターをストリートからスケートボード専用の施設、つまり、スケートボードパークへと「囲い込む」ことを当然視する傾向も強まっている。このような現状を分析するにあたり、本報告は近年英語圏のスポーツ研究において注目されている「スポーツ犯罪学」という理論枠組みを参照する。スポーツ研究に犯罪学的な視点を導入することのアクチュアリティとは、近代スポーツと社会規範との「適切な関係」を批判的に考察することにある。まさに、スケートボードは、近代スポーツと社会規範との「適切な関係」を動揺させるものと捉えられている。それゆえに、都市空間の秩序を形成するために、スケートボードを「犯罪化」することが検討され、実施されてきた。しかし、ストリートでのスケートボードが迷惑行為と認識され、その解決がスケーターのモラルやマナーに任されているようでは、ポスト東京2020オリンピックのスケートボード文化は醸成するのであろうか。そもそも、スケートボードは「犯罪」なのであろうか。本報告では、スポーツ犯罪学という理論枠組みを参照しながら、都市空間の規制化や衛生化、近代スポーツのイデオロギーとの編み合わせに注目し、スケートボードを犯罪化するポリティクスを検討する。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-08] セメンヤ事件における対立構図の再考 (哲)

身体的インテグリティ対女子競技のインテグリティ

*松宮 智生¹ (1. 東洋大学)

2018年、国際陸上競技連盟（IAAF。現世界陸上競技連盟：WA）は、DSD（からだの性の多様な発達）を有する女性選手が女子種目に参加する条件として、経口避妊薬の服用等によって、血清中テストステロンを一定の基準以下に抑制することを求める規定、いわゆる「DSD規定」を制定した。セメンヤ事件は、南アフリカのキャスター・セメンヤがDSD規定の停止を求め、スポーツ仲裁裁判所（CAS）に仲裁を申し立てた事例である。

CASは、セメンヤを含むすべての選手が競技に参加する権利と、男子選手と比較して生物学的に不利な女子選手の権利とが相反し、両立し得ないとしたうえで、DSD規定が女子種目の公平性を守るために必要であり、手段（経口避妊薬の服用等）についても適切であるとし、セメンヤの訴えを退けた。

CASの裁定に対しては、女子競技における包摂性と公平性を中心に議論がされてきたが、経口避妊薬服用の要求については、身体の根源的権利である「身体的インテグリティ」（他者から身体への介入を受けず、あるがままの身体でいる権利、あるいは、その人にとって良好な状態でいる権利）が侵害されているにもかかわらず議論が乏しい。

そこで、本発表において、セメンヤ事件が「身体的インテグリティ」対「女子競技のインテグリティ」という対立の構図を有し、CASがスポーツにおける「女子」を狭く定義したうえで、セメンヤの身体的インテグリティが女子競技のインテグリティに収まらないがために、セメンヤを女子競技から排除したことを指摘する。

多様な性のあり方をめぐっては、スポーツのみならず、政治の舞台でも対立や分断が生じている。スポーツの世界では、性別二元制を堅持し、公平性にこだわり（あるいは、公平性を名目に）、身体的インテグリティを侵害する事態が起きている。本発表では、身体に関する権利の重要性を説き、これらの権利を守るスポーツのあり方を構想したい。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月28日(木) 9:00～10:00 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:40～10:00

[スポーツ文化-B-09] スポーツ・ハラスメント概念設定の必要性 (コ)*秋元 香穂¹、岡出 美則² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

我が国では、スポーツに関連した暴力問題を適切に表現する際には、厚生労働省の職場におけるパワー・ハラスメントやセクシュアル・ハラスメント等が引用されることが多い。そのため、スポーツに関連した多様な暴力の実態把握やその派生機序が明らかにされにくいまま今日に至っていると考えられる。しかし、スポーツの価値を高めるスポーツ関係者の取り組みの中で、日本スポーツ協会がスポーツ・ハラスメントの定義を明示するようになっている。しかし、同概念がスポーツに関わるハラスメントの実態把握にどのような効果を生み出しているのかは定かではない。そこで、本研究では、日本スポーツ協会のスポーツ・ハラスメントの概念を踏まえ、学術研究で報告されている我が国のスポーツ・ハラスメントの実態把握を試みることを目的とした。そのため本研究では、スポーツ・ハラスメントをキーワードとして設定し、J-stageとCiNiiを使用して学術誌で確認できるスポーツに関連した暴力の実態を把握することとした。その際に学術誌においてスポーツ・ハラスメントが扱われた始めた時期を把握するため、論文の出版時期を限定せずに対象文献を抽出した。分析に際しては、重複文献並びに本文がないもの、趣旨から外れるものは対象外とした。また、対象文献に記された実態の分析に際しては被害者、被害時期、加害者等の観点を設定した。その結果、調査対象数としては親が多くみられた。また被害時期については中学生が最も多く、加害者については他の部員が最も件数が多かった。またが多くを占めた。この結果から、現状では指導者以外が加害者になっているケースがみられるにもかかわらず、スポーツ・ハラスメントに関する研究は指導者（加害者）とスポーツ競技者（被害者）という枠組みで展開されていることが多いことが示唆された。このことは、スポーツ・ハラスメントの概念検討の必要性を示唆している。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈ーにいかに向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01]

JICA海外協力隊体育隊員の活動考察 (人)

オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02]

中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化 (教)

自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勸¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03]

野球未開の地における競技普及 (経,人,政)

MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04]

なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか？ (社)

日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01] JICA海外協力隊体育隊員の活動考察（人）
オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

近年、開発と平和のためのスポーツに関する取り組みが盛り上がりを見せている。日本の取り組みの中心となるのは、JICA海外協力隊の体育・スポーツ隊員であると考えられる。だが、体育・スポーツ隊員の考察は十分にされず、特に、当事者視点による考察が成されていない。当事者視点の考察は、オートエスノグラフィ研究に該当する。よって、隊員の活動をオートエスノグラフィ研究を用い、考察する。その結果、活動における隊員の感情から、文化的・社会的理解を深める。さらに、対象のヨルダンにあるパレスチナ難民キャンプを考察するにあたり、オートエスノグラフィ研究を用いることが、適切である。なぜなら、ヨルダン国民の9割以上がイスラームを信仰し、イスラーム法を守り、生活している。箕浦（1990）が述べるように、日本とは異なる子ども観を有している。加えて、ヨルダンは、パレスチナから難民を受け入れてきた。結果、国連パレスチナ難民救済事業機関が管轄するキャンプが存在し、小中学校もある。国連パレスチナ難民救済事業機関（2000年）によれば、学校では、国連の掲げる価値と原則を確実に準拠するように努めているとしている。そのため、人権などに価値を置く考えが入ってくる。さらに、JICA海外協力隊を中心とした日本人の価値観も流入する。つまり、難民キャンプの学校は「異種混淆」した場所である。その環境での活動は、独自の困難さが生じる。その困難さを考察するには、活動を行った隊員の当事者視点が必要であると考え、オートエスノグラフィ研究を用いる。以上を踏まえ、本発表では、ヨルダンにおけるJICA海外協力隊の活動をオートエスノグラフィ研究と関連づけ述べる。その中では、自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直しを行い、活動を行った当事者による視点を重視する。さらに、「体育」や「スポーツ」、「難民」といったものに揺さぶりをかけることを試みる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに向
かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02] 中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化（教）
自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勤¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

現在、日本の柔道競技の人口減少は顕著であり、また、中学校・高等学校においても部活動の多
様性が求められ、現状の環境では部活動での柔道に魅力を感じることができない生徒が増えて
いる。

そこで本研究では中学・高校の柔道部に所属する柔道競技者が、多様な環境の中でもより楽し
く柔道を続けられることを目的とし、また、先行研究で示されている柔道の本来の魅力の抽出
に留まらず、現代社会における柔道競技の持つ必要性を構造化してみたいと考えた。本研究で
は、柔道の「基本属性」、「社会要因」、「競技特性」、「練習メニュー」、「柔道精神」の
5つの領域に焦点を当て、主に4件法を用いた質問紙調査を東京都内及び栃木県内の中学校・
高等学校柔道部に所属する生徒167名に実施し、統計学的分析(相関係数・クラスター分析・重
回帰分析)を行った。有意水準は5%とした。重回帰分析の結果より、社会要因と練習メ
ニューは全ての項目に対して有意差が見られ、社会要因と練習メニューが柔道の魅力を形成す
るうえで大きな要素であることが示された。特に、他者との広い柔道関係の構築、乱取り練
習、ウォーミングアップでの充実感が柔道の魅力に繋がっていることが示唆された。

クラスター分析の結果より、中高の柔道部活動集団は属性項目や技術から判断すると4グループ
に大別され、その中でも柔道実績の高い人は、柔道の動機づけとして、試合に勝つことではな
く、柔道精神を体得したいと考える傾向があることが示された。ここでの柔道精神とは「精力
善用」と「自他共栄」の精神を指しており、柔道競技での技術的な上達が、これを助長させると
予想される。つまり柔道競技においては、勝敗よりも柔道精神を獲得する行程において、現代の
競争社会や格差社会の改善に繋がる、精神の充足を得られるのではないかと考察した。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03] 野球未開の地における競技普及 (経,人,政)
MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

他競技関係者（ファン？）から「マイナースポーツ」と揶揄（称賛？）されることの多い野球。確かに日本では絶大な人気を誇る野球(*1)だが国内競技人口は減少が止まらず、笹川スポーツ財団の調査では2016年にサッカーに抜かれて以来現在は2位(*2)の268万人になっている。少ない少ないと槍玉に挙げられる割には、100人いたら2、3人は野球をやっていることになる。

そこで今回取り上げるクリケット大国インドである。厳密な数字は難しいが一般的にクリケットの競技人口は約1億5千万人と言われる。マイナースポーツである野球ですら10万人ほどと言われている。まあまあに思えるが、それはインド国民の1万5千人に1人ということの意味している。10人に1人がやっているクリケットとは絶望的な差だ。よく言われる言語や宗教の違い以前に、数字の上でも極めて不利な環境にあるインドで、野球というマイナーな競技を普及させようとする時、どんな戦略が考えられ、どんな困難が体现されるのか。今回の報告ではMLBインドによる野球普及活動を切り口に競技未開の地における普及活動について考察を進める。

先行研究を探すものの「インド・野球」や「インド・MLB」といった基本的なタームですら芯をくったヒットはほとんどない。色々試した結果は「ワインドアップ」「マインドマップ」「ウインドサーフィン」。インドにおける野球普及に関する先行研究はほぼ皆無である。そこで今回はインドにおける野球競技の普及過程について、MLBインドの成立から発展を基軸にインドの野球競技の現状を描くことを目指す。その際、MLBの海外展開、インドにおけるMLBインドの展開、インドの野球普及と本場MLBとの関係の三点を通じて、インドの野球競技普及から競技の本場米国への国際的連関までを俯瞰する考察を進める。

*1：MUFGRC2024年

*2：笹川スポーツ財団2023年

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04] なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか？（社）
日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

グローバル化の進展に伴い、アスリートの国境を越えた移動はキャリア形成上、重要な要素となっている。特に、エリートアスリートの地理的流動性は、国際的スポーツ産業において価値ある資産と見なされ、競技キャリアの発展のみならず、異文化への適応力も求められる。異国でキャリアを構築するアスリートにとって、引退後にホスト国で新たな職業選択を行うことは重大な課題であり、制度的支援の不足や文化的障壁の存在が指摘されてきた。これまでの研究において、アスリートのキャリア発達や引退後の適応に関する知見は蓄積されているものの、ホスト国における移民アスリートのキャリア移行に関する研究は限定的である。本研究は、タイにおいてプロサッカー選手として活動し、引退後に現地で農業に従事している元アスリートを事例とし、移民アスリートにおけるキャリア移行およびその意味づけを明らかにすることを目的とする。質的ライフヒストリー研究のアプローチを採用し、ナラティブ・インタビューおよびリフレクティブ・ライフライン法を用いてデータ収集を行った。データ収集は2回の半構造化インタビューで構成され、1回目は幼少期から現在に至る人生経験、教育歴、スポーツキャリア、引退後の職業選択、文化的適応に関する自由叙述を促した。インタビュー中に語られた主要なライフイベントは研究者によって時系列で整理され、2回目のインタビューではそのライフラインを視覚資料として提示し、参加者とともに内容の検討・修正を行いながら、人生の転機に関する内省を促進した。参加者は各転機の意味づけおよび感情的影響（0～10段階）を示し、人生軌跡に対する認識を再構築した。本発表では、移民アスリートのキャリア移行およびその意味づけの分析を通じ、国際的競技経験が引退後のキャリア選択にいかなる影響を与えるのかを明らかにし、ホスト国におけるアスリートのキャリア形成に関する理解の深化を図る。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-10]

嘉納治五郎は絞技と関節技をいかに考えていたか (人)

*稲川 郁子^{1,2} (1. 日本体育大学、2. 公益財団法人全日本柔道連盟医科学委員会)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-11]

伝統芸能の身体教育における「なぞり」と「さぐり」の構造に関する研究 (社)

*迫 俊道¹ (1. 大阪商業大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-12]

蹴鞠未経験者を対象とした「蹴鞠技術習得」までのプロセスに関する研究 (人)

*阿羅 功也¹ (1. 旭川工業高等専門学校)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-10] 嘉納治五郎は絞技と関節技をいかに考えていたか (人)

*稲川 郁子^{1,2} (1. 日本体育大学、2. 公益財団法人全日本柔道連盟医科学委員会)

柔道は、嘉納治五郎（以下「嘉納」）により、柔術から危険な要素を取り除き教育に活かせるよう再編、創出されたものである。一方で嘉納は、柔道の武術性も重視し、殺傷の技術としての柔道を放棄することはなかった。嘉納は、危険度の高い当身技については「形」にいわば封印したが、固技から絞技と関節技を排除することはしなかった。嘉納は「咽喉を絞めて一時気絶することがあるを嫌うものがあるが、活さえ入れれば、すぐ平生の通りになるもの」「関節の傷んだのは内臓に故障が出来たのと違い、療治をして少し注意さえすれば、癒るもの」と述べる。さらに嘉納は「絞業〔ママ〕の場合は実際絞っているのに合図をせぬことがあり、関節業〔ママ〕の場合にもそれ以上我慢すれば怪我をするという場合に、合図がなくも審判者の見込で勝負を決定することが出来るようにしてある」と述べ、「見込」による勝負判定を是とし修行者の安全に配慮している。また嘉納は「固勝負」について、投技と異なり「負け方の修行をことさらにする必要がない」と述べている。つまり、柔道修行者は、投技への対処として「受身」を習得するが、固技については「負け方の修行」に相当するものがないと主張する。本研究では嘉納による絞技や関節技に関する言及を手がかりとしながら、嘉納がこれらの技術に対しどのような思想を持っていたかについて考察した。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-11] 伝統芸能の身体教育における「なぞり」と「さぐり」の構造に関する研究 (社)*迫 俊道¹ (1. 大阪商業大学)

「日本の芸道で習得すべきものは、もともと単元に分割できるものでもなく、明確な言葉で目標を語れるものでもなく、ただ理想事例を手本にその活動の全体を身をもってなぞるほか仕方がないもの」(尼ヶ崎『ことばと身体』勁草書房、1990年)と表されている。「なぞり」は学習者が指導者の模範例を習う際の方法として論じられてきた。

本報告者は日本の芸道の伝承者(指導者、学習者)の間で展開される相互作用に関して、伝承に付随する段階性の概念を分析してきた。指導者と学習者の相互作用の中で学習者が新たな身体所作を獲得した瞬間においては、指導者は学習者に次の新たな段階へと進む課題を提示することがわかった。この段階性の生成には、指導者、学習者で展開される「なぞり」という相互作用が影響している。

さらに本報告者は伝統芸能の「神楽」の参与観察を行い、指導・学習過程について調査研究を行ってきた。その結果、学習者が指導者の模範演技を「なぞる」だけでなく、指導者もまた学習者の動きを「なぞる」行為が確認された。また、指導者は自身の身体を用いて、学習者の技芸の正否の確認、検証を行っており、「なぞり」では説明が困難な事象が浮かび上がった。それは指導者が学習者の躰きを「探る」行為(さぐり)と推測出来た(「さぐり」とは、本報告者が「なぞり」の概念を踏まえて創り出した造語である)。

本研究では指導者と学習者による「なぞり」と「さぐり」が、伝統芸能の稽古の場面においてどのように現出しているのかを描出し、「なぞり」と「さぐり」の相互性に関して考察を行った。実際の伝承活動では指導者が学習者に身体所作を教える際、学習者が直面している課題は何か、指導者はその要因を探るために様々な試みを行っている。学習者もまた「さぐる」行為を行っているが、指導者と学習者の「さぐり」には相違がある。本研究はJSPS科研費JP19K11609の助成を受けた。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:40～10:00

[スポーツ文化-B-12] 蹴鞠未経験者を対象とした「蹴鞠技術習得」までのプロセスに関する研究 (人)*阿羅 功也¹ (1. 旭川工業高等専門学校)

これまでの蹴鞠研究は渡辺融氏、桑山浩然氏の「蹴鞠の研究－公家鞠の成立－」によってまとめられている。そこには貴族の蹴鞠「公家鞠」が成立した背景やその技術、施設・用具といった全体像が記されている。大衆の蹴鞠「地下鞠」についても村戸弥生氏が外郎右近政光著『中撰実又記』を翻刻したことによって町人層が愛好した蹴鞠の様態も明らかとされた。貴族と大衆によってその技術構造が異なることは蹴鞠の特徴であるが、蹴鞠技術を身につけるまでの記録や研究は蓄積されていない。そこで本研究の目的は、蹴鞠未経験者が蹴鞠技術の習得するまでのプロセスを明らかにすることである。まず、紙風船のような特徴的な構造を持つ蹴鞠の持ち方について。蹴鞠の「ふくら」と呼ばれる部分を押しつぶし、蹴鞠を蹴り上げる前に鞠が変形する事象が多く現れた。蹴鞠の「とり革」と呼ばれる突起を掴む変形させない持ち方指導と鞠構造の理解は、鞠を蹴り上げる以前に必要な不可欠であった。次に、蹴鞠を持ち自ら蹴り上げる「1足目」では、鞠を手から大きく投げ上げ足を振る様子が見られた。蹴鞠は110-120gとサッカーボールと比較しても軽いため、屋外で実施される蹴鞠は風の影響も受けやすく投げ上げた鞠は揺れ動くことになる。さらに目測の難易度も上がるため1足目が右足に当たらない。鞠は胸の前で肘をやや伸ばした状態で抱え、鞠を離すのみ。落下地点に足を送り込むことで安定した1足目となった。また、サッカーのリフティングのように足の甲で鞠を捉える様子も多く見られた。表面積の大きい足の甲で鞠を捉える蹴り方では、紙風船構造の蹴鞠は凹みやすい。足のつま先、つまり点で捉えることによってこの凹み問題は解決することができた。このように蹴鞠技術習得にはまず、蹴鞠の「鞠」構造に関する知識・理解が必要不可欠であり、蹴鞠技術書に記載されている内容を元にした技術習得も有効であることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-B-13]

学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討 (教)

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14]

ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点 (史)

*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

**[スポーツ文化-B-13] 学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討
(教)**

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

東京2020大会に向けて全国各地で展開されたオリンピック・パラリンピック教育の大会後の継続状況と、活動内容、必要とされる支援等について、これまで2年にわたり本学会で報告してきた。各国で過去に行われたオリ・パラ教育について、大会後の継続や学校教育への定着に関する研究はほとんど行われていない。大会のレガシーとして何が残されたのか（Post Games Legacy）を明らかにすることには意義があり、そのためには継続的な調査が必要である。本研究では大会終了後3年間継続して実施している調査から、大会後の学校におけるオリ・パラ教育活動の実態を明らかにし、大会のレガシーを検討することを目的とした。2024年度は5つの自治体を対象としたが、昨年度から継続して対象とした4自治体のうち3つで回答校数が増加し、2つについては大幅に増加した。2024年夏にパリ大会が開催されたことから、教員や児童生徒の関心が高まったものと考えられる。昨年度までの調査から、大会の終了後、時間を追ってオリ・パラ教育の実施率は低下していたが、今年度は4割強～6割と向上した。パリ大会が開催されたことに加えて、大会後に自治体が主体となってアスリート派遣やスポーツ教室等が行われている自治体があり、それが定着していることが示された。教育活動を実施しない理由としては、これまでと同様、時間の確保が困難であること、教育課程に位置付けられていないことが多く挙げられた。具体的な展開の機会として、教科教育が6～7割と最も多く、学校行事の活用は1割前後と低かったが、福祉・人権教育などの題材としては高い割合で活用されていた。大会終了後一定の時間が経過しても、学校教育の様々な場面でオリ・パラ教育が定着していることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14] ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点 (史)*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

「スポーツと平和」の源流は、近代オリンピックの制度を創出したピエール・ド・クーベルタン（1863-1937年）の思想にさかのぼる。本発表では、平和に関するクーベルタンの初の論考である「平和への教育」を取り上げ、彼がスポーツと教育と平和を結びつけるに至った背景とその内容とをQuanz（1994年）に学びながら明らかにする。「平和への教育」は、社会経済学会発行の『社会改革』1889年9月号で発表された小論である。1889年は6月にパリで列国議会同盟が設立されるなど、組織的な国際平和運動の起点となった年である。この小論には、列国議会同盟設立の会議で示されたという、学校の中で生じた争いを自分たち自身で解決するという仕組みの教育現場への導入が紹介されている。クーベルタンはこの平和教育の一つのモデルを、パブリック・スクールのスポーツ活動の中に見ていた。例えば、イギリスではボクシング・グローブが「平和の番人」と呼ばれ、ボクシングが子どもたちに「より長続きする確かな平和をもたらす」と述べている。イギリスの教育についてのさらなる指摘は、クーベルタンが「うってつけの審判」と形容するキャプテンの存在である。年齢や日々の行い、スポーツ競技における力と巧みさの点で仲間の長となったキャプテンは、重みのある言葉や絶対的な権威により喧嘩をしずめ、仲間を驚かせるような賢さを示すと説明されている。クーベルタンは「平和への教育」の冒頭で、戦争仲裁の枠組みを作ろうとする列国議会同盟の目標を高く評価している。少年たちの社会におけるキャプテンの役割（うってつけの審判）は、まさに争いの仲裁である。この同じ構図が、スポーツ（オリンピック）が「全世界の平和を確保する、間接的にはあるが有力な一要因となる」（1896年）という、クーベルタンによるスポーツと平和に関する思想につながっている。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-07]

大学サッカー選手におけるロングキックの飛距離と利き足、非利き足の筋力、筋量の関係（生,バ,測）

*加藤 雄一郎¹、阿部 渉² (1. 平成国際大学、2. アローレ八王子)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-08]

大学トップレベルのサッカー選手における突破のドリブル時の視線探索行動（コ）

*多賀 健¹ (1. 苫小牧工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-09]

全天球カメラ映像を活用したサッカーの個別練習の検討（コ,教）

*寺田 進志¹ (1. 大阪国際大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-07] 大学サッカー選手におけるロングキックの飛距離と利き足、非利き足の筋力、筋量の関係（生,バ,測）

*加藤 雄一郎¹、阿部 渉² (1. 平成国際大学、2. アローレ八王子)

【緒言】 青少年期のサッカー選手におけるロングキックにおいて、スイング速度、ボール飛距離ともに大腿筋量との間に正の有意な相関があったことが報告されている（谷口, 2002）。そこで本研究の目的は、サッカーのロングキックにおけるボール飛距離と、利き足（蹴り足）、非利き足（支持足）の筋力、筋量との関係を明らかにすることであった。【方法】 対象者は、サッカー部に所属する男子学生15名であった。ボール飛距離の測定は、利き足でのインステップ、インフロントキックで2回ずつ蹴ってもらい、メジャーでメートル単位で計測した。脚筋力の測定には、片足用筋力測定台（竹井機器工業, T.T.K571）を用い、脚伸展筋力（利き足、非利き足）、膝屈曲筋力（利き足、非利き足）を測定した。脚筋量の測定にはInbody 体成分分析装置（Inbody 770）を用い、両足について1/10 kg 単位で分析した。【結果】 インステップキックとインフロントキックにおけるボール飛距離と膝伸展筋力との間には、利き足で有意な相関関係は見られなかったが、非利き足で有意な相関関係が認められた。一方、両キックともボール飛距離と膝屈曲筋力、脚筋量との間には、有意な相関関係が認められなかった。【考察】 インステップキック、インフロントキックともにボール飛距離に関係したのは、支持足の膝伸展筋力であった。支持足の筋力は、蹴り足の運動エネルギーが最大になる点、すなわち支持足の真横にボールがある時、最大になることが考えられる。このことから、蹴り足よりも支持足の伸展筋力がボール飛距離に関係していなと示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-08] 大学トップレベルのサッカー選手における突破のドリブル時の視線探索行動 (コ)

*多賀 健¹ (1. 苫小牧工業高等専門学校)

＜目的＞本研究の目的は、大学トップリーグに属するサッカー部の中でドリブルスキルがハイレベルの選手と、ミドルレベルの選手を対象に、視線計測器を用い、突破のドリブル時の視線の停留時間や回数、経路、及び認知情報を比較検討することで、突破のドリブルにおける熟練者の視線探索行動を明らかにすることである。

＜方法＞実験参加者は、大学トップリーグに属するサッカー部の中で、ドリブルスキルがハイレベルの選手5名、ミドルレベルの選手10名であった。実験参加者は視線計測器（Tobii Pro Grass3）を装着し、守備者との1対1のドリブル突破を5回試みた。測定項目は、攻撃者が守備者の突破を図る2秒前から突破するまでの注視点の①停留（脳に送られる視覚情報）時間、②停留回数、③停留経路、④各試技後のインタビューによる認知情報であった。

＜結果＞成功回数は、ハイレベル群がミドルレベル群より有意に多かった。視線の停留の合計時間は、ハイレベル群は守備者の足や膝で有意に長く、ミドルレベル群は守備者の足下で有意に長かった。視線の停留回数は、ハイレベル群は守備者の足や膝で有意に多く、ミドルレベル群は守備者の足下で有意に多かった。インタビューによる認知分析では、ハイレベル群は足や膝、ミドルレベル群は足や足下を認知していた。

＜結論＞ハイレベル群は、①守備者の足を長い時間、かつ多く見ている、②守備者の足や膝の動きを認知している、③守備者の足の接地や、膝関節の屈曲による重心変動から、突破のタイミングを見計らい、成功回数を高めていると考えられる。突破のドリブルでは、熟練者は視線を守備者の足に向け、守備者の足や膝の動きを認知しながら突破のタイミングを図っていることが示唆される。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-09] 全天球カメラ映像を活用したサッカーの個別練習の検討（コ、教）*寺田 進志¹ (1. 大阪国際大学)

サッカーの指導現場では練習や試合を撮影し、その映像を用いて個人やチームの技術・戦術の指導を実践することは一般である。この際、一般には市販のビデオカメラで撮影が行われる。撮影された映像を選手自身が観察する場合、その選手は外部視点から自身のプレーを観察することになる。このような観察は他者観察と呼ばれる。他者観察の場合、身体移入の問題が生じる。また、科学技術の発達が著しい昨今、VRをトレーニングに採り入れたU-17ドイツ代表がヨーロッパチャンピオンになったという事例が紹介される（Adam, 2023）。しかし、VRである以上、その映像はあくまで仮想でしかない。

筆者は選手に装着して全天球を撮影できるカメラの映像を使用する機会に恵まれ、その映像を基にサッカーの個別練習を実施した。全天球カメラから得られた映像はその時のプレーを想起させやすいと考えられ、個別練習の可能性を広げることができると考えられる。そこで本研究では、選手が試合中に装着した全天球カメラから得られた映像を活用して実践されたサッカーの個別練習について検討することを目的とする。

検討の結果、全天球カメラから得られた映像を活用した個別練習は個人の競技力向上に有効な方法となり得る可能性がある、と結論づけられる。サッカーの個別練習の際、指導者は「試合を想像して練習しよう」と選手に投げかけることがある。この際、そのプレー時の自身の立ち位置から全方向を観察することで、その場面を「ありありと」想像しながら練習することができるだろう。この映像を、このように活用することで個別練習の質を向上させられると考えられる。今後、スポーツ運動学の立場から個別練習を実施する選手や指導者を厳密に分析することで、新たな練習法や指導法の開発に繋がる可能性があると考えられる。ただし、カメラ自体の限界もあるため、同時にその改善も要することを付言する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-13]

競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性の比較 (コ)
GPSデータを用いた競技力向上のための比較分析

*稲田 鎮¹、中野 貴博¹、中本 光彦¹、水野 太智¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-14]

セイバーメトリクス指標を用いた大学野球の勝率に影響を与える要因の検討 (コ)

*八田 歩¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学 体育学部)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-15]

世界男子ハンドボール競技のセットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレー (コ)

*宮代 花菜¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-13] 競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性の比較 (コ)

GPSデータを用いた競技力向上のための比較分析

*稲田 鎮¹、中野 貴博¹、中本 光彦¹、水野 太智¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

【目的】ラグビーにおいては、試合中の運動量が勝敗を分ける重要な要因である。しかし、むやみに運動量が多いばかりでは効率的ではないことも考えられ、適切な運動強度やポジションにおける役割分担に基づく運動特性が重要になることも考えられる。そこで本研究では、競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性を検討することで、今後の競技水準向上のための示唆を得ることを目的とした。【方法】2024年度の東海リーグ1部に所属するC大学、全国大会上位のD大学、トップリーグ所属のチームEの試合中の運動特性をGPS計測器により計測した（最高速度等の6項目）。C大学は、リーグ戦全7試合を対象とし、出場時間が40分以上のデータのみを有効とした。D大学、チームEに関しては、web上に公表されているデータを二次利用した。最初に、C大学と他チームの各項目の差をt検定により確認した。次に、C大学におけるポジションおよび試合展開（得点差で2分類）による各項目の違いを二元配置分散分析により検討した。【結果・考察】中速度走行距離、高速度走行距離、一分間走行距離、総走行距離はC大学がFW、BKともに概ね有意に長くなっていた。一方、最高速度はFWにおいてチームEに有意に劣り、アクセル回数はFW、BKともに他2チームに有意に劣っていた。C大学内の比較では、最高速度、中速度走行距離、高速度走行距離ではポジション間の有意な差が確認された。また、一分間走行距離、総走行距離では、点差が少ない試合でいずれもBKが有意に長くなっていた。これらのことから、瞬間的な加速局面の回数の差が競技水準に強く影響すること、競技水準が高い程ポジション間の走行距離が明確になることが明らかになり、試合中におけるメリハリや明確な役割分担が重要な要素となっていることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-14] セイバーメトリクス指標を用いた大学野球の勝率に影響を与える要因の検討 (コ)

*八田 歩¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学 体育学部)

本研究の目的は、セイバーメトリクス指標を用いて大学野球の勝率と関連する要因を明らかにし、競技力向上に資する知見を得ることである。対象は、全国26連盟中、一球速報.comのウェブ上で確認できた2024年春季および秋季リーグ戦に出場した22連盟138チーム（1622試合）とした。各リーグで勝率1位となったチームをTop群（以下、T群； $n=23$ ）、その他をNon-Top群（以下、N群； $n=115$ ）として分析を行った。使用した指標は、FIP（投手力）、OPS（打撃力）、DER（守備力）、Spd（走塁力）である。統計処理は、正規性を確認後、各指標についてT群とN群の比較、ならびに各群における勝率と各指標との相関関係を検討した。その結果、T群はN群に比べ、すべての指標で有意に優れていることが示された（ $p<0.001$ ）。勝率と各指標の関係では、N群で全ての指標が有意な相関が認められ、OPSが最も強い相関を示した

（ $\rho=0.769$, $p<0.001$ ）。一方、T群においてもOPSが最も強い相関を示した（ $\rho=0.735$, $p<0.001$ ）が、FIP（ $\rho=-0.019$, $p=0.930$ ）およびDER（ $\rho=0.397$, $p=0.061$ ）との間には有意な相関が認められなかった。以上の結果から、大学野球の勝率は、特にOPSと関連している可能性が示唆された。また、T群のような競技力の高いチームでFIPおよびDERと勝率との相関がみられなかったことは、N群に比べ、これらの指標がいずれも高水準で安定しており、チーム間での差が小さかった可能性が考えられる。したがって、大学野球においてはOPSの向上が勝率改善に向けた重要な要素であると考えられる。また、N群のような下位チームにおいては、FIPおよびDERを向上させ、失点抑制に向けた取り組みの必要性が示唆され、指導現場では競技力に応じた実践が求められる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-15] 世界男子ハンドボール競技のセットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレー (コ)*宮代 花菜¹ (1. 筑波大学大学院)

ハンドボール競技におけるスクリーンプレーは、ディフェンダーの進路を身体で遮断するピヴォットプレーヤー（スクリーナー）と、それを利用するプレーヤー（ユーザー）によって行われる代表的なグループ戦術である。このスクリーンプレーは、ディフェンスの連携を崩し、ユーザーが空間的に優位な状況を得ることや数次的有利の状況を作ること、さらにはスクリーナー自らがフリーとなり得点機会を創出することを目的としている。先行研究において、スクリーンプレーはセットアタックにおいて得点機会を創出する効果的なプレーである可能性が示唆されていることから、セットディフェンスにおいて失点を防ぐためには、スクリーンプレーに対する効果的なディフェンスプレーを行うことが重要である。

本研究の目的は、世界トップレベルの男子ハンドボール競技を対象に、セットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレーの特徴を明らかにし、そこで得られたスクリーンプレーに対する個人およびグループ戦術力向上のための有効な知見を、コーチングの実践現場に提供することである。

方法は、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いる。分析対象シーンは、セットアタックにおいてスクリーナーがディフェンダーの進路を遮断し、ユーザーがそのスクリーンを利用して均衡を打破しようとする試みに対し、ディフェンダーが阻止を試みたプレーである。そのプレーのプロセスを、ユーザーのプレー局面とスクリーナーのプレー局面にモデル化した。それぞれの局面におけるユーザーディフェンダーとスクリーンディフェンダー2名のディフェンスプレーを詳細に分析するための項目を設定した。

現在、データ収集中であり、発表時には最新の結果とそれに基づいた考察を報告する予定である。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-10]

女子100mハードルレース分析（測）

12秒台から18秒台を対象にして

*木村 加乃¹、後藤 悠太²、欠畑 岳³、磯 繁雄³ (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 名城大学法学部、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-11]

全国高校総体陸上競技800mにおける通過順位および位置取りと最終順位の関係（コ）

*佐藤 公一郎¹、丹治 史弥²、杉田 正明³ (1. 東海大学体育学研究科、2. 東海大学体育学部、3. 日本体育大学体育学部)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-12]

空手組手競技大学生競技者を対象にした作戦意識とパフォーマンスの関係（測,コ）

*大徳 紘也¹、西山 哲成¹、大石 健二¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-10] 女子100mハードルレース分析 (測)

12秒台から18秒台を対象にして

*木村 加乃¹、後藤 悠太²、欠畑 岳³、磯 繁雄³ (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 名城大学法学部、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

I 緒言 女子100mハードルは、100mを速く走るスプリント能力やハードルを越えるためのハードリング技術が求められる競技であり、レース中の速度変化や歩数などが競技成績に影響をおよぼす。関連研究は多数存在するが、競技レベルごとの比較やレースパターンに着目した定量的分析は、今後さらに蓄積が求められる。本研究では、様々な競技レベル（12~18秒台）における女子100mハードル選手のレースパターンを分析・比較し、競技レベルの差を生む要因を明らかにする。II 方法 2000年~2024年までに開催された陸上競技大会での女子100mハードルのレースを対象に公的利用可能なインターネットブロードキャストから取得したレース動画を使用した。対象レースは計137レースとし、12秒台17名、13~18秒台20名であった。ハードルクリアランス後の接地から、次ハードルクリアランス後の接地までをワンサイクルと定義し、ワンサイクルにおけるランニングのみの区間とハードリングのみ区間の二区間を抽出した。取得したレース動画を基に歩数・所要時間のみを抽出した。1秒ごとに区切り（計7グループ）各ハードル区間ごとの所要時間の差を検証するために、一元配置分散分析により検証した。多重比較にはBonferroni法を用いた。III 結果と考察 12~18秒台の対象者におけるレースの経時的変化は、12・13秒台でH4-5、14秒台ではH2-3、15~18秒台ではH1-2の区間において最短タイムが出現した。最短タイム出現区間におけるランニングとハードリングの所要時間の相対割合は6:4であり、7つのグループ間でこの割合に有意な差は認められなかった。各サイクルでのランニングでの所要時間と歩数の一貫性が、競技レベルに与える影響が大きいことが示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-11] 全国高校総体陸上競技800mにおける通過順位および位置取りと最終順位の関係 (コ)

*佐藤 公一郎¹、丹治 史弥²、杉田 正明³ (1. 東海大学体育学研究科、2. 東海大学体育学部、3. 日本体育大学体育学部)

【背景】陸上競技800m種目のある地点における通過順位と最終順位には正の相関関係があり、集団の前方で走行することの優位性が示されている。一方で、後方での走行は空気抵抗が減少し、疲労を抑えられる利点もある。レース中に内側か外側のレーンを走行することも、総走行距離や走者のペース調整の自由度に影響する。したがって、通過地点における単なる通過順位よりも集団における位置取りが最終順位に影響を及ぼすと推定される。【目的】陸上競技800mレース中の通過順位および位置取りと最終順位の間関係を明らかにすることを目的とする。【方法】2024年全国高校総体男子800mにおける予選、準決勝および決勝レースを撮影し、全てのレースを分析した。200m、400m および 600m 地点において、競技者の通過順位を読み取った。また、先頭走者からの距離と走行レーンから位置取りを算出した。【結果・考察】予選の通過順位および位置取りは200m($r=0.54$ および 0.47)、400m($r=0.48$ および 0.56)、600m($r=0.59$ および 0.48)の各地点において、いずれも最終順位と有意な正の相関関係($p<0.05$)が示された。これらの結果より、レース序盤から集団の前方に位置することが、最終順位を上位させる可能性が示唆された。先頭走者からの距離が短い走者ほど最終順位が上位になる傾向があり、600m 地点において先頭走者から6.2m以内に位置している場合、準決勝へ進出する可能性が高いことも示された。一方、準決勝および決勝は通過順位および位置取りのいずれも、600m地点のみ有意な正の相関関係が示された($r=0.58$ および 0.52 ; $p<0.05$)。以上より、準決勝および決勝は予選と比べて走者の実力が拮抗しており、上位の最終順位を確実に獲得するため、600m地点までに前方および内側へ位置する傾向があると考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-12] 空手組手競技大学生競技者を対象にした作戦意識とパフォーマンスの関係（測,コ）*大徳 紘也¹、西山 哲成¹、大石 健二¹ (1. 日本体育大学)

スポーツのコーチング実践において、戦略・作戦・戦術という言葉が広く使用されている。スポーツにおける戦術や作戦の意味について、「1チームが各試合において勝利の達成を志向し、攻撃、防御の戦術行動を、意図的、計画的に展開させる仕方、進め方」と示されている（稲垣ら、1985）。勝利を獲得するためには攻撃、防御技術の精度を高めるだけではなく、技術の組み合わせを考えた事前の作戦計画が重要と考えられる。本研究では空手組手競技における事前の作戦意識と試合で実行されたパフォーマンス内容の一致と不一致の様態を調査し、作戦立案に関するコーチング実践に有効な知見獲得を目的とした。分析対象は大学空手道部に所属する組手競技者15名とした。公式大会前日に組手競技の作戦に関する意識調査をオンラインアンケートにより実施した。質問内容は試合局面別に意識する戦術項目とし、試合序盤、中盤、終盤の3局面について47項目を設定した。回答は5件法を用いて行い、意識の度合いについて回答を求めた。試合内容の分析は大会公式ライブ配信映像を用いて行い、作戦意識の調査において意識度の高い項目であった得失点数、先取点獲得数、仕掛技数、試合残り時間帯に関連する7項目を分析した。本研究結果、試合序盤の先取点獲得について、意識度5の回答が60.0%以上意識される結果であったが、勝敗に関係なく先取点獲得は11.0%未満と低い結果であった。試合中盤並びに終盤の失点防止について、意識度5の回答がそれぞれ66.7%以上意識する結果が確認され、勝利時における失点が敗戦時よりも25.5~29.8%低い結果であった。作戦意識とパフォーマンス分析の結果を相互確認することにより、作戦に対するパフォーマンススキルの達成度を客観的に評価できることが考えられ、選手の特性に合わせた作戦又はパフォーマンスへのコーチング実践のための情報となることが考えられた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-16]

レクリエーションレベルのゴルファーのスコア向上に必要な打球およびスイング特性（バ）

*山下 佳倫¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-17]

栗山英樹監督のコーチングにみるアスリートセンタードと4つのコーチングアプローチの統合的活用（哲,コ）

*佐藤 直央¹、佐良土 茂樹² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-18]

女性競技者とコーチの関係性に関する実態調査（社,心,コ）

部活動現場における課題を中心に

*天羽 礼¹ (1. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-16] レクリエーションレベルのゴルファーのスコア向上に必要な打球およびスイング特性 (バ)*山下 佳倫¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

ゴルフでは、少ない打撃でカップに近づけるための長い飛距離と飛翔方向への高い正確性およびそれらの再現性が必要とされる。そこで本研究は、打球の飛距離と飛翔方向への正確性およびそれらの再現性とスコアとの関係を明らかにした。18~69歳の男性73名と女性27名を対象とし、ドライバーと7番アイアンでのショットを10試技ずつ行わせた。レーダー式打球計測器(Trackman4, Trackman社製)で、打球とインパクト直前のヘッドの運動学的変数を測定し、各対象者の平均値と標準偏差を算出した。各変数の平均値について、線形性の関係が想定されるものの中で性別を考慮する必要のないものは相関分析、考慮する必要があるものは性別をダミー変数とした線形の回帰分析、最適値があると考えられるものは二次関数モデルの重回帰分析を行った。各変数の標準偏差は再現性を示す変数として、シーズン平均スコアとの相関分析を行った。分析の結果、スコアの良い対象者ほど両クラブの飛距離、ボール初速、ヘッド速度が大きく、アイアンのスピン量が多いことが示された ($p < .005$)。再現性では、スコアの良い対象者ほど両クラブの打出角、スピン量、ダイナミックロフト、フェースアングル、ドライバーの目標線からの左右のずれ、アイアンのアタックアングルの標準偏差が小さいことが示された ($p < .005$)。力学的因果関係に基づいて考察すると、スコアの良い対象者ほどヘッド速度の高いスイングによりボール初速ならびにスピン量が大きく、飛距離の長い打球を放つことができたと推察できる。また、インパクト時のフェース面の上下左右方向への傾きが試技間で安定しており、打球が到達目標から大幅に変動しない対象者ほどスコアが良かったと考えられる。以上からレクリエーションレベルでは、インパクト時のヘッド速度を高め、フェース面が安定するスイングを身につけることが重要と考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏢 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-17] 栗山英樹監督のコーチングにみるアスリートセンタードと4つのコーチングアプローチの統合的活用 (哲,コ)*佐藤 直央¹、佐良土 茂樹² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

選手の自律性・人間的成長を促すアスリートセンタードコーチング (ACC) は、現代コーチング学で重視される (Kidman, L. 2005)。ACCは選手の主体性を尊重し、「指示・提案・質問・委譲」の4つのアプローチが有効とされる (Kim et al., 2021; Mesquita & Rosado, 2023)。特に「質問・委譲」は内発的動機付けとパフォーマンス向上に寄与する (Mageau & Vallerand, 2003)。本研究は、日本プロ野球で顕著な実績を持つ栗山英樹監督のコーチングを、ACC理念と4つのアプローチから分析することを目的に進めた。栗山氏は、日本ハムでリーグ優勝・日本一、侍ジャパンでWBC世界一を達成した。彼のコーチング哲学は、コーチング理論と実践の橋渡しとなる貴重な事例であり、Côté & Gilbert (2009) のコーチングの有効性にも資する。本研究は、成功事例を理論的枠組みで解明し、普遍的・実践的知見獲得を目指す。本研究は文献研究法を採用する。主要分析対象は、栗山氏の『監督の財産』(栗山, 2024) と『栗山ノート』(栗山, 2019) である。これらの著作に対し質的記述分析を適用し、栗山氏の言動・思考プロセスから、4つのコーチングアプローチ活用事例、ACC理念に合致するコーチング哲学を抽出する。特に、選手の内発的動機付けや主体性を引き出す「質問」や「委譲」アプローチに焦点を当て、その実践的意義を深く掘り下げる。本研究で得られる知見は、栗山氏の成功が現代コーチング学の理論的枠組みと深く関連することを実証し、理論と実践の乖離を埋める一助となる。彼のコーチングが選手の主体性を育み、チームパフォーマンスを最大化した過程を示すことで、スポーツ指導者に対し、多様なコーチングアプローチとコーチング哲学の重要性に関する具体的な示唆を提供する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-18] 女性競技者とコーチの関係性に関する実態調査（社,心,コ）
部活動現場における課題を中心に

*天羽 礼¹ (1. 筑波大学)

女性競技者には、男性競技者とは異なる身体的・心理的・社会的な問題がある。日本のスポーツ界における指導者の男女比は、競技によって異なるものの、全体として男性が多数を占めていることから、女性が競技を行う上での女性特有の問題を十分意識せずに指導が行われており、女性競技者が相談しづらい環境であると言える。第3期スポーツ基本計画では、「女性の視点を踏まえた政策の推進」や「女性の視点を持つコーチの養成」などについて言及されている。しかし、施策目標や具体的施策において、コーチにどのような資質能力を養成すべきであるのかについては十分に検討されているわけではない。

そこで本研究では、運動部活動に所属する女性競技者を対象に、女性競技者が抱えるコーチ問題（女性競技者とコーチ間における問題（悩み））の実態と女性競技者がコーチに求める資質能力を明らかにすることを目的とする。

調査の結果、コーチの性別間による比較では、女性競技者のコーチに対する信頼度は、女性コーチよりも男性コーチのほうが低いことが確認され、女性競技者が抱く男性コーチと女性コーチに対する信頼度には有意な差が確認された。また、女性競技者は、コーチに対して身体的ケアや心理的ケアに関するサポートを必要としていることが明らかになった。これらの実態を踏まえた上で、今後の指導者養成の実践的な示唆とする。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-B-07]

福岡県タレント発掘事業からトップアスリートに至った選手におけるアスリート選抜時の要件と過去の競技経験の特徴 (コ)

*山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-B-08]

中央競技団体におけるアスリート育成パスウェイモデルの活用実態に関する研究 (経,コ)

*山下 修平^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、山口 真未^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-B-09]

スポーツタレント発掘育成事業からトップアスリートに到達した者の特徴 (アスリート育成パスウェイ)

体格・体力面に着目して

*萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-B-07] 福岡県タレント発掘事業からトップアスリートに至った選手におけるアスリート選抜時の要件と過去の競技経験の特徴 (コ)

*山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

【背景】福岡県タレント発掘事業は、国内最高峰の国民スポーツ大会への都道府県代表選手（国スポアスリート）や日本代表選手（エリートアスリート）を輩出しているものの、このようなトップアスリートがタレント発掘事業時にどのような要件で選抜されたのか、またどのような競技を経験してきたのか、検討された研究はない。そこで、アスリート選抜時の選考要件と過去の競技経験が、トップアスリートに至った競技やその到達レベル（国スポアスリート vs エリートアスリート）にどのような影響を及ぼしていたか明らかにすることを目的とした。【方法】事業参加者382名（男子182名、女子200名）の内、2024年度時点でエリートアスリートに到達した30名（男子6名、女子24名）を対象に、①発掘時の選考要件と最終的に専門化した競技種目との関連性、②小中学生期の競技経験種目と最終的に専門化した競技種目までの競技転向の傾向を検討した。【結果】国スポアスリートとエリートアスリートの選考要件は、「捕捉」（しっぽ取りゲームのテスター評価）が最多であった。一方で事業参加者全体では、「精査」（選考委員内での議論を踏まえた選抜方法）で選抜された選手が最多であった。エリートアスリートの多くは2種目以上の他競技経験を有し、男子は小中期、女子は中后期に専門化後の競技を開始する傾向であった。【考察】「捕捉」は、複数の運動能力が反映された「身体の動き」を競技関係者や指導者が総合的に評価した指標であり、選抜時の有効な指標の1つになる可能性が示唆された。「精査」は、単純に定量化される運動能力だけでは選抜されない受験者を取りこぼさない戦略であるものの、トップアスリートに至った事例は少なかった。多様な運動経験の重要性や性別による競技開始時期の違いも確認されたが、詳細については更なる研究が必要である。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-B-08] 中央競技団体におけるアスリート育成パスウェイモデルの活用実態に関する研究（経,コ）

*山下 修平^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、山口 真未^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター)

国際競技力向上に関する施策において、中央競技団体（以下、NF）は、アスリート育成パスウェイの構築が求められている。競技ごとのアスリート育成パスウェイ（競技別パスウェイモデル）の整備は、NFにおける競技の普及とアスリートの発掘・育成・強化の取組を大局的に捉え、アスリート育成パスウェイに関わる関係者の経験・情報を体系的に可視化・言語化する上で有効であることが明らかとなっている。また、競技別パスウェイモデルの構築とその構築過程は、アスリート育成パスウェイの全体指針が可視化されアスリートとその関係者に共有できることが示唆されている。ハイパフォーマンススポーツセンター（以下、HPSC）では、競技別パスウェイモデルの構築を支援するためのワークショップ（以下、ワークショップ）が開催され、これまでに47団体の競技別パスウェイモデルが構築されている。競技別パスウェイモデルの構築が多くのNFで進む中、NFには、その共有と活用の在り方が問われる。過去には、スポーツ振興基本計画に基づき、NFが策定した競技者育成プログラムを全国各地へ展開しようとした事例において、その共有と活用が困難であったことが指摘されている。したがって、競技別パスウェイモデルを競技関係者間で共有し、活用する際にも、同様の課題が存在する可能性があり、その対応策を検討しておく必要があると考えられる。そこで本研究では、NFが策定した競技別パスウェイモデルをどのように競技関係者間で共有及び活用されるか、その計画と実態を明らかにすることで、より効果的・効率的な共有及び活用の支援策を検討する。本発表では、令和6年度にHPSCによるワークショップで策定された競技別パスウェイモデルの共有及び活用に関する調査結果を報告する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-B-09] スポーツタレント発掘育成事業からトップアスリートに到達した者の特徴（アスリート育成パスウェイ）

体格・体力面に着目して

*萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

【背景】我が国の地方公共団体や中央競技団体等によるタレント発掘・育成（talent identification and development: TID）は、アスリート育成パスウェイ（スポーツを始めてトップアスリートに至るまでの道のり）構築の一部を担っており、国際競技力向上における中長期的な戦略の一つとして位置づけられている。特に地方公共団体が主催するTID事業（地域TID）は、身体能力の選考を経て、優れた体力を有する小・中学生を対象としている。しかし、地域TIDから最終的に国際大会に日本代表として派遣された事業修了生（トップアスリート）の体格及び体力に関する知見は限られている。【目的】本研究では、地域TIDが有する体力測定データを用いて、スポーツタレント及びそこからトップアスリートに至った者とそうでない者の小中学生期における体格及び体力の特性について検討した。【方法】本研究の趣旨に賛同する地域TIDを対象に、スポーツタレントの体格と体力に関するデータを収集した。スポーツタレントの競技成績から、トップアスリートに至った者を特定し、男女別及び学年別に各種データを比較することで、スポーツタレントの体格及び体力特性について検討した。【結果と考察】スポーツタレントの体力は、同年代の一般学生よりも優れる傾向が見られたものの、トップアスリートに至った者とそうでない者との間では、その差の程度は小さい傾向にあった。つまり、本研究で対象とした地域TID（優れた体力を有する集団）においては、スポーツタレントからトップアスリートに至るための要因として、小・中学生期における体格及び体力以外の要因が関連している可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-B-10]

世界トップレベルの兄弟姉妹アスリートの競技生活における相互関係のあり様 (コ)

*高木 菜那¹、清野 隼²、尾縣 貢³ (1. Nanavy株式会社、2. 筑波大学体育系、3. 福井工業大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-B-11]

女性アスリートの育成段階によるコンディショニング行動の分析 (生)

女性アスリート育成パスウェイ構築のために

*中村 有紀¹、中村 真理子¹、門馬 怜子¹、松田 知華²、相澤 勝治³、鈴木 なつ未⁴ (1. 日本スポーツ振興センター／ハイパフォーマンススポーツセンター／国立スポーツ科学センター、2. 名古屋大学、3. 専修大学、4. 拓殖大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-B-10] 世界トップレベルの兄弟姉妹アスリートの競技生活における相互関係のあり様 (コ)*高木 菜那¹、清野 隼²、尾縣 貢³ (1. Nanavy株式会社、2. 筑波大学体育系、3. 福井工業大学)

年齢が近い同性の兄弟姉妹は、特にライバル関係が強いことが先行研究で明らかにされている。一方で、世界で活躍している兄弟姉妹アスリートや、オリンピックに双方が出場、またはメダルを獲得している兄弟姉妹アスリートは多数いるものの、その相互関係のあり様についてわが国で言及されている研究はない。そこで本研究は、世界トップクラスの兄弟姉妹アスリートの競技キャリアにおける関係性と相互作用を明らかにすることを目的とした。研究対象者は、性別が同じである兄弟姉妹のアスリート4組から選ばれた8名であり、少なくとも1人または両者が同じ競技でオリンピックメダルを獲得していることを条件として、機縁法にて選定した。選定された兄弟姉妹アスリートは、2歳差の兄弟姉妹2組と3歳差の兄弟姉妹2組で校構成された。また、兄弟姉妹同士の関係性がより密になることが想定される個人スポーツに焦点を当てて実施した。調査方法は、事前に設計されたインタビューガイドに基づいて半構造化インタビューを採用した。得られた質的データは、KJ法を用いて分析した。分析結果から、年齢差、スポーツ固有のルール、同じ競技で競うことによるパフォーマンスの差、家族関係などが、兄弟姉妹アスリートの相互作用に影響を与えあっていることが明らかになった。結論として、本研究は世界トップクラスの兄弟姉妹アスリート間の複雑な相互関係の存在を明らかにした。これらの複雑さにもかかわらず、兄弟姉妹はこれらの課題に共に立ち向かい、心理的な成長を遂げ、関係性における心理的安全性を育んだことが明らかになった。また、世界トップレベルのアスリートの兄弟は、弟妹を兄弟姉妹ではなく、一人のアスリートと認識することによってこの心理的安全性も保たれることが示唆された。本研究によって、世界レベルで共に競技を行う兄弟姉妹アスリートの成功に寄与する重要な概念を得ることができた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-B-11] 女性アスリートの育成段階によるコンディショニング行動の分析 (生)

女性アスリート育成パスウェイ構築のために

*中村 有紀¹、中村 真理子¹、門馬 怜子¹、松田 知華²、相澤 勝治³、鈴木 なつ未⁴ (1. 日本スポーツ振興センター／ハイパフォーマンススポーツセンター／国立スポーツ科学センター、2. 名古屋大学、3. 専修大学、4. 拓殖大学)

持続可能な国際競技力の向上にはアスリート育成パスウェイの構築が重要であることが示されている。女性アスリートのコンディショニングにおいても、育成過程から引退までのライフステージによる女性特有の多様な課題を考慮し、長期的な視点に基づいて計画、実施する必要がある。我々はこれまで、女性アスリート育成パスウェイにおける最適なコンディショニングを可視化・共有化するための取り組みの一つとして、インタビュー調査を実施し、女性アスリートが考慮すべきコンディショニングの課題について検討を行ってきた。その結果として「女性アスリートの健康課題は一様ではなく、個人の身体的要因とアスリートの育成段階、環境要因等が複雑に関係している」こと、「Talent期の指導者の影響力は大きく、コンディショニングのベースを形成する」ことなどを報告した。これを踏まえ、今回はさらに女性アスリートのコンディショニングに関する基本的な習慣や行動の形成について育成段階や環境要因を考慮した詳細な分析を行った。

対象は、日本版FTEM【F (Foundation)、T (Talent)、E (Elite)、M (Mastery)】におけるEliteレベル（シニア代表選出）以上を経験した元女性アスリート23名とし、対面またはオンラインで1対1の半構造化インタビューを行った。逐語録を元にコードを抽出して分析を行った結果、Talent期の指導者がアスリートに対して指導したコンディショニングに関する行動や、Talent期に習慣づけられた態度や手法は育成段階が進んでもセルフコンディショニングとして引き継がれていくケースが多く認められた。しかしながら、Talent期のアスリート自身がコンディショニングの根拠として理解していた情報は限定的であり、適切な情報を得るタイミングが遅いとその後行動変容しにくい可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-07]

演題取り下げ

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-08]

中学校保健体育科教師Aの不安から自信への軌跡（教）

第62回全国学校体育研究大会を舞台とした約1年半のアクションリサーチ

*木原 慎介¹、佐藤 若²、佐藤 裕行³ (1. 東京国際大学、2. 山形県立南陽高等学校、3. 山形県教育局)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-09]

大阪府における体力水準の高いA市教育委員会の取り組み（教）

子どもの体力向上に向けた施策の実態

*山本 聖也¹、藤浪 大輔²、小林 博隆¹ (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学大学院)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-08] 中学校保健体育科教師Aの不安から自信への軌跡 (教)

第62回全国学校体育研究大会を舞台とした約1年半のアクションリサーチ

*木原 慎介¹、佐藤 若²、佐藤 裕行³ (1. 東京国際大学、2. 山形県立南陽高等学校、3. 山形県教育局)

学校教育をめぐる多様な社会課題の中で、教師の力量形成は継続的に求められている。そして体育教師を対象とした先行研究も限定的ではあるが存在している。本報告では、教職歴7年の中学校保健体育科教師A（以下、A）が全国学校体育研究大会（スポーツ庁及び公益財団法人日本学校体育研究連合会の主催事業）を契機として、保健授業の公開に向け葛藤しつつ不安を克服していく一連の過程をアクションリサーチによって描き出す。当初、Aにとっての大きな問題は保健授業に自信がないことだった。この問題の重要性を当該の指導助言者である筆者（大学研究者）、県教育委員会指導主事B、同大会研究部長Cからも共有し、授業の計画から日々の実践に至るまで当事者意識を持ちながら協働的に対話・観察・省察を重ねた。その過程でAは徐々に授業観を広げていった。特に転機となったのは、単元中盤での大きな失敗経験が彼の教材観に変容を促したことだった。メンバー間で話し合いを繰り返す中で、地域教材や生徒の主観的意見を活かした授業展開など新たなアイデアが生まれ、Aの授業は生徒との相互的なやり取りを重視するという従来とは異なる形へと変化した。また、授業中に「自分が見えている」という感覚や、生徒の「知識がつながる授業の楽しさ」も初めて味わった。結果としてAは保健授業への確かな自信を得るに至った。同時に、この成果を体育授業や他の保健体育科教師にも広げていくという新たな課題を見出した。一方、他のメンバーもそれぞれに新たな学びや課題を得た。例えば、現場との関わり方や広げ方、このプロセス自体が大会の遺産であり継続していくべきこと、教材観が指導スタイルに与える影響などである。本事例は、教師・授業者、指導主事、研究部長、大学研究者・指導助言者といった類似の立場にある人々が自らに置かれた文脈と重ね合わせて理解し、それぞれの現場での実践に適用する手助けになりうると考える。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:40～10:00

**[学校保健体育-A-09] 大阪府における体力水準の高いA市教育委員会の取り組み
(教)**

子どもの体力向上に向けた施策の実態

*山本 聖也¹、藤浪 大輔²、小林 博隆¹ (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学大学院)**緒言・目的**

子どもの体力向上のために、学校現場と教育委員会が連携し体力向上施策を推進することが求められている。これまで、子どもの体力向上のための取り組みについて都道府県教育委員会に焦点を当てた研究（山田ら、2020；黒岩ら、2024）はあるものの、市町村教育委員会の取り組みに焦点を当てた研究は見当たらない。そこで本研究では、大阪府において高い体力水準を示すA市教育委員会の担当者へのインタビュー調査を通じて、具体的な施策内容と成功要因を特定し、今後の大阪府全体の体力向上施策の改善に資する示唆を得ることを目的とした。

方法

対象は大阪府A市教育委員会子どもの体力向上に関わる担当者2名であり、半構造化インタビュー調査を対面で行った。分析では調査で得られた結果について、体育科教育学を専門とする大学教員1名と大学院生1名で議論し解釈を行った。さらに、インタビュー調査の内容および結果の解釈について齟齬がないか、担当者とメンバーチェックを行い、内容に齟齬のないことを確認した。

結果・考察

A市では、2011年から二小一中の中学校区ごとに「体力推進計画書」を作成しており、計画書を中心とした長期的な施策を展開していた。また、教育委員会は計画の振り返りや今後の取り組みについての研修だけでなく、管理職に対しても体力向上研修を行なっていることが明らかになった。さらに、A市は体育専科の配置を行っていないが、中学校の保健体育科教員が中心となって、小中学校間の往来や出前授業を実施するなど、体育専科の配置がなくとも小学校体育の専門性を高める工夫がされていた。これらの知見は、都道府県教育委員会に焦点を当てた分析では捉えきれない市町村独自の工夫であり、今後の大阪府における体力向上施策を検討する上で重要な示唆を与えると考えられる。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07]

小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果（教）
マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08]

体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫（発）
ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09]

上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える影響（教）

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07] 小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果 (教)

マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

【目的】本研究では、小学校体育科において、受容感を育む言葉かけや関わりを器械運動とボール運動(ゴール型)の2単元で実施し、2単元間における児童の支援実施前後の運動有能感及び運動意欲の変容を比較し、単元によって受容感を育む関わりの効果に差があるのかを検討した。

【方法】2024年11月~2025年2月に、富山県内のD小学校に在籍する6年生96名を調査した。岡澤らによる運動有能感調査の合計点が集団の中でも特に低い値を示す児童12名を抽出した。小学校教員志望の大学生が抽出児童12人の学習支援者として学校長の許可を得て体育科の授業に参加した。大学生は抽出児童12名を中心に、クラス全員の児童の取り組みや成長をよく観察し、励ましや取り組みを認める言葉かけを行った。授業終了後に抽出児童12名との学習支援者、担任教諭、周辺の児童との会話内容と、それに対する児童の反応や言動を記録した。学習支援者が介入した授業はマット運動授業5回、ハンドボールの授業5回であった。両単元前後に、全児童を対象に運動有能感調査、運動意欲に関するアンケート調査を実施した。

【結果】抽出児童12名は、マット運動の単元終了後において「身体的有能さの認知」の高まりが見られた。ハンドボールの授業においては、「身体的有能さの認知」「運動意欲」の高まりが見られた。両単元共ににおいて、統制感が授業後に低下した。

【考察】運動有能感が低い傾向にある児童は、励ましや称賛の声かけの機会を増やすことで、「身体的有能さの認知」、「運動意欲」を高めることにつながると推察された。一方で、「統制感」が授業後に低下する児童が複数名みられた。受容感を育む関わりと、統制感の高まりとの関係について追究する必要がある。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08] 体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫 (発)

ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

これまで運動する子どもとそうでない子どもの二極化問題が指摘されている（日本学術会議，2008）。ボール運動・サッカーは子どもに人気のある種目であるが、ボールが硬く当たると痛い、ボール操作が難しく連続性がない、などの問題点があるため、子ども目線に立った授業内容を考案することが重要である。これに関連して、壁ありサッカーの負荷特性を検討した結果、運動の得意な子どもだけでなくそうでない子どもも、ゲーム中の活動量が増えることが確認されている（津田ほか，2023）。そこで本研究では、ボール運動「壁ありサッカー」に着目し、その効果を石川県下のO小学校の児童32名（男子17名、女子15名）を対象に検討した。体育授業は2024年7月および9月の合計5時間であった。本研究では最初に「鬼ごっこ」、次に「ストップボール」、最後に「ゲーム」を行わせた。単元前後に、体力測定項目の1つである反復横とびを測定した。また、前後に質問紙調査「運動・スポーツが好きですか」、「体育の授業が楽しいですか」を実施した。本研究の主な結果は次のとおりである。対象者全体でみると、反復横とびの成績は介入前後で有意差は認められなかった（介入前：6±11.4回，介入後：46.5±6.5回）。男女別にみると、反復横跳びの成績は女子では介入前後で有意差は認められなかったが（介入前：4±10.8回，介入後：46.9±5.9回）、県平均を下回っていた男子では単元後に有意傾向が認められた（介入前：43.1±11.9回，介入後：46.2±7.2回）。質問紙調査「運動・スポーツが好きですか」、「体育の授業が楽しいですか」については、「好き」と回答した児童の割合は介入前後で変化は認められなかった。以上から、ボール運動「壁ありサッカー」の授業の成果として、県平均を下回っていた男子の反復横とびの成績が改善する可能性が認められた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09] 上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える影響（教）

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

投動作は後天的に獲得される技能であり、適切な学習機会と効果的な指導が求められる。しかし、スポーツ庁による令和5年度体力・運動能力調査では、青少年のボール投げの記録が過去10年間で下降傾向にあり、学習機会や指導内容の質に課題があることが示唆される。特に高校期は、体育授業が生涯スポーツの基礎を形成する重要な時期であり、効率的な投動作の習得が求められる。その中で、注目されているのが、上肢の伸張-短縮サイクル（SSC）である。SSCは筋の弾性エネルギーや伸張反射を利用して爆発的な力を発揮する特性を持ち、投動作との親和性が高い。本研究では、SSC運動を強調したトレーニングである上肢のプライオメトリクスを用い、投動作指導を行った。毎回の授業冒頭に約7分間実施し、感覚定着と動作理解を促した。単なる動作実施ではなく、生徒がSSCの原理や目的を理解し、それを意識しながら取り組むことを重視した。対象はI高等学校の2年次男子22名とし、指導前後で遠投距離の測定および高本ほか（2003）に基づく投動作の観察的評価を実施した。加えて、指導後には記述式質問紙を配布し、生徒の認識面に与える影響をテキストマイニングにより分析した。その結果、遠投距離及び「体幹後傾」「フォロースルー」「体重移動」「体幹回転」などの動作項目、および「最終的なパターン」「合計点」において有意な技能向上が見られた。自由記述からは、SSCを意識することでフォーム改善や投げやすさを実感し、成果への達成感や満足感が高まっていたことが明らかとなった。また、ペア学習や他者からの助言が学びの深化を促す要因として肯定的に捉えられていた。一方で、競技経験や用具の違いにより混乱を覚えた生徒も存在した。これらの結果から、SSCという運動要素自体の効果に加え、それを理解し意識的に活用することが、投能力の向上に関係していると考えられる。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-10]

学校体育の起点の再考：身心一体科学 考え方と方法（哲,生）

理科と体育の教育の狭間で抜け落ちる「生きている自分」

*跡見 順子¹、藤田 恵理²、清水 美穂¹ (1. 帝京大学先端総合研究機構、2. 帝京大学医療技術学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-11]

多様な学習者が共に学びあうための教材開発（哲）

ルールや条件の設定をとおして

*森田 啓¹、高橋 浩二²、中島 早苗⁵、戸枝 美咲⁶、佐藤 和⁴、小谷 恭子⁸、河緒 一彦⁷、畑 孝幸³ (1. 大阪体育大学、2. 長崎大学、3. 東海学園大学、4. 千葉工業大学、5. 共立女子短期大学、6. 日本女子大学、7. 関西学院大学、8. 帝塚山学院大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-12]

SUSTAINABILITY IN SPORTS SCIENCE: RESEARCH GROWTH AND GLOBAL INFLUENCE（政）

A BIBLIOMETRIC STUDY

*PONUGUPATI PREMANAND¹ (1. VICE- PRESIDENT , NAPESS)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-10] 学校体育の起点の再考：身心一体科学 考え方と方法（哲、生）

理科と体育の教育の狭間で抜け落ちる「生きている自分」

*跡見 順子¹、藤田 恵理²、清水 美穂¹ (1. 帝京大学先端総合研究機構、2. 帝京大学医療技術学部)

体育は、身体を通して自分の存在を知り、人間であることを理解し、一生考え試行錯誤しながら人間を生きる姿勢(態度)を育てる教育である。教育には、その時代の先端知を導入すべきである。跡見順子は、半世紀前に出会った「人間の生物学」を体育学の基盤に据えるべきだと考え研究し、昨年学術書「身心一体科学 考え方と方法」(東京大学出版会)を出版した。生命科学は、目覚ましく発展中であるが、「動く人間」や「教育可能性ある人間」には連携されていない。それは体育や身体運動科学を実践する研究者が行わないと誰も問題にしないだろう。生きている自分自身を、基本から思考の対象として位置づけるためには、「細胞生命科学」と脳科学の本質を取り入れ、教育課程を見直すべきである。文理を早く分けすぎた教育体制を是正すべきである。1. 体育とは「身体」を介しての教育：教育は、時代の最先端の科学を土台にすべき。2. 身心の教育可能性：「刺激に応じて変化する能力」は、生命の単位「細胞」にある。地球で創発した生命体である人間の能力は、他の動物と基本的には同じ原理で、ほぼ生得的に「活動依存性」に獲得する。しかし上述の本で紹介したが、人間のみが意識的に出来るように学習しないと身につかない身体技法(体幹・重心制御)があり、心身の一体化の基本スキルであり体育教育に導入すべき。3. 自分を対象化(俯瞰)する視点が必須である：人間は、自分のシステムを知るように育たない。古代ギリシャの「汝をしれ」が必須で、その学習を体育教育の軸にし、「いのちの原理」をコアにすべきである。4. 「いのちの原理」を創発させた条件としての重力と細胞の生存原理であるメカニカル応答5. 人間の特性(ことば・科学等の抽象的理解)との関係：刺激を受容し、直接応答する末梢器官(の細胞)とことば(記号)等により統合的に理解する脳神経系の細胞原理を理解する教育が必須である。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-11] 多様な学習者が共に学びあうための教材開発（哲）

ルールや条件の設定をとおして

*森田 啓¹、高橋 浩二²、中島 早苗⁵、戸枝 美咲⁶、佐藤 和⁴、小谷 恭子⁸、河鱈 一彦⁷、畑 孝幸³ (1. 大阪体育大学、2. 長崎大学、3. 東海学園大学、4. 千葉工業大学、5. 共立女子短期大学、6. 日本女子大学、7. 関西学院大学、8. 帝塚山学院大学)

体育・保健体育において、子どもたちの技術、体力、モチベーションに大きな個人差があることが指摘される。しかし、子どもを取り巻く環境の変化を考慮すれば、この個人差を前提に実施する必要があるだろう。幼少年期に近所の公園、空き地で友達と遊ぶ機会・場所はかつてと比較すれば激減している。運動教室やスポーツクラブなどで身体を動かさざるを得ない。そうすると家庭の経済力によって身体活動経験・能力は影響を受ける。身体的発達には個人差が大きいのに加え、新自由主義によってその差は拡大している。身体に関して非常に大きい格差がある。その子どもたちが一斉に取り組むのが体育である。この非常に大きくなっている「身体的な違い」を前提に体育・スポーツを考える必要がある。

重要なことは、これらの個人差をマイナスと捉えるのではなく、この特徴を活かし、「教え合い、学び合い」を基本とし、受講生全員が当初の技術、体力、モチベーションから向上することをめざすことであろう。この「教え合い、学び合い」が生じる環境、条件の整備が重要と考える。たとえば、サッカーにおいては、運動部活動等の経験者とそれ以外の学生を均等にグループ分けし、最初は「2タッチ&グラウンダー」という条件でゲームを開始する。続けて触れるのが2回という制限は、経験者のドリブルを不可能にし、グラウンダーは長いパスを制限する。必然的にショートパスをつなぐスタイルになる。短い正確なパス、トラップ、スペースへの動きが必要になり、経験者はアドバイスし、それ以外の者はわからないこと、できないことを質問することでチームのレベルアップにつながる。個人やチームのレベルアップに応じて、条件を変更することで、より高度なパフォーマンスを発揮したい。

さらに、既存のスポーツを実践するだけでなく、新しいゲームを創出したり、ルール・条件を変更したりするなど、さまざまな工夫を凝らした実践を試みたい。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:40 ~ 10:00

**[学校保健体育-A-12] SUSTAINABILITY IN SPORTS SCIENCE: RESEARCH GROWTH AND GLOBAL INFLUENCE (政)
A BIBLIOMETRIC STUDY**

*PONUGUPATI PREMANAND¹ (1. VICE- PRESIDENT , NAPRESS)

Abstract This study presents a comprehensive bibliometric analysis of sustainability research in sports science between 2015 and 2025, using data sourced from the Scopus database. A total of 67 documents, identified through the keywords “sustainable sports” and “sustainability sports science,” were analysed using Biblioshiny in R Studio to assess publication trends, key sources, country contributions, and collaboration networks. Results indicate a steady increase in scientific output, particularly since 2020, with an annual growth rate of 7.18%. The journal *Sustainability (Switzerland)* emerged as the leading publication outlet, while Spain, Australia, and the USA were the top contributing countries. International collaborations were prominent, highlighting the global and interdisciplinary nature of the field. The findings emphasize the growing importance of integrating sustainability principles into sports science to address environmental, social, and economic challenges. The study concludes by underscoring the vital role sports science plays in supporting sustainable development goals through research, practice, and policy, and offers recommendations for fostering further interdisciplinary collaboration and knowledge sharing. **Keywords:** Sustainability in Sports Science, Bibliometric Analysis.

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10]

大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究（コ,教）
運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11]

器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）
側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12]

学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度と与える影響（発,測,教）
小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10] 大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究
(コ,教)

運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

本研究では、跳び箱運動における〈開脚とび〉の習得を促した指導事例の報告をする。対象はサッカーを専門としてきた男子学生である。跳び箱運動の経験が乏しく、指導当初は〈開脚とび〉を試みても着手で動作を止めてしまう様子が観察された。運動経過からは、着手技術の不足と運動投企の未形成が課題であると考えられた。そこで、本指導では跳び箱を斜めに設置し、着地地点が見えるように工夫するなど段階的な練習を導入した。結果として、着手局面から着地に至る運動の見通しが得られ、最終的に縦置き跳び箱を跳び越えることが可能となった。本事例からは、終末局面を先に体験させる指導の有効性、用具の使用法における創意工夫の必要性が示唆された。また、片足踏切や片手荷重といった未熟な動作も、運動発達の一段階として肯定的に捉え直すことができる。初心者指導においては、特に安全に着地できるようにすること、それを見据えた着手と着地の確保、発達特性を踏まえた段階的指導が重要であることを示すことができた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11] 器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）

側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

本研究の目的は、器械運動の評価方法を模索することであり、側転の新たな評価の方向性を探ってみた。仙台市の3つの小学校の1年生～3年生合計200名を対象に側転の練習とループリック形式で作成した「側転ループリック評価アンケート調査」を実施した。仙台市の体育科の評価においては、概ね「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」のそれぞれに関して、「よくできた」、「できた」、「頑張ろう」の3段階で評価している。ただし、通知表（通信表・通信票など）の作成は義務ではなく、あくまでも児童の学習状況を保護者に伝えるものであり、作成の義務があるのは「指導要録」である。指導要録は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点別評価があり、学校で作成している通知表も上記3点を評価し、保護者へ伝えている。「知識・技能」は、健康や安全についての正しい知識や運動の基本的な動きや技能を身に付けているかなどを評価、「思考・判断・表現」は、運動や健康について自分の課題を見つけ解決方法を考えて友達に伝えているかなどを評価、「主体的に学習に取り組む態度」は、進んで運動を楽しんだり、ルールを守り仲間と協力して運動しているかなどを評価している。体育の評価は、技能評価はさておき、明確な基準が定まっていないことや「見える化」が進んでいないことが問題点の一つと考えられる。

今回実施した「側転ループリック評価」に改善を重ねれば、特に「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価観点において、授業に取り組む姿勢や態度を「見える化」「定量化」することで判断基準や判断材料が明確となるのではないかと考える。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
かに貢献できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12] 学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度に与える影響（発,測,教）

小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

【目的】小学校中学年児童の縦断データに基づき、開脚跳びの動作達成度に対する学年の影響と各学年における跳び箱の高さの影響を検討することを目的とした。

【方法】A市立A小学校の児童117名（男子56名、女子61名）を対象に、3年生時と4年生時の1月に開脚跳びのビデオ撮影（4・5段で各2回）を行った。技の観察的評価基準（30項目）による評価を行い、各段の試技2回のうち評価合計点が高い試技を分析に用いた。得点分布に著しい偏りがある項目を除外した上で、動作得点への学年の影響を調べるため、従属変数に各項目の動作得点、独立変数に性別、学年を固定効果、対象者を変量効果に指定した混合効果順序ロジスティック回帰分析を実施し、学年の主効果が有意な項目を特定した。また、動作得点への跳び箱の高さの影響を調べるため、3年生時と4年生時において、従属変数に各項目の動作得点、独立変数に性別、跳び箱の高さを固定効果、対象者を変量効果に指定した混合効果順序ロジスティック回帰分析を実施し、跳び箱の高さの主効果が有意な項目を特定した。有意水準は5%とした。

【結果】得点分布より21項目を分析対象に選定した。動作得点に対して学年の主効果が有意であった項目は、踏み切り時の「腕の揃え」、着手時の「手の突き放し」、「肩の起こし」、「両脚の伸展保持」、離手後の「目線」と「両脚の揃え」、着地時の「腰・膝の屈曲」、「静止姿勢」であった。跳び箱の高さの主効果が有意であった項目は、3年生時で踏み切り時の「わきのしめ」、踏み切り後の「腕の投げ出し」、4年生時で踏み切り時の「自由脚の屈曲調整」、「足部の接地先取り」、「リバウンドジャンプ」、踏み切り後の「腰の上昇」であった。

【結論】学年が上がった場合、主に着手から着地に至る動作で達成度の向上がみられ、4年生時は、特に踏み切り時の弾むようなジャンプにおいて跳び箱の高さの影響がみられやすい。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13]

女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善（教）

*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-14]

国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）

Webシラバスに基づく分析から

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-15]

体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果（生,介）

自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13] 女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善（教）*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

女子大学生は「運動経験」「体育への抵抗感」「健康志向」「仲間との活動志向」などにおいて男子学生とは異なる傾向があり、女子大学生のニーズに即した大学体育授業の再検討は喫緊の課題である。その際、実態調査に基づく実証的な授業改善（Evidence-Based Education）は、モチベーションや学修成果の向上に資すると考えられる。そこで、本研究では、女子大学生515名を対象に、大学入学時点におけるスポーツ実施状況と大学体育に対する意識の実態を把握し、授業の改善点を探ることを目的とした。調査は、2025年4月にGoogle Formsを用いて実施した。調査項目はスポーツ庁の世論調査を参考にし、意識把握には説明的文章完成法を用いた。その結果、健康であると感じている学生は88.2%に上る一方で、体力に不安を抱く学生が6割以上を占め、87%以上が運動不足を自覚していた。運動頻度は、約6割が週1日以上運動している一方で、4割はそれ未満の頻度にとどまり、運動習慣において二極化が見られた。運動動機は「楽しみ」「健康」「ダイエット」が上位を占めた。観戦・支援活動については経験が少なく、「観る・ささえる」スポーツ文化との接点が弱いことも示された。また、運動やスポーツを大切に好きとする肯定層が半数近くを占めた一方で、価値は認めつつも苦手意識を持つ学生が約3割存在した。最後に、大学体育が「健康・体力」にとどまらず、「自己成長」「人間関係の構築」「情緒的価値」といった多面的な意味で認識されていた。以上から、女子大学生を対象とした大学体育授業においては、運動習慣の再構築を目指すとともに、プレッシャーのない雰囲気づくりと小さな成功体験ができる活動を取り入れることが求められる。また、文化としての運動やスポーツの意味を再認識し、スポーツの多様な活動を経験できるように授業設計を行う必要があることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～10:00 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:20～9:40

**[学校保健体育-A-14] 国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）
Webシラバスに基づく分析から**

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

〔背景と目的〕高等専門学校（以下、高専）とは、主に16歳から20歳の学生が在籍する高等教育機関であるが、一般的な教科教育という観点から、保健体育の授業も実施されている。高専における保健体育の授業が、どのように展開されているのかは、国立高等専門学校機構が定めた身につけるべき知識や能力の具体的な到達目標であるモデルコアカリキュラム（以下、MCC）に保健体育が位置づけられていないため、その全容を知ることは難しい。これまで、高専の体育授業については、柴山ほか（2022）が全国的な調査からその全容の解明に努めているが、保健授業については同様の研究は見当たらない。そこで、本研究では国立高専の保健授業について、各校が公開しているWebシラバスを基に、その全容を明らかにすることを目的とする。

〔方法〕2025年度Webシラバスから高等学校年代に相当する1～3年次に開講されている保健体育の科目を全て分析対象とした。

〔結果と考察〕①実施科目や時間配当：「保健」という科目を設けて実施している高専は約29%、多くの高専は「保健体育」という科目の中で時間数を限って実施している。また時間配当も1単位程度であり、「保健」の内容を全く実施していない高専も見られた。②カリキュラムや授業内容：健康、生活習慣病、性、喫煙・薬物乱用などのキーワードに関する内容が最も多かった。これらは、高等学校の学習指導要領の領域では「現代社会と健康」に含まれる内容であるが、その他の領域「生涯を通じる健康」、「安全な社会生活」、「健康を支える環境づくり」の内容を盛り込んだシラバスが少ない傾向にあった。MCCに保健体育が位置づけられていないため、「保健」に関する時間配当の少なさや授業内容の偏重といった問題点が明らかになった。一方で、身体不自由者疑似体験等の特徴的な授業も実施されており、高専の特色を生かした保健のあり方も示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:40～10:00

[学校保健体育-A-15] 体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果 (生,介)

自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

【研究の背景】日本は地震、台風、豪雨、大雪など、多様な自然災害のリスクに常にさらされている。このような状況に対処するためには、科学的かつ合理的な防災・減災対策を習得することが不可欠である。特に体育・スポーツを学ぶ学生は、その身体性や集団的特徴から、自らや身近な人々だけでなく、社会的により弱い立場の者を助ける心性を備え、それを実践可能とする最低限の身体能力・技能を有することが求められる。さらに近年、防災・減災力を高める学習方法として、アウトドアアクティビティが注目されている。その中でも、防災キャンプは、被災時の生活に役立つ体験的な学びを得る手段として考えられた教育手法であり、文部科学省もその推進を図っている。

【目的】本研究は、体育系大学生を対象とした体験型防災キャンプが防災意識に及ぼす教育的効果を検討することを目的とした。

【方法】対象はK大学体育学科に所属する学生16名であり、自衛隊駐屯地において実施された2日間の防災キャンプに参加した。プログラム内容は、応急救護、天幕設営、行進訓練等の実践的活動で構成された。防災意識の変容を測定するために、防災意識尺度を用いて事前・事後の意識調査を実施し、さらに自由記述を含むアンケート調査を行った。

【結果】防災意識尺度の分析により、「被災状況の想像力」および「他者指向性」において有意な向上が認められた ($p<0.05$)。また、アンケート結果では、参加者の95%以上が本プログラムに対して「満足」と回答し、特に応急救護訓練に関しては全員が「有益であった」と評価した。

【考察】これらの結果より、実践的活動を中心とした体験型防災学習が大学生の防災意識の向上に有効であることが示唆された。今後は、防災意識の向上を具体的な行動力へとつなげるための教育プログラムの構築と、地域や関係機関との連携による継続的な防災教育の展開が課題である。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-13]

「心臓の位置」の正答者は大学生が小学6年生よりもかなり少ない（保）

素朴概念の存在が引き起こす心肺蘇生法の指導のためエビデンス

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-14]

胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響（コ）

高校生を対象に

*福岡 小百合¹、寺山 由美²、広野 泰子²、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院/追手門学院中・高等学校、2. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-15]

タグラグビーに特有の「易しさ」の再考（教）

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院教育学研究科)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-16]

タグラグビーのルールをやさしく学習できるゲーム型教材の提案（教,政）

小学校中学年の児童を対象とした授業分析からの検証

*鈴木 利也^{1,2}、佐川 哲也³ (1. 小松市ラグビーフットボール協会、2. 石川県ラグビーフットボール協会、3. 金沢大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-13] 「心臓の位置」の正答者は大学生が小学6年生よりもかなり少ない(保)

素朴概念の存在が引き起こす心肺蘇生法の指導のためエビデンス

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

「胸骨圧迫」とは「からだの外から心臓を圧迫することによって、血液の流れを人工的に作り出す」(東書中学教科書)とある。一方『中学保健体育の研究』(学研指導書)には「心臓は胸の左側にあるように思われているが、基本的には心臓の中心は胸の中央にある。ただし体全体に血液を送らなければならない左心室の方が右心室より大きく心筋も3倍も厚いので、体の正中線に対して左側にその3分の2が偏っている」とある。さらにAEDの役割は「正常な動きをしていない状態(心室細動)にある心臓に電気ショックを与え、正常な動きを取り戻す(除細動)」(学研中学教科書)とある。AEDはAutomated External Defibrillator (De (除く) + fibrillate (細かく不規則な運動をする) + or (器))の頭文字で、日本では自動体外式除細動器と呼ばれる。さて発表者らは、2023年大会において、国立大学の教員養成系学部の小学校教員免許取得予定の1年生で、研究利用の同意が得られた198名を対象に、「胸骨圧迫の位置」「心臓の位置」「AEDの役割」の認識調査を実施した。通過率はそれぞれ順に66%、31%、22%であった。この結果をどのように解釈するか。今回は比較のため、2025年4月、体育系私立大学で、保健体育科教員免許取得予定の3年生で、研究利用の同意が得られた186名を対象に同様の調査を実施した。通過率は65%、29%、32%であった。「胸骨圧迫の位置」は両大学とも2/3が正答であった。「AEDの役割」は体育系私立大学3年生の正答者が有意に多い($p < .05$)。「心臓の位置」「AEDの役割」は、いずれの大学も正答者が低位だった。特に「心臓の位置」は、発表者が2017年3月に小学6年生を対象に実施(倫理審査会：通知27-3)した通過率52%より、両大学とも誤答者が有意に多かった($p < .01$)。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-14] 胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響 (コ)

高校生を対象に

*福岡 小百合¹、寺山 由美²、広野 泰子²、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院/追手門学院中・高等学校、2. 筑波大学)

内閣府の調査(2022)によると高校生のインターネット使用率は99.6%、1日の平均利用率は6時間14分であり、近年の高校生は頻繁にIC機器を使用する。1978年より実施されている子どもの「からだの変化」の調査において、2022年はネットゲーム依存症、うつ傾向が挙げられ(野井ら, 2022)、中高生の猫背姿勢の増加も報告されている(加藤ら, 2014)。猫背の姿勢はネガティブな精神を生むとも指摘されており(菅村, 2015)、自らの姿勢に意識を向け、調整する力を育むことは心身の健康を維持するためにも必要だと考えられる。これまでの姿勢研究では、「背骨」に着目して姿勢を調整することの効果が検証されているが、それ以外の部位に着目した研究はない。実際に触れながら視覚的にも確認できる「胸骨」は高校生にも自覚させやすい部位である。本研究は、胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響を明らかにすることを目的とした。高校生105名を対象とし日常の立位時と胸骨に意識を向けて調整を行った立位時の体幹部の姿勢と視点を対応のあるt検定を用いて比較した。有意水準は1%未満とした。姿勢を評価するために、立位時の静止写真を撮影し、第7頸椎、第10胸椎、上後腸骨棘に貼付した反射マーカ―と地面設置した4点の校正点の位置をデジタイズした。校正点を基にした相似変換によって、矢状面における身体各点の位置を算出した。第10胸椎と上後腸骨棘を結ぶ線に対して、第7頸椎と第10胸椎を結ぶ線の前傾は、調整前よりも調整後で有意に低下した。また、視点の位置は、頭部装着型の視線計測装置を用いて視界の映像を記録し、視線データから視点の位置を算出・比較した。その結果、調整前よりも調整後で視点の位置が有意に高くなった。以上の結果から、胸骨に着目した姿勢の調整によって、猫背姿勢が改善され、視点の位置が高くなることが確認された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-15] タグラグビーに特有の「易しさ」の再考（教）

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院教育学研究科)

一般的にタグラグビーは、インベージョンゲームの中でとりわけ易しいゲームであると言われている。というのも、ドリブルやシュートを要するサッカーやバスケットボールなどの他とは異なり、タグラグビーではボールを持ち抱えたまま自由に走ることができ、そしてインゴール内に走り込んでボールを地面に置くだけで得点することができるからである。では、こうした技術の「易しさ」を根拠にタグラグビーは易しいゲームであると真に言ってしまうのもよいのであろうか。

これまで技術の観点からタグラグビーの「易しさ」が論じられる際、児童の意識調査を実施する実証的な検討が複数なされてきた。それらに目を向けてみると、上述したようなタグラグビーの技術を易しいとする児童が学習を重ねる度に増えていく反面、それを易しいとはしない児童も現実にはいたことがわかる。よって、この現実を看過したまま技術の「易しさ」ばかりを根拠にタグラグビーは他よりも易しいゲームであると簡単に言うことはできない、と考えられよう。ならば、技術とは別の観点からタグラグビーの「易しさ」を改めて考えてみなければならない。

他方でタグラグビーに特有の「易しさ」は、ゲームにおいて何が起きているのかという闘ぎ合いの観点からも考察されてきた。だがその方面の議論は、原型であるラグビーフットボールとの相違からその派生であるタグラグビーの「易しさ」を論じることに未だとどまっている。

かかる問題意識に立ち、本研究では、闘ぎ合いの観点からタグラグビーと他のインベージョンゲームとの違いを問い直し、タグラグビーはインベージョンゲームの中でとりわけ易しいゲームであると言えるのか否かを考察する。本研究の試みによって新たに見えてくる、タグラグビーに特有の「易しさ」あるいは「難しさ」について報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-16] タグラグビーのルールをやさしく学習できるゲーム型教材の提案（教,政）

小学校中学年の児童を対象とした授業分析からの検証

*鈴木 利也^{1,2}、佐川 哲也³ (1. 小松市ラグビーフットボール協会、2. 石川県ラグビーフットボール協会、3. 金沢大学)

【研究の目的】小学校中学年の児童を対象としたタグラグビーの体育授業において、学習が難しいとされているスローフォワードやオフサイドルールをやさしく学習するためのゲーム型教材を提案すること。

【研究の方法】タグラグビーゲームにおけるプレイヤーの役割を、攻撃／守備、ボールの保持／不保持、守備時のポジションによって分類し、個々の役割における技術を明らかにした。その技術を学習するためにすでに知られている一般的な教材を割り当てたところ、学習が難しいとされているスローフォワードとオフサイドを学習する教材が少ないことが明らかとなった。そこで、スローフォワードとオフサイドを学習する教材を新たに考案し、それを採用した授業を小学校中学年に実施し、その効果を検証した。

【研究の結果】単元を3つの段階に分けて、第1段階はすでに知られている一般的な教材を配置してタグラグビーの基本的な動きを一斉学習で学び、スローフォワードやオフサイドルールを学習する第2段階は新たに考案した「じゃんけん2対1」、「じゃんけん3対3」のゲーム型教材を使って、少人数グループで学び合いを中心としたグループ学習とした。第3段階で5対5のタグラグビーゲームを行い、ゲーム分析を行ったところ、学習が難しいとされているスローフォワードやオフサイドの出現率は先行研究と比較しても同等程度もしくは低い結果となった。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 9:40 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a901-02] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-16]

中学校における、主体的・対話的なダンスの授業作り（教）
よりよいダンス授業実践を目指す教師とのアクションリサーチを通して

*宮本 乙女¹ (1. 日本女子体育大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-17]

期間記録法から見た模擬授業の課題点（教）

*足立 美和¹ (1. 共立女子大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～9:40 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a901-02] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:00～9:20

[学校保健体育-A-16] 中学校における、主体的・対話的なダンスの授業作り（教）
よりよいダンス授業実践を目指す教師とのアクションリサーチを通して

*宮本 乙女¹ (1. 日本女子体育大学)

中学校保健体育においてすべての領域が男女ともに必修になって（2008年学習指導要領告示）16年の歳月が経ったが、未だに中学校ダンスの学習指導について、現場の教師たちが課題を抱えている。創作ダンスと現代的なリズムのダンスについては、生徒自身が動きを創出する創作型の学習を推奨されているが、学校で作成した既成作品かまたは、YouTubeなどで再生できる既成の動画を踊れるようになることが目標とされていたり、教師が教えることなく放任する授業となっていたりする例も指摘されている。主体的・対話的で深い学びが実現できる課題解決型のダンス指導が提案されてはいるが、普及は進んでいない状況である。

そこで、本研究では、ダンス学習指導に課題を抱えている2人の教師に、課題解決型のダンス授業を提案する。それぞれの指導歴やダンス授業に対する考えに基づいて、必要な情報を提供し、対象教師と研究者により単元計画を作成する。中学1年生3クラスには、創作ダンスの基本的な単元6時間、中学2年生2クラスには、現代的なリズムのダンスの単元5時間を実践する。実際の中学校授業現場を対象として具体的なフィードバック活動を重ねることで、教師の指導力向上やダンス授業に関する困難さの解消を目指す。

授業観察と学習カードにより生徒の様子を捉えながら、アクションリサーチの手法を使用し、教師自身の省察を研究者がバックアップする。単元終了後には、フィードバック記録や映像記録なども活用しながら、半構造化インタビューを行う。ダンス学習そのものや自分自身のダンスの指導への考えが変容するのか、それはどのような学習場面や、授業フィードバックや生徒の様子などからもたらされた可能性があるのかについて、SCATを用いて分析する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～9:40 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a901-02] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:20～9:40

[学校保健体育-A-17] 期間記録法から見た模擬授業の課題点（教）*足立 美和¹ (1. 共立女子大学)

問題の所在；半期14回で行っている初等教科教育法（体育）では、いわゆる教科教育に当たる小学校体育の学習内容については理論的に知識として学ぶまでであり、実技実践を行わないままに教科教育法において模擬実践を行っているのが現状である。限られた授業時間内でより良い教授法を学ぶために、現状の模擬授業の課題点をできるだけ具体的に明らかにし、指導案作成や模擬授業実践における有益なポイントを見つけ出すことが必要と思われる。

研究目的；初等教科教育法（体育）で実施された模擬授業を期間記録法によって学習場面の分析を行い、学習者の陥りやすい授業展開の特徴を明らかにし、今後の学習の資料とすることを目的とした。

研究方法；2023年及び2024年実施の初等教科教育法（体育）運動領域模擬授業17回を対象にコーディング法（期間記録法）による学習場面の割合の分析を行い、その割合から陥りやすい授業展開について分析する。

結果及び考察；（1）2023年度（5回）の傾向 ①全領域の傾向；マネジメント12.3%、学習指導35.3%、認知（記録等）学習1 11.3%、認知（運動）学習2 41.1% 学習指導場面は20%以内に収め、諸活動である「認知（運動）学習」場面を50～60%程度確保することが理想であるが、2023年度においてはその条件が満たせず、説明や解説に時間を割いてしまい十分な運動学習時間が確保できていないことが明らかになった。（2）2024年度（12回）の傾向 現在分析中であり結果については当日ご報告の予定である。

まとめ；2023年度で明らかになった傾向を踏まえ、模擬授業の指導案作成や模擬授業実践時には、認知（運動）学習の時間を十分に確保するように助言を行ったが、認知（運動）学習の時間を十分に確保できたとは言い切れない。当日は2024年度の結果を加え、新たな教科教育法の学習のポイントについて考察を述べる。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-17]

保健体育授業における「原則、男女共習」を考える（測）

共習授業と別習授業を体験した大学生の意見および感想

*松田 繁樹¹、山田 淳子²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 龍谷大学、2. 滋賀大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-18]

中学校体育授業のバレーボールにおける男女共習と別習の違いが生徒の学びに与える影響（発，教）

*山田 淳子¹、松田 繁樹²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 滋賀大学、2. 龍谷大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-19]

演題取り下げ

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-17] 保健体育授業における「原則、男女共習」を考える (測)
共習授業と別習授業を体験した大学生の意見および感想

*松田 繁樹¹、山田 淳子²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 龍谷大学、2. 滋賀大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

本研究では、大学生を対象とし、ソフトボールおよびサッカーの授業において、男女共習と男女別習の授業を実施し、学生の授業後の意見および感想について共習と別習で比較することを目的とした。対象者はS県内の大学の教育学部に在籍する1年生であった。ソフトボール授業では53名、サッカー授業では55名が分析対象であった。ソフトボールおよびサッカーの授業を共習と別習で行い、その後にアンケート調査を行った。アンケート調査内容は、「授業の満足度」、「授業の楽しさ」、「授業における仲間と交流」、「授業における全力での運動」、「技術向上にはどちらがよいか」、「安全に行うにはどちらがよいか」、「希望するのはどちらか」、「小学校の授業ではどちらがよいか」、「中学校の授業ではどちらがよいか」、「高等学校の授業ではどちらがよいか」の10項目であった。5件法（男女別習、どちらかというとな男女別習、どちらともいえない（同程度）、どちらかというとな男女共習、男女共習）で回答してもらった。対象者数が少なかったため、回答カテゴリーを3つに統合し、分析を行った。適合度の検定および多重比較検定を行った。ソフトボールの授業では、「授業の満足度」、「希望するのはどちらか」以外の8項目に有意差が認められた。男女別に分析した結果、有意差の現れる項目が男女で異なっていた。サッカーの授業では、「授業の楽しさ」および「授業における仲間との交流」以外の8項目に有意差が認められた。男女別に分析した結果、有意差の現れる項目が男女で異なっていた。結論として、男女共習および男女別習に対する大学生の意見および感想は種目および性の違いにより異なることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-18] 中学校体育授業のバレーボールにおける男女共習と別習の違いが生徒の学びに与える影響（発,教）

*山田 淳子¹、松田 繁樹²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 滋賀大学、2. 龍谷大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

本研究では、中学生を対象に男女共習（授業全体を通して男女混合）と男女別習（授業のはじめとまとめのみ男女混合で行いその他は男女別）の体育授業を実施し、共習と別習の違いが生徒の学びに関する意識、技能、および授業中の活動量に与える影響を明らかにすることを目的とした。対象者はS県の国立中学校に在籍する2年生70名（共習群35名、別習群35名）であった。対象授業はバレーボールの全9時間であった。調査内容は、体育授業に関するアンケート、学びの成果を問う事後アンケート、形成的授業評価、授業中の運動強度（Mets）、バレーボールの基礎技能（直上アンダー、直上オーバー）であった。体育授業に関するアンケート、形成的授業評価、運動強度、および基礎技能については一要因にのみ対応のある二要因分散分析を行った。事後アンケートは対応のないt検定を行った。結果、体育授業に関するアンケートでは「バレーボールの授業が好きか」において交互作用が認められ、女子の別習群において事後が事前より有意に高値を示した。事後アンケートでは「楽しむことができたか」「授業を行って互いに協力し、励まし合うことができたか」において女子は別習群が共習群より有意に高値を示した。形成的授業評価では「楽しかったですか」「もっとやってみたいと思いますか」において女子は別習群が共習群より有意に高値を示した。運動強度では、女子において8時間目および9時間目に別習群が共習群より有意に高値を示した。基礎技能では女子において直上アンダーの「膝の曲げ伸ばし」および「身体全体の動き」で交互作用が認められ、別習群において事後が事前より有意に高値を示し、事後において別習群が共習群より有意に高値を示した。中学生のバレーボール授業において男女別習の授業は部分的ではあるものの、特に女子における学習意欲の向上、運動強度の増加および技能の向上につながることを示唆された。